特11
327

通俗中古史略

重野成齋君題辭
二木愛花君閲
豐永喜十郎譯

明治三
貸教育會

版權所有

盛松館出版

序

國立臺灣大學圖書館

金瓶梅

是

古

德

七未

四

下系辭

周書

昌平坂學問所

五

序

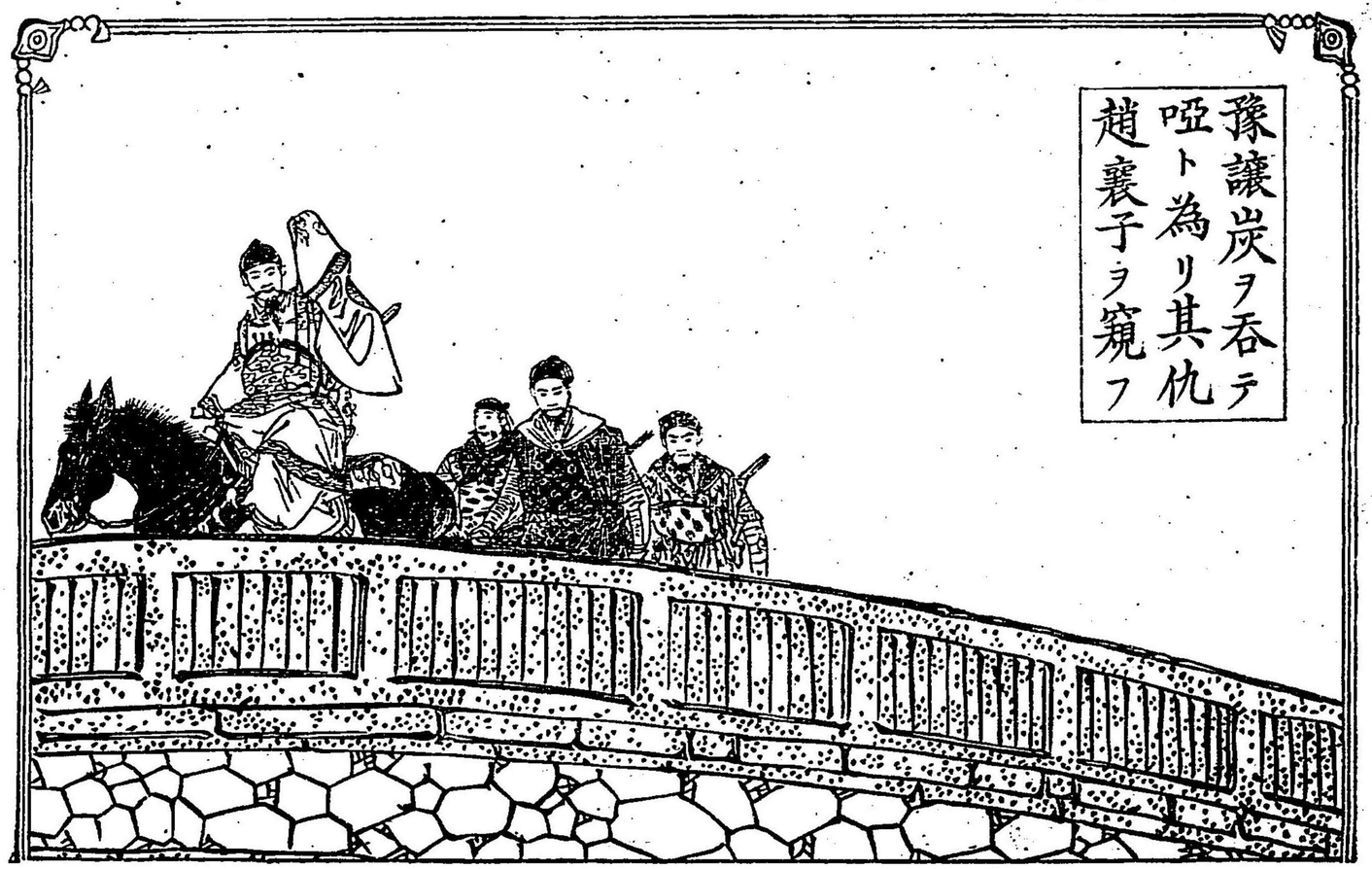
本邦著作之業。無盛于今日。而飜譯刊行西書者最爲多。曰佛之法律。曰英之兵法。米之何々。孛之某某。其麗不億。獨至清國。索然不聞。抑清國也者。今則萎靡不振。然至其邦之舊。世界萬國中。蓋稱幾希。其間四千餘年之久。政治汚隆。郡

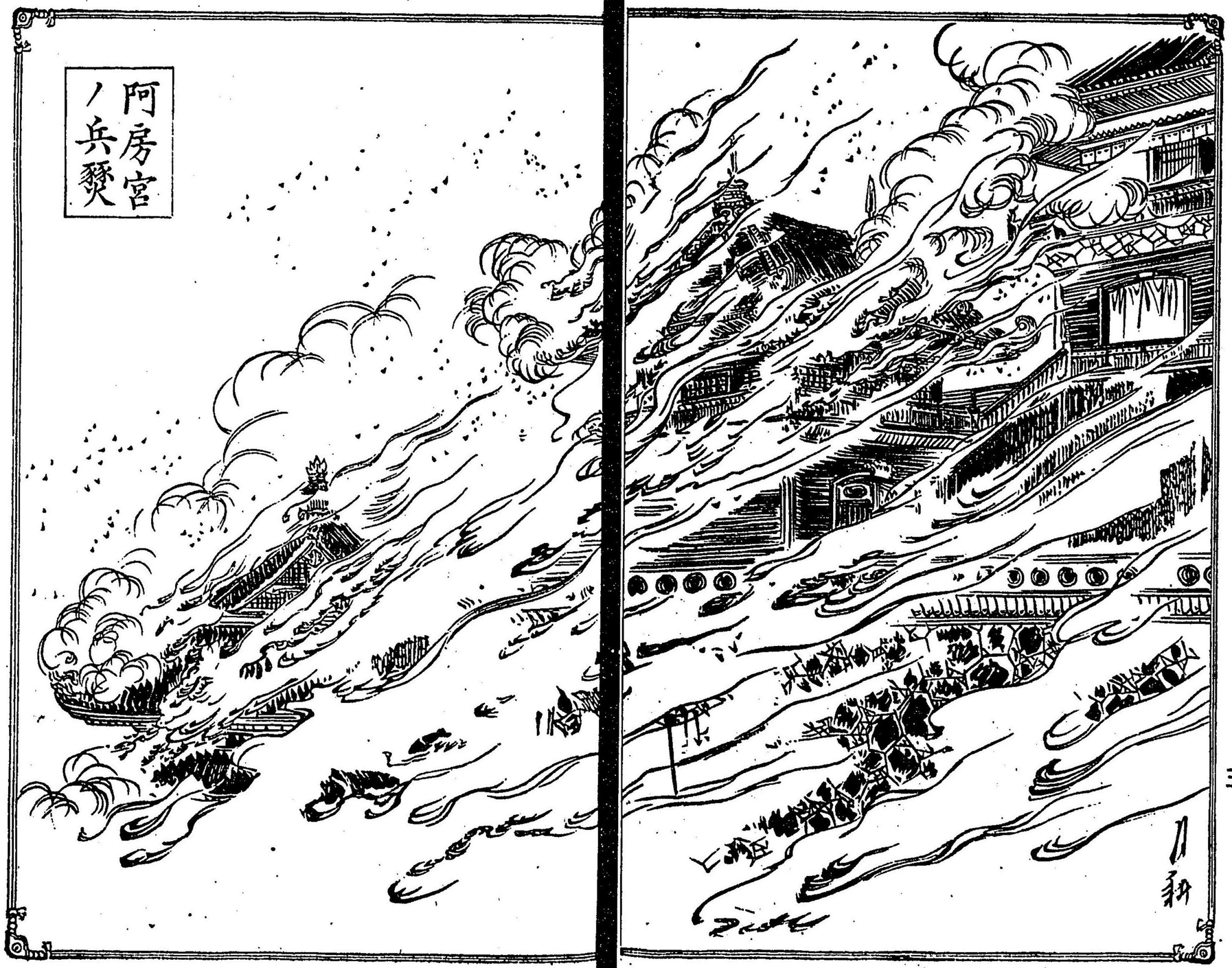
國盛衰。君上賢愚。臣下忠邪。亡國耗政可戒者。佳言善行可傳者。比之泰西諸邦。特爲多々也。以是。法律兵法措不問焉。世人若欲就于歷史探究天下治亂成敗。夫唯清國歟。自古清國歷史。傳行我國者。不一二而足。而大抵卷帙浩瀚。不便于閱讀。其簡而得要者。僅々數部而已。近來十八史畧頻行于坊間。蓋亦此故歟。唯恨其文漢而尚不便童蒙而已。頃者豐永生和譯十八史畧。名曰通俗十八史畧。來求序于余。余喜其用意之切。乃書前言與之云爾。

明治二十年七月中澣

紅夢樓主人

呂尚渭川ニ釣ス


豫讓炭ヲ呑テ
啞ト為リ其仇
趙襄子ヲ窺フ

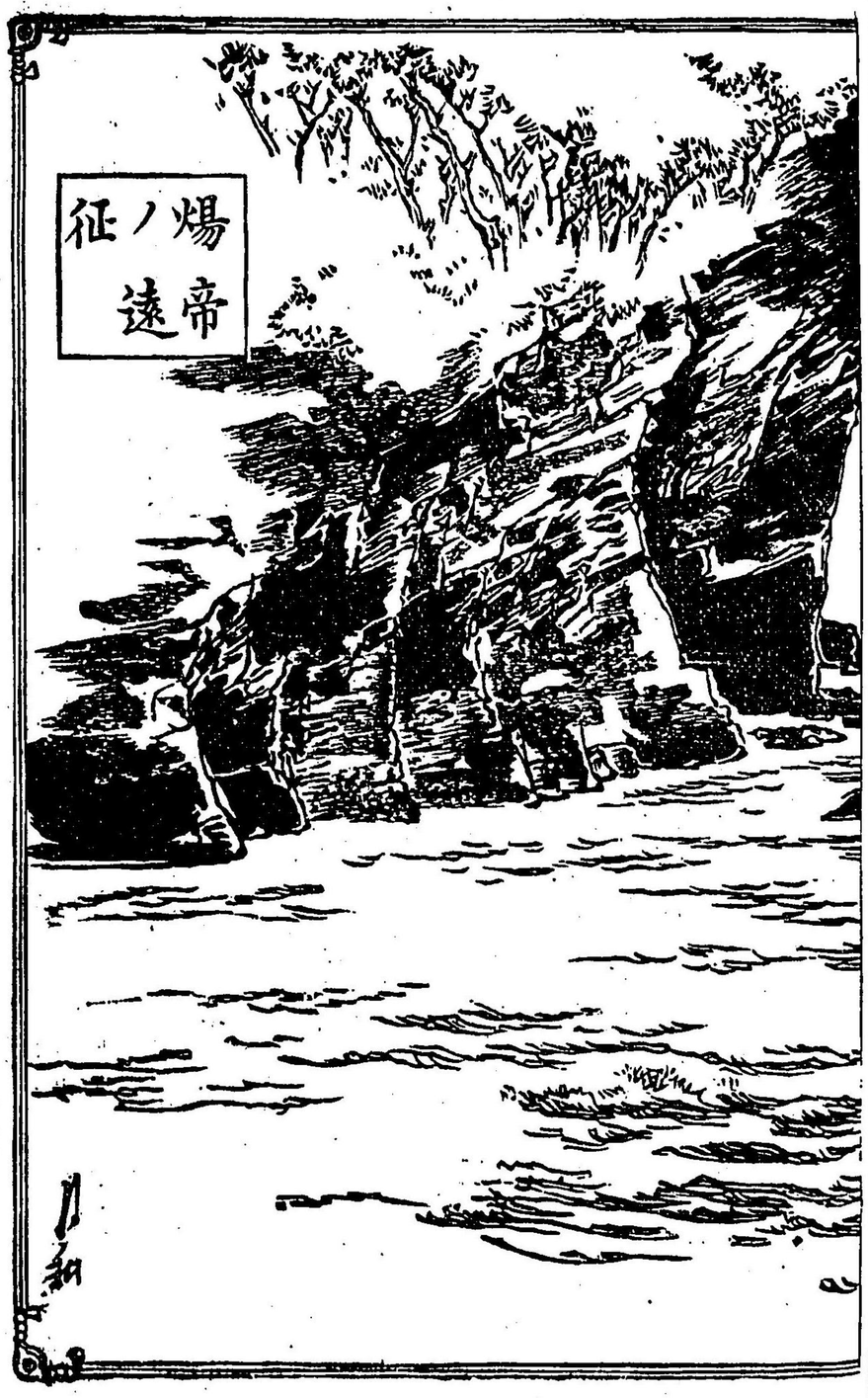


阿房宮ノ兵燹

蕭何月夜ニ韓信ヲ躡ス
杉浦日乃

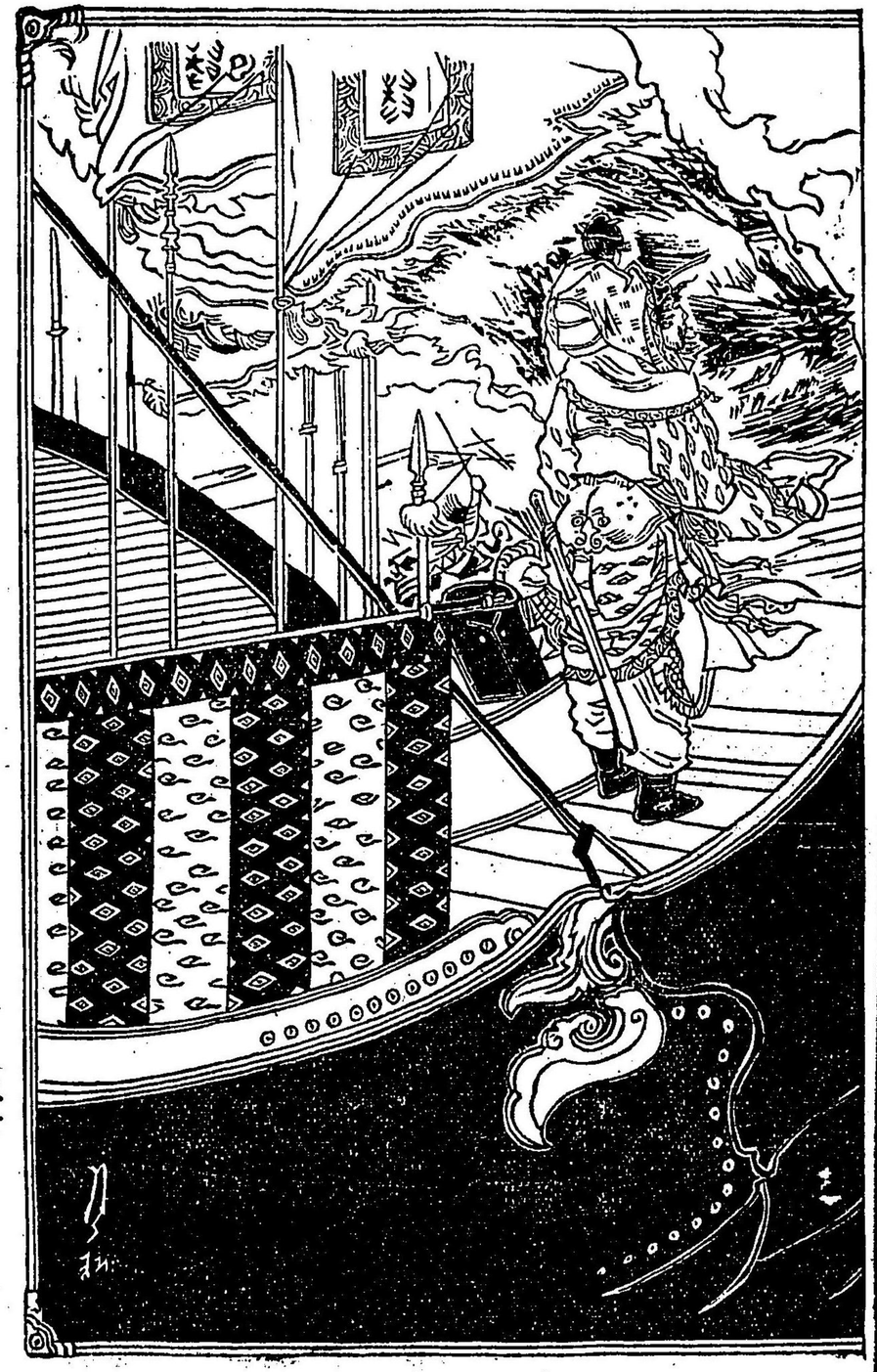
蜀ノ三傑義ヲ桃林ニ結ブ

草廬三顧之圖


煬帝ノ征遠

沈香亭北倚欄干

王銭槍勇戰



崖山ノ戰亡

繪入通俗十八史略總目錄　卷之一

太古の事　二丁
三皇五帝の治世　十丁
禹洪水を治る事並桀王暴虐の事　十二丁
殷の紂王無道の事　十五丁
周武王及其祖先の事並太公望の事　十九丁
成王幷諸王の事　廿五丁
吳國延陵季札の事　廿六丁
伍子胥の事　卅一丁
范蠡の事　三十三丁
蔡國並曹國　仝丁
宋國襄王景公の事並桀宋の話
魯國周公伯禽を敎る事並周公太公望と政治の得失を問答の事　三十五丁
孔子の事　三十六丁
老子の事　四十一丁
衞國　四十二丁
鄭國　四十四丁
晉國重耳覇となる事並介之推の話　仝丁
陳國　四十六丁
齊國齊の祖先の事並管仲の話　四十七丁
晏子の話　四十九丁
田氏齊淳于髡の話幷威王の事　五十丁
孫臏の話　五十三丁
孟嘗君の話　五十五丁
即墨の戰幷田單の話　五十八丁

趙國程嬰公孫杵臼の事　六十二丁
無恤の事幷豫讓の話　六十三丁
蘇秦の話　七十丁
藺相如廉頗の話　七十二丁
平原君の話幷毛遂の話　七十七丁
魏國文侯の事幷田子方の話　七十九丁
吳起の話　八十一丁
張儀の話　八十三丁
信陵君の事　八十五丁
魏國の末路　八十六丁
韓國聶政の話　八十七丁
楚國莊王の事並懷王の事　八十九丁
春申君の話並楚國末路　九十丁
燕國昭王の事並郭隗樂毅の話　九十一丁
荆軻の話並燕の末路　九十三丁
秦國祖先の事並繆公の話　九十五丁
孝公の事並商鞅の話　九十六丁
甘茂宣陽を拔く事　九十九丁
范雎の話　百丁

卷之二

秦

始皇帝の治世　一丁
二世皇帝の治世並諸豪傑義兵を起す事　四丁

西漢

漢太祖高皇帝の事　八丁
漢王韓信陳平を得て義帝の喪を發し項羽と大に彭城に戰ふ事　十二丁

韓信及漢の諸將諸處戰ひの事 並項羽滅亡の事 十五丁
漢王皇帝の位に即く諸將賞罰の事 並都を關中に徙す事 十九丁
諸將誅せらるゝ事 並漢高崩御の事 廿四丁
孝惠皇帝の治世 並呂氏の亂 廿七丁
孝文皇帝の治世 廿八丁
孝景皇帝の治世 並吳王の亂 卅一丁
孝武皇帝 卅二丁
孝昭皇帝の治世 卅七丁
孝宣皇帝の治世 並麒麟閣の事 三十九丁
孝元皇帝の治世 四十四丁
孝成皇帝の治世 四十六丁
孝哀皇帝の治世 四十八丁
孝平皇帝の治世 四十九丁
孺子嬰 並王莽の事 仝丁

卷之三

東漢

世祖光武皇帝の治世 一丁
孝明皇帝の治世 十一丁
孝章皇帝の治世 十二丁
孝和皇帝の治世 十三丁
孝殤皇帝の治世 十五丁
孝安皇帝の治世 仝丁
孝順皇帝の治世 十七丁
孝冲皇帝の治世 十八丁
孝質皇帝の治世 仝丁

孝桓皇帝の治世 十八丁
孝靈皇帝の治世 廿二丁
孝獻皇帝の治世 廿五丁
赤壁の戰の事 廿九丁
曹丕帝と稱する事 三十丁
蜀漢附吳魏 仝丁
照烈皇帝の治世 三十一丁
後皇帝の治世 三十三丁
諸葛孔明祁山より出る事 卅四丁
蜀漢滅亡の事 三十六丁
西晉 仝丁
西晉世祖武皇帝の治世 四十丁
孝惠皇帝の治世 幷四夷蜂起の事 四十二丁
孝懷皇帝の治世 四十六丁
孝愍皇帝の治世 四十七丁

卷之四

東晉

中宗元皇帝の治世 一丁
肅宗皇帝の治世 四丁
顯宗成皇帝の治世 六丁
康皇帝の治世 九丁
孝宗穆皇帝の治世 十丁
哀皇帝の治世 十四丁
帝奕の治世 仝丁
簡文皇帝の治世 十五丁
烈宗孝武皇帝の治世 仝丁

安皇帝の治世　十九丁
恭皇帝の治世　廿一丁
南北朝　仝　丁

宋
高祖武皇帝の治世　二十二丁
廢帝滎陽王の治世　廿三丁
文皇帝の治世　仝　丁
孝武皇帝の治世　三十五丁
廢帝の治世　仝　丁
明皇帝の治世　二十六丁
後廢帝の治世　仝　丁
順皇帝の治世　二十七丁

齊
太祖高皇帝の治世　二十七丁
武皇帝の治世　二十八丁
廢帝鬱林王の治世　仝　丁
廢帝海陵王の治世　仝　丁
明皇帝の治世　二十九丁
廢帝東昏侯の治世　仝　丁
和皇帝の治世　仝　丁

梁
高祖武皇帝の治世　三十丁
簡文皇帝の治世　三十三丁
元皇帝の治世　三十四丁
敬皇帝の治世　三十五丁

陳
高祖武皇帝の治世　三十六丁
文皇帝の治世　仝　丁
廢帝臨海王の治世　仝　丁
宣皇帝の治世　三十七丁
後主長城易公の治世　三十八丁

隋
高祖文皇帝の治世　三十九丁
煬皇帝の治世　四十丁
恭皇帝の治世　四十二丁

卷之五

唐
高祖神堯皇帝の治世　一丁
太宗文武皇帝の治世　四丁
高宗皇帝の治世　十丁
中宗皇帝の治世　十一丁
睿宗皇帝の治世　十五丁
玄宗明皇帝の治世　十六丁
肅宗皇帝の治世　廿一丁
代宗皇帝の治世　廿四丁
德宗皇帝の治世　廿六丁
順宗皇帝の治世　三十丁
憲宗皇帝の治世　卅一丁
穆宗皇帝の治世　卅三丁
敬宗皇帝の治世　卅三丁
文宗皇帝の治世　三十四丁
武宗皇帝の治世　三十五丁

宣宗皇帝の治世　三十六丁
懿宗皇帝の治世　卅八丁
僖宗皇帝の治世　三十九丁
昭宗皇帝の治世　四十丁
哀皇帝の治世　四十二丁

卷之六

五代
梁
太祖皇帝の治世　一丁
均王の事　三丁
唐
莊宗皇帝の治世　五丁
明宗皇帝の治世　八丁
閔帝の治世　九丁
路王の事　仝丁
晉
高祖皇帝の治世　十丁
出帝の治世　十一丁
漢
高祖皇帝の治世　十三丁
隱帝の治世　十四丁
周
太祖皇帝の治世　十五丁
世宗皇帝の治世　十七丁
恭帝の治世　二十一丁
宋

太祖皇帝の治世　二十丁
太宗皇帝の治世　廿八丁
眞宗皇帝の治世　三十二丁
仁宗皇帝の治世　三十七丁
英宗皇帝の治世　四十三丁
神宗皇帝の治世　四十四丁

卷之七

宋
哲宗皇帝の治世　一丁
徽宗皇帝の治世　六丁
欽宗皇帝の治世　九丁
南宋
高宗皇帝の治世　十三丁
孝宗皇帝の治世　二十六丁
光宗皇帝の治世　二十九丁
寧宗皇帝の治世　三十丁
理宗皇帝の治世　三十五丁
度宗皇帝の治世　四十六丁
孝恭懿聖皇帝の治世　四十九丁
端宗皇帝の治世　五十二丁
帝昺の治世　并宋滅亡の事　五十九丁

繪入通俗十八史略總目錄終

繪入通俗十八史略卷之一

廬陵　曾先之原著
三重　豐永喜譯

東京大学総合図書館蔵

天皇氏。木の德を以て王たり。歳に攝提格より起る。無爲にして化す。其兄弟十二人あり。

地皇氏は。火の德を以て王たり。兄弟十二人あり。各一萬八千歳の壽を保てり。

人皇氏

人皇氏は。兄弟九人あり。分れて九州に長たり。凡そ一百五十世。合せて四萬五千六百年。

有巢氏

有巢氏い。人皇氏の後に出づ。木を構へて巢と爲し。木の實を食ふて。生を爲す。

燧人氏

有巢氏より後。燧人氏に至り。初めて燧を鑽て。人に火食を敎ゆ。以上天皇氏より。茲に至るまで。書契以前に在れば。その年代と國都い。攷ふるに由なし。

三皇

太昊伏羲氏

伏羲氏い。風性なり。燧人氏に代つて。王たり。蛇身にして人首あり。始て八卦を畫し。書契を造り。以て結繩の政に代ふ。結繩とい。上古文字あらざるとき。繩を結んで事を記せしなり。嫁娶を制し。儷皮を以て禮と爲す。又網罟を結て佃漁することを敎へ。犧牲を養ふ。庖厨を以てす。故に庖犧と云ふ庖犧い即ち伏羲と音相近し。龍の瑞あり。龍を以て官に記し。龍師と號す。木德の王たり。

女媧氏

女媧氏は。伏羲崩じてのち立つ。亦風姓にして。木德の王たり。始て笙簧を作る。此時諸侯に共工氏と云ものあり。祝融と戰ひ勝たずして怒る。乃ち頭を不周山に觸る。天柱折れ地維飮く。女媧乃ち五色の石を鍊り。以て天を補ひ。鼇の足を斷て。以て四極を立つ。蘆灰を聚めて以て滔水を止む。是に於て地平かに。天成て。舊物を改めず。女媧氏沒して後に共工氏、太庭氏、柏皇氏、中央氏、歷陸氏、驪連氏、赫胥氏、混沌氏、昊英氏、朱襄氏、葛天氏、陰昊氏、無懷氏等あり。風姓の王。相ひ承るもの。十五世。

炎帝神農氏

炎帝神農氏は。姜姓なり。人身にして牛首。風姓の王に繼で立。火德の王たり。木を劉て耜を爲り。木を揉て耒と爲る。始めて畊を敎へ。蜡の祭を作る。赭鞭を以て草木を鞭ち。百草を嘗て。始て醫藥あり。人に日中に市を爲すことを敎へ。交易して退く。初め陳に都し。ろれより曲阜に徙る。帝承、帝臨、帝則、帝百、帝來、帝襄、帝榆に傳ぬ。姜姓凡て八世。五百二十年。

黃帝軒轅氏

黃帝い。少典の子にして。姓い公孫。名い軒轅と曰ふ。生れながらにして神靈。成長して。敦敏聰明なり。時に神農氏の勢衰へて。諸侯互に爭ひ。百姓を虐ると雖も。神農氏。之を征す

ること能はず。民甚だ困るしむ。軒轅。乃ち兵を錬り。諸侯を討つに。諸侯咸く從ひ來りしが。蚩尤最も暴虐よして。伐ち難し。また炎帝。諸侯を侵陵して。黃帝と顓頊せんとせしが。軒轅。能く兵を整へ。民を撫で。國を治めて。炎帝と。坂泉の野ゐ戰ひ。三戰ひて之れに擊ち勝ち。又蚩尤も亂を作して。服せざりければ。黃帝。諸侯より兵を徵して。之を征討し。涿鹿の野にて。之と擒にせり。是より天下の諸侯。皆黃帝に歸服し尊んで天子と仰ぐにより。神農氏に代り。天下の政を執れり。之を黃帝とす。黃帝天子とありてより。民の災をなすものい之を征し。嶮いしき山よい。道を通じて。東西南北に歷巡ぐりて。民の爲めに。勞するゐとを厭はず。左右の大監を置て。萬國を監督せしめ。風后。力牧。常先。大鴻。と云へる。四人の賢人を擧げて。民を治めしめしかば。萬國和らぎ。天下治まりけり。黃帝崩す。之を橋山に葬る。黃帝に二十五人の子あり。中に。黃帝軒轅の丘にありし時。西陵の嫘祖を娶りて。正妃とし。二子を生む。此の二子の子孫。皆天下を有ちけり。其一人を玄囂と曰ふ。是〻青陽と爲す。青陽。江水の邊りに住めり。今一人を昌意と曰ふて。若水の邊よ住み。蜀山氏の女昌僕を娶りて。高陽を生しが。高陽聖德ありければ。黃帝崩せし後。其跡を嗣きて。帝位よ登れり。是を帝顓頊と云ふ

顓頊高陽氏

帝顓頊高陽は。黃帝の孫にして。昌意の子あり。靜肅よして。謀あり。疎通にして。事を知り。地の利を察して。物と種へ。時の寒暖ゐ從ふて。事をあし。天地の神よ。能く事へ。亦た寧居せずして。民の爲めに。力を盡しけり。顓頊子あり。窮蟬といふ。顓頊崩ず。玄囂の孫。高辛立つ。是を帝嚳と爲す。

帝嚳高辛氏

帝嚳高辛は。黃帝の曾孫なり。高辛の父を蟜極と曰ひ。蟜極の父を。玄囂といひ。玄囂の父を。黃帝とす。玄囂蟜極共に。父の位を繼ぐことを得ず。高辛に至て。帝位に即けり。高辛生れながら神靈よして。普く施して。物を利するゐとを好み。聰明にして。大なる事。小なるゐと。之と知らずと云ふことなく。仁にして威あり。惠よして信あり。己の身を脩めて。天下を率ゐ。物を儉約して。民を撫でしかば。日月の照す所。風雨の及ぶ所の國。悉く服從せざることあし。帝嚳陳鋒氏の女を娶りて。放勛を生み。娶訾氏の女を娶りて。摯を生む。帝嚳崩じて後。子摯代り立ち。幾あらずして崩せしかば。弟放勛代り立ち。是を帝堯と云ふ。

帝堯陶唐氏

帝堯。放勛い。其仁天の如く。其知神の如く。富めども驕らず。貴けれども誇らず。身質素を貴びて。天下を敎へしかば。天下平かゐ。白姓安らぐ。義和。義仲。義叔。和仲。和叔。の五人に命じ。郁弟。南交。西土。北方。の處々に居らしめ。或い天文を測り。以て民に農時を授け。寒暖の時を。過たざらしめられば。民皆其業を勤めけり。帝堯一日。誰か朕に嗣ぎて。天下を治むべき者かあると云ふに。放齊といへる人。御子丹朱賢明なれば宜しく帝位に立つべしと云ふ。堯曰く。彼い頑凶なれば用べからずと。又讙兜と云へる人。共工こそ善けれと。勦むれば。堯曰く。彼い表面のみあり用べからずと。終に之を退く。堯是に於て。誰か賢人ぞと。問ふ。衆皆虞舜と云へる者ありと勸む。堯曰く。朕も其名を聞く。舜い如何ゐる者ぞと問ふ。一人の大臣曰く。盲者の子にして。父い頑よ。母は嚚しく。弟傲れる者なるが。舜能く道を守りて遂よ父母弟をして。不道よ陷いらざらし免し程の者なりと答へければ。堯さらばとて。己の二女を以て之に妻いし。嬀汭よ居らしむ。既にして。其一家を治ること。道に協ひしかば。之を舉げて官に就かせしに。皆善く其任よ適ひしにより。己い退隱し。舜をして。天下の政事を攝ね行

はしめ。尙ほ其行を觀るゐ。舜の爲す所。一として法ゐ背きたることなく。天下を巡りて。諸侯の善惡を察し。歸り來て。堯に申し。共工を幽陵よ流し。驩兜を崇山に放ち。三苗と三危に遷し。鯀を羽山に殛し。各其罪を正しければ。天下皆其公正なるに服しけり。堯位に即きしより。七十年にして。舜を得。其れより二十年ゐして老し。位を舜よ讓りてより。二十八年よして崩ず。百姓嘆き哀しむこと。父母を喪ふが如く。三年の間。四方樂をなす者なし。初め堯の子丹朱。不肖にして。天下を授くるよ足らず。堯依て位を。舜ゐ授けんとす。其意に曰ふ。舜よ位を授くれば。天下其利を蒙むりて。丹朱一人の損となり。丹朱に位を授くれば。天下の損となりて。丹朱一人の利となるのと。去れば天下を損して。一人を利せずとて。卒に舜に位を授けゝり。堯崩じてより。三年の喪畢いりし時。舜南河の南よ遁れて。位を丹朱よ讓りしに。天下の諸侯。丹朱に朝覲する者ゐくして。舜の方ゐ赴き。人民も皆舜の方ゐ。思を屬けれい。舜も今い。天なりとて。天子の位を踐みけり。是を帝舜と爲す。

帝舜有虞氏

虞舜い。名を重華と曰ふ。重華の父ゑ瞽瞍と曰ひ。瞽瞍の父い橋牛。橋牛の父は句望。句望

の父ハ敬康。敬康の父ハ窮蟬。窮蟬の父ハ帝顓頊。帝顓頊の父ハ昌意なり。即ち舜に至る迄。七代あり。窮蟬より。帝舜に至る迄。民間ゑ落ちて。庶人となり。冀州に住めり。舜の父瞽瞍。盲目にして。舜の母死せし後。更ゑ後妻を娶り。其腹に一人の象と云ふ男子出來たりしかば。瞽瞍之を愛して。舜を殺して。己の後を。象に嗣せんとせしゑ。舜ハ更に恨める色なく。父母に。事ること益厚し。舜二十にして。孝行の名高く。三十ゑして。堯ゑ知られ。其女を以て妻となし。共ゑ歴山ゑ耕し。雷澤に漁し。河濱に居て陶器を作る。舜歴山に耕せバ。歴山の人。皆畔を讓り。雷澤に漁りするときハ。雷澤の人。互に塲處を讓り。河濱ゑ陶器を作るときハ。他の作る者。舜に效ふて。粗末の品を作らず。是れ皆舜の德に化せられてなり。舜の居る所は。一年の中ゑ居をなし。二年に邑をなし。三年ゑ都をなし。次第に繁華ゑ赴きけり。然るに瞽瞍ハ。倘ほ舜を殺さんと計り。一日舜ゑ廩を塗とて。廩の上ゑ舜を舛らしめ。下より火を放しに。舜驚きて。兩つの笠を。双の手に取り。翼の如くなして。飛ひ下り。其命を助かりけり。又瞽瞍。舜ゑ命し井ゑ入りて。泥を浚ハしめ。上より象と共に。土石を投け入て。井を塡充しに。舜他の穴よりして。逃れ出で。又命を助かり。家に至れバ。象ハ。舜の室に在りて。琴を皷し居りしが。舜の入り來るを見て。大ゑ驚きしが。然る氣色を顯さず。我兄君を思ふて。心樂しまず居たりと云ふ。舜ハ。倘之を疑ひ恨める氣色なく。益之を愛しけり。帝既に舜の用ゆべきを知り。重き官に任せしゑ。舜先づ八愷と云ふ。才子八人と。八元と云ふ。才子八人の。十六族と。擧け用ゐ。百事を揆り。五教を布かしめしかは。民皆父ハ義ゑ。母ハ慈に。兄ハ友愛ゑ。弟ハ恭敬に。子孝行になりにけり。又た渾沌と云へる不才子と。窮奇と云へる不才子と。檮杌と云へる。不才子の三族を罪しければ。天下大に治まりけり。堯崩じ。舜位に即き。禹。皐陶。契。后稷。伯夷。夔。龍。垂。益。彭祖などの賢人をして。各其職と分ちて。事を司らしめ。禹をして。堯の時よりの水を治めしめしに。各其任に適ひて。皐陶。大理となれバ。民冤罪なく。伯夷。禮を主れバ。上下咸く讓り合ひ。垂。工師を主れば。百工功と致し。益虞を主れバ。山澤辟け。棄。稷を主れバ。百穀茂り。契。司徒を主れば。百姓親和し。龍。賓客を主れバ。遠人至る。皆其功ある此の如し。中ゑも禹の功を第一とす。九山を披き。九澤を通じ。九河を決し。九州を定め。其國々をして。各其土地の産物を貢がしめ又た遼き蠻夷をして。咸く帝舜の功を戴かし奈けり。寔ゑ天下の明德ハ。虞帝より始れり。舜六十一の時。堯ゑ代りて。帝位を踐ゑ

其より三十九年にして。南に巡狩して。蒼悟の野に崩す。江南の九疑に葬り。是を蠻陵と爲す。舜帝位に即くといへども。父瞽瞍に事へ。曾て子たるの道に背かず。弟象を封して。諸侯とあしぬ。子の商均。不肖なりしかば。帝位に。禹に讓りけり。禹の商均に讓れること。舜の丹朱に讓れる如くなせしも。諸侯皆禹に歸せしかば。禹位に登り。商均に。別に疆土を與へて。先祀を奉せしめ。其禮樂を用ゐしめ。之を臣とせず。賓客の禮を以て。待遇ひける。初め舜の堯の子丹朱に於るも亦斯の若き禮を以て。待遇ひしなり。黃帝より。舜禹に至る迄。其姓は皆同じと雖も。其國號を異にして。何れも德を明にしけり。黃帝を有熊と爲し。帝顓頊を高陽と爲し。帝嚳を高辛と爲し。帝堯を陶唐と爲し。帝舜を有虞と爲し。帝禹を夏后と爲す。而して禹猶り氏を別にし。姓を似氏と云ふ

禹洪水を治る事 並 桀王の事

帝堯の時。天下大洪水あり。陸地皆海となりければ。堯鯀に命して之を治し免しに。九年を經て。其功なし。舜之を見て鯀を誅し。舜の世に至りて。禹をして。之を治めしめけり。禹は名を文命と云ふ。父は即ち鯀にして。鯀の父を帝顓頊となし。顓頊の父を昌意となし。昌意の父を

黃帝とす。即ち禹は。黃帝の玄孫にして。顓頊の孫なり。禹人と爲り。敏給にして克く勤む。水を治むべき命を受てより。常に父の鯀。水を治むるの功あらずして。誅を受けしにとを。傷みしかば。身を勞し思を焦して。家に歸らざること十三年。家の門を過れども。一足だも閾に蹈み入らず。己の衣食。居住の所を卑ふして費を除き。之を皆溝洫の事に用ゐ。陸を行くときは車に乘り。水を行くときは。船に乘り。泥の所を行くには橇に乘り。山を行くには檏に乘り。以て四方を巡りて。九州を開き。九道を通し。九澤に陂を築き。九山を度りて。各其處を定め。益に命じて。衆民に稻を予へて。卑濕の地に種へしめ。后稷に命じて。衆民をして。互に有無を通せしめ。此れに餘り彼れに足らざるの憂ひなからしめけり。禹の天下を行ぐる。先づ冀州より始め。各其地味を察して。上中下の等差を立て。其等差に從て。租稅の額を定め。其租稅は。各其土地の產物を以てせしめ。九山。九川皆其路を得てければ。天下初めて治りけり。帝舜其功を嘉し。終に禹に位を讓る。禹。舜の德を頌し。兼て帝王たるものを誡めける。禹舜の讓を受け。帝位に即きしが。後皐陶を舉げて。之に位を與へんとせしに。適ま皐陶死せしかば。益に位を讓らんとて。政を攝ね行は

しめしよ。禹崩じて後。天下の諸侯。益よ從はずして。禹の子啓の方に從ひしかば。啓遂に父の位を嗣けり。啓より後。孔甲の世に至て。淫亂を事とし。政を修めざりければ。諸侯叛く者有り。此時天より。雌雄二の龍を降せり。孔甲之を豢いしめんとて。其人を求めしに。陶唐の後にして。劉累と云へる者。龍を擾すことを。豢龍氏よ學びしとて。孔甲に事へしかば。孔甲之よ姓を御龍氏と賜ひて。冢韋の後を受けしめ。龍を養いせけるに。雌龍死せしかば。劉累之を料理して。孔甲に食はしめけるに。其味至つて。旨かりしかば。其後再び。劉累に。其食を上つれと求めしに。劉累い。其食の再び得らるべきにあらざれば。罪を得んことを懼れて。逃れ去れり。桀の代ゐ至り。德を以て。民を撫するゐとを務めず。只暴威を以て。民を虐げ。賢人の湯を囚へて。夏臺の獄屋に押込なゞそ。湯釋されて後。德を修め。諸侯を歸服せしめ。遂に民の苦を救いんとて。兵を率ゐ。桀を討ち。之を鳴條に流す。桀卒に此よ死す桀時に湯を夏臺にて。殺さいりしこと。返〳〵も悔やしけれと言ひ死に死よけり。其後裔い周の世よ至り。杞ゐ封せられて血統を殘しけり。

殷の紂王無道の事

湯。姓い子。名は履。契の發裔なり。夏の桀王。無道ある時に當りて。德を修めて。天下の望を取り。伊尹と云へる賢人を用ゐ。夏を亡し。國號を殷と改め。天下を治ひ。後武丁に至り。傅說と云へる賢人を得て。殷の業益〻盛なりしが。武乙に至り。無道にして。偶人を爲り。天神と名け。之と賭事を爲し。人よ神に代りて之をおさしめ。若し天神の勝ざるときは。之を罵り辱かしめ。又た革の囊を爲りて。其中に血を入れ。之を釣りて下より射て。朕い天を射るなりと云ひ。かゝる事をして樂しみしが。或日獵に出しとき雷の爲に。擊たれて死にけり。後紂王の世よ至り。王生れ付き。怜悧にして。勇力あり。手い猛獸を打ち殺すの力あり。智い人の諫を拒ぎ。言い己の非を云ひ飾ろふの辯ゐれば。曾て人の言を聽かず。只己の思ふ儘に働き。或時象牙の箸を爲らせけり。時に箕子と云へる賢人ゐりて。之を見。王い象牙の箸を爲られたり。其れにては。土にて燒ける碗にてい。協ふまじければ。玉の杯と爲らざれば。相應いしからざるべし。象箸玉杯ならば。藜藿を羹にし。短褐を衣て。茆茨にい住いれまじ。定めて錦衣九重。高臺廣室と。漸〻に其れ相應なる。驕りを增に至るへしと歎けるが。紂王其後果して。妲己と云へる女を寵愛なし。其言ふゐとは。何ごとも聞き入れて。租稅を重くして。鹿臺と云へる

臺に。財寶を積み。鉅橋の倉に粟と盈て。沙丘。苑臺あとの。高閣を築き立て。酒にて池を爲らへ。肉にて林を爲り。長夜の飲と名付けて。晝夜飲酒にのみ。心を委ねて。國の事わ。意を用ゐざりければ。人民皆怨みて。諸侯の中わも。謀叛を企つる者ありければ。紂王乃ち。刑罰を重くし。銅の柱を爲り。之に膏を塗りたるを。橋に渡し。其下に炭火を熾になし。罪人をして。其上を渡らせ。足の滑べりて。罪人火の中に。墮ちるを見て。姐巳と共に。之を樂しみ。之を炮烙の刑と名付けて。喜びけり。紂王の淫虐かくの如く甚しかりしかば。紂王の異母兄。微子と云へる賢人。數々之を諫むれども。聽かれず。終に何れへか逃れ去り。又比干と云へる賢人。之を諫めけるに。王い大いに怒りて。聖人の心に七竅ありと聞き及べり。誠なるやらん。此の聖人の。心の中を試しみんとて。比干の心を剖きけり。かゝる有様に。箕子は。世の未を思ひを窮め。佯いりて狂人の狀となり居しゝ。是又紂王に囚はれけり。時に周侯昌。九侯。鄂侯とて。紂の三公ありしに。紂い無殘にも。九侯を殺しけれい。鄂侯之を止めしに。王又之を殺し。其肉を脯わしたり。昌此事を歎息せしとて。羑里の獄屋に囚へけるが。昌の家來に。散宜生と云へるものありて。美女珍寶を多く。紂王に獻じけれは。紂王大に悅び。昌を釋しけるが。遂に昌の子發の爲に。牧野に攻められ。軍敗れて。寶玉を身に纏ひ。火に投じて死し。殷卒に亡びけり。箕子其後周に往かんとて。殷の城趾を通り過ぎ。宮室の荒れ果てゝ。禾黍の生ひ茂れるを觀て。最と傷ましきまとに思ひ。麥秀でゝ漸々たり。禾黍油々たり。彼の狡童。我と好からすと云ふ。麥秀と云ふ歌を作くりて嘆きしかい。殷の民之を聞て皆涙を流しけり。

周武王の事 並 其先祖の事及大公望の事

周の武王。姓い姬。名い發。后稷十六世の孫あり。后稷い初めの名を棄と云ふ。其母い姜源と。帝嚳の元妃たり。姜源一日野に遊びしに。巨人の足跡あるを見て。心に欣然として喜び。之を踐しわ。不思議にも。之より妊みて棄を生しかば。不祥の子なりとて。隘き巷に棄てけるに。其處を通り過る。馬牛ども。皆避けて蹴ず。之を山林に。徙し置んとせしに。會其處に人多く居りけれは。此處も惡しとて。或る河の氷の上に遷し棄しに。鳥來りて。翼と以て之を覆ひ暖めしかば。母の姜源。是は神あるべしとて。遂に之を棄てず。然れども一度棄てたる子なればとて。棄と名づけて育てけり。棄幼きより大人の如く。戲ふるゝにも他の稚兒と異れり。殊に種樹の事を好み。人となるに及びて能く地の善惡を相。民に稼穡の事を教へけるが。陶

唐の世に用ゐられ。農師となり。虞夏の時に至り。邰に封ぜられ。姓を后稷と賜はりける。其子孫豳國に遷り居しか。古公亶父の時に至り。獯鬻と云へる夷より。土地を侵さるゝこと度々なり。古公亶父。是れ吾の有れゝあろ。かく土地を爭ふことの。出來るあり。何で吾一人の爲めに。多くの民を。苦しむることかゝ。此土地欲しくゝ。與へんとて。豳を去り。漆沮を渡り。梁山を踰へ。岐山の下に止まり居けるに。豳の人ども。是れ仁人なり。斯る人にこそ從ふへしとて。老ひたる者ゝ手を扶け引き。幼きものゝ懷ゐ抱きかゝへて。其跡を慕ひ來りけれ。他の近邊なる諸國も。此の事を聞き傳へ。我も々々とて。從ひ來り。前に增して。益盛んとなれり。古公亶父ゝ太伯。虞仲。季歷。と云へる三人の子あり。少子季歷の妃太任の腹に。昌を生みたり。昌の生れし時。聖瑞ありしを以て。古公亶父の心中。之を吾後に立てんことを思ひしゝ。太伯。虞仲の二人。疾に其意と悟り。世を季歷に讓りて。藥を取るに托して。荆蠻ゐ赴ひき。髮を斷ち。身に文しけれゝ古公亶父世を季歷に讓り。其より昌に讓り。昌遂に立ちて世を繼けゝ。之を西伯となす。西伯一向ら德を修め。諸人を歸服させけり。時に虞の人。芮の人と。田の堺を爭ひて。久しく其理非を分たざりしが。周の西伯ゝ賢人あ

しと聞き。此の人に理非を判ち貰らゝんと。二人連れて。周に來りしに。周の人耕す者ゝ。互ゝ畔を遜り。道行く人ゝ。年上の者ゐ路を讓りそ。過りけるを見。其二人ゝ相語りて。吾々の爭ふ所の事ゝ。周人の恥とする所なり。今迄爭ひしことの。心恥かしけれと。二人共に途より立ち歸り。爭ひし田地ゝ互に讓りて。取らざりける。西伯の德ゝ此の如きを聞き。漢水より南の方の諸侯。四十國と云へる者。皆西伯ゝ從ひけれゝ。西伯ゝ。天下を分て三となし。自ら其二を有ちけり。時に呂尙と云へる聖人ゐり。家甚だ貧困にして。年七十餘に及び。獨渭水の邊に住みて。魚と釣て。不樂しき世を送りたり。茲に又西伯ゝ。一日獵ゝ出んとて。之と筮ゝしけるゝ。卜者の言ひけるやう。今日の獲物ゝ。猛獸者の類にあらす。覇王の補とあるべき者を。獲給ゝんと言ひけるに。西伯渭水の邊に至り。呂尙の釣りする狀の。何とゝなく常ならぬと見て。是れぞ卜者の言ひし者ならんとて。近より事と問ひしに。其言一々理に適ひ。道ゝ合ひしかは。大に悅ひ。且つ先君大公が。常に聖人ゐりて周ゝ來るべし。周其人を得て。大に興る事あるべしと云ゝれしゝ。眞ゝ是の人の事あらん。此の人ゝ。太公の久しく望ゝ給ひし人なれゝ。太公望と申すべしとて。呂尙を太公望と號し。己の乘る車に。共に打ち乘せて。歸り

來たり。日々之に師匠として。事へ。又た尊びて師尚父と呼びけり。西伯卒して。子の發に至り。盟津に至り。兵揃をおしける其道にて。白魚ありて。發の乘れる舟の中よ跳り入れり。發此い吉瑞ありとて。自ら之を取り上げ。神に供へ祭りけり。其より盟津に至りしよ。天下の諸侯。約せざるに來り會する者八百。此の時殷の紂王。淫虐なりしかい。諸侯皆發に之を討りべしと勸めしが。發は時未だ至らずとて引き歸りけり。紂王天下の諸侯。此の如く西伯に歸し。己に叛くも。無道の行を淺めさりしかい。發り今いとて。父の威を頂く心よて。西伯の木主を。車に載せ。之を先に立て。遂に殷を亡し。天子と爲り。古公を追ひ尊んで。大王と爲し。公季を王季となし。西伯を文王と爲し。發い武王と稱し。天下悉く周に從ひたり。初め伯夷叔齊と云へる二人の聖人あり。發の殷を討つと聞き。殷は主なり。主に干戈を向ること。道あらすと諫めしに用ゐられを。既に武王殷を亡し。天下終に之に歸せしを見て。周の粟を食ふことを恥て。身の汚れとおし。首陽山に身を隱し。彼の西山に登て。其薇を采る。暴を以て暴に易ゆ。其非を知らず。神農虞夏忽焉として沒しぬ。我安にか適歸せん。于嗟徂ん。命の衰へたるかな。と云へる歌を作くり。遂に一粒の粟一杯の水も飲まずして餓死してけり。武王の後。

子成王立ちしが。未ざ幼稚なりしかバ。叔父の周公冢宰として。天下の政を攝ぬ行ひしが。周公の兄弟よ。管叔。蔡叔の二人あり。周公の勢强きを嫉く思ひ。武王が殷の後を殘ざん爲めに。紂の子祿父を立て。武庚と名けしを。擁して亂を作さんと計り。先づ周公を除かんとて。周公い成王を除きて。天下を奪ふの計ありと。盲ひ觸らしける。周公疾くも其計を知り。武庚。管叔を誅して。蔡叔を流罪におしければ。天下遂よ太平となり。成王長ぜて。政を執りける。

成王並諸王の事

武王の時。鎬京を作くり。宗周と名け。是を西都と爲し。又た洛邑に京と營まんと計りしが。其事の果てざる中に武王崩せしかば。成王の代に至り。其志を繼ぎ成さんとて。召公をして。其地の形勢を相せしめ。周公をして其地に至り。王城を築かしめ。是を東都となしけり。抑此の洛に都せしまとい。此の地い。天下の中央にして。四方の地より入貢するに。道路の均しきを以て。何より來るも。其勞に過不及の。怨わらざるべしとて。王い常に西都に居るも。諸侯の朝會い。此の東都よて受けられけり。是より周公召公の二人。成王と扶けて。左右の人

となり。陝より西の方い。召公之を司配し。陝より東の方い。周公之を司配することゝして。政をなしけれゞ。天下い泰平と唱へける。其の德遠く外國に迄聞えて。交趾の南に在る越裳氏は。三處にて。其語を飜譯し來りて。白き雉を献ず。其飜譯の言に。吾國の黃耆の言に。此頃烈風淫雨なく。四海波靜なるあと。三年の久しきに及へり。意ふに是い。中國に聖人ありて。世を治むるに因るありとのことゆゑよ。斯く遙々と。德を慕ひて。來れるなりとぞ書きたり。周公い之を見て。是は我力にあらず。王の德ありとて。之を王に上る。成王い是い先祖の德なりとて。其雉を宗廟よ薦められけり。斯くて其使者。暇を賜いり歸らんとせしが。歸路に迷ひけれゞ。周公之あ磁石を以て作りたる。南の方のみを指し示す。器の付きたる車を。五輛程賜はりけれゞ。其使者共此に乘りて。扶南。林邑の海の際に沿ひて。一年餘の月日を經て。國に歸りけり。此の車を指南車と名づけて。常に道の先導を爲し。遠人を服して。四方を正すことを示しける。成王の後。其子庚王釗立しが。成王。庚王の兩朝は天下能く治まりて。刑罰を取り行いざること。殆んど四十年餘の久しきに及べり。其後昭王瑕に至り。德を失ひければ。南の方を巡狩し。楚に至り。漢水を渡りしとき。舟人膠にて爲くりし舟に。王と乘らしめけれ

ば。中流に至りて。舟次第よ盪けて。王い水の中に沈みける。子穆王滿繼て立つよ及び。造父と云へる者ゆり。善く馬を御ふを以て。穆王之を寵愛しけるが。時よ絶地。飜雨。奔宵。超景。踰輝。超光。騰霧。桂翼と云へる八匹の。駿馬を得ければ。造父を御者として。天下を遊行しけり。御者は名人の造父なり。馬は天下の駿馬八匹あり。天下の地とし。王の車轍馬跡のわらざる處なし。終に西に巡りて。西王母の處に至り。瑤地の上にて。西王母よ會し。共に飲酒を樂みて。歸ることを忘れけるよ。徐の偃王。王の在らざるに乘じ。亂を作すと聞き。王大よ驚き造父を御として。直ちよ歸り來り。楚をして援兵を出さし先。其亂を平らけ。且其亂の起りは。犬戎よりせしと聞き。進んで犬戎を征せんとし。祭公謀父等が諫めて先王い。德を耀して。兵を觀めさずと云ふを聽かず。終に兵を出して。征伐なしけるが。さしたる功もなく。只四疋の白狼と。四匹の白鹿を獲て歸りける。是より遠方の諸國來らず。兎角王の命に從いざりけり。後夷王燮の時に至りてい。王の威益衰へ。王は堂より下りて。諸侯に揖拶しける程にて。此時始めて。楚の國王と僭稱しけり。夷王の子。厲王胡に至りてい。無道にして。暴虐侈傲の振舞のみなりしかば。天下の人。王の事を。非難する者多かりし。王之を忌み。衛の國の巫を

して。王を謗る者を監せしめ。謗る者あれば。直ちに之を殺しければ。天下の人。大に恐れて。此後は何事をも言いず。道に相合ふも。互ひに目を以て話し合いける。王い之を見て。吾ころ能く天下の謗を弭めたれと誇りけるか。或人王に向ひ。是只障ぐのみなり。夫れ民の口を防ぐい。川の水を堰き防ぐよりも。其害甚し。水い壅れて潰ゆれは。人を傷ふること多し。然れども。其害一方ふ止まるのミ。民の口の堰かれて潰ゆれは。其害の至る處知るべからず。と諫めけるに。王少しも聽ける色なく。始めよ増して。無道なりしかば。國人嘖やく畔くよ至りしかい。流石の王も。敵いずして。彘に出奔す。因て二人の宰相。周公召公(是い周公旦。召公奭よわらす。二公の子孫。代々宰相と為れるゝ。凡べて周公。召公と呼びけるあり)共に謀りて。國事を理めしかば。之を共和と云ふ。斯くなすこと。十四年にして。厲王い彘の地ふ崩せしかい。宣王靜を立て王とす。宣王い。父祖に異りて。賢に任じ能を使ひ。召穆公。方叔。尹吉甫。仲山甫等の賢人を用ゐて。内外の政を爲せしかば。王化復た行はれける。是を周の中興の王と稱しける。子幽王宮涅に至り。甚だ暗君にて。褒姒を愛して天下を亂さんとす。是より先き。夏后氏の世に。二疋の龍。王の庭に降りて。予い褒の二君なりと云ふ。夏后氏其漦を堅く藏め。夏殷二代の間。誰も之を發く者なかりしが。周に至り之を發きしに。不思議にも。其漦化して黿と爲りしよ。童女あり之に出遇ひて孕ミ。女子を生けるが。不吉なりとて。之を棄てけり。宣王の時の。童謠に。檿弧箕服。實ふ周國を亡さん。と云ひけるに。其時適其檿弧箕服を鬻く者ありければ。宣王忌ひしく思ひ。之を執いせんとせしに。其商人早くも。其事を聞き逃れ去らんとせしが。其道にて棄たる女子に逢ひ。不便に思ひて。之を拾ひ上げ。褒の國に遁れけるが。是の女人と成るに從て。花の顏。月の眉。天下に例少なき。美人となれり。幽王の代に至り。褒人の罪を犯せし者。王の怒を恐れて。是の女を上りけり。是即ち褒姒なり。王大に悅び。之を寵愛すること淺からず。然るに褒姒笑ことを好まず。王い亦其笑いんことを望みて。兎やせば笑いんか。斯くせば笑いんかと。百方手を盡せしが。褒姒い少しも笑いざるに。王は愈心を痛めける。是より前き。王諸侯に向ひ。若し寇の至ることありしとき。烽火と舉けて。兵を召すにより。速かふ來り援けよと約せしが。王一日故あきに。烽火を舉く。諸侯之を望ミて。すは大事ころとて駈け集まりしに。固より故なきことなれば。寇のあらんやうもなく。空しく控へたりしを見て褒姒何と思ひしや。初めて大に笑ひける。王是より

褒姒の笑を望めるときゝ。徒に烽火を擧て。空しく諸侯の兵を集め。褒姒の笑を見て樂しみけり。笑いざるも。之を愛したりしに。況して笑る顔を見てしより。王の褒姒を愛すること益深く。皇后の申氏。太子の宜臼を廢し。褒姒を以て后となし。其子伯服を太子と爲す。宜臼則ち申に奔りければ。王申に使を立て。宜臼を殺さんことを求めしめしよ。申は其命に從いざりしはか。王直ちよ兵を起して申を伐つ。申ゝ援を犬戎に求め。逆に王を攻む。王大に周章し。烽火を擧げて。援兵を徵せしに諸侯ゝ。復た褒姒の爲めかとて。一人の兵を率て來るものなし。因て王遂に敗られて。犬戎の爲めに驪山の下に殺されたり。諸侯宜臼を立つ。是を平王と爲す。西都ゝ戎に逼り近きを以て。東都の王城よ徙り居けり。時に周室の威力。衰微して。諸侯の強き者ゝ弱き者を并せ。齊。楚。秦。晋始めて大國とあれり。此の平王の王位よ即きしより。四十九年ゝ。魯の隱公元年に當れり。後に孔子の春秋を修むるよと。此の時を始めとせり。即ち春秋の世と稱そるは。是の時よりなり。厲王胡齊の時。齊の桓公始めて霸となり。簡王夷の時。吳始めて王と僭稱し。靈王泄心の世に孔子生れ。敬王丐の時。孔子歿し。威烈王午に至り晋の趙氏。魏氏。韓氏始めて侯とあり。周の威益衰へ。諸侯互に爭そひける。之を、

戰國の世と號す。後赧王延に至り。天下の諸侯と。秦を攻めんことを約し。反て秦よ攻めらゝ。遂に秦に降參し。周卒に亡びける。成王の時。周公卜ひて周は世と傳ふること三十。年ゝ七百を歷べしと云ひしが。三十七世。八百六十七年よして亡びける。

春秋の時の國々にゝ。魯。衛。晋。鄭。曹。蔡。燕。吳。齊。宋。陳。楚。秦。是等ゝ皆大なる者あり。其小にして春秋に書しある者ゝ。杞。許。滕。薛。邾。莒。江。黃の屬あり。此の中に付きても。齊の桓公。宋の襄公。晋の文公。秦の穆公。楚の莊王之を五霸と稱す。

戰國の時の七大國よゝ。秦。楚。燕。齊。趙。魏。韓。にして。其中。秦。楚。燕。ゝ春秋の時よりの舊國よして。田齊。趙。魏。韓ゝ。戰國とありしよりの新國たり。

吳國延陵季札の事

吳は太伯仲雍の。封ぜられし所にして。其十九世の孫。壽夢に至り。始めて王と稱す。此壽夢四人の子ありて。其季の子を季札と云ふ。札生得て賢明なりしかば。壽夢。先づ長子よ世を讓り。次で次子に讓らしめ。卒に季札に及ぼし。以て札をして。永く吳の後を繼がしめんと。ありしけると。札ゝ諸兄を差置くゝ。不義なりとて。之を可かざりしかゝ。壽夢も詮方なく。別よ

延陵に封じける。因て世ゐ延陵の季札と號しける。季札或る時。上國に使ひしたりし時。徐の國を通りしに。徐君季札の帶べる劒を見て。甚だ之を得ゑ欲しく思ふ樣に見ゑけるが。季札い。上國ゑ使ひする道あれば。今此の劒い。人ゑ讓りがたし。使濟て歸路にい別ゑ用もなけれい。其時ゑろ。徐君に讓らんと心ゑ思ひ定ゑ。徐の君に別れ行たり其後季札使ひの用。濟を果てゝ歸路ゑ。徐の君を尋ねしに。徐の君は既に死したりと聞き。墓ゐ至りて。此の劒い先きに。語にあろ言はね。徐の君に讓らんと。定ゑたるものなり。今其人死したりとて。如何でか我心ゑ負くべきとて。帶べる劒を解きて。墓の傍に掛け置きて。立ち去りけり。

伍子胥の事

壽夢より四世の君。闔廬に至り。越と戰ひ。傷を蒙りて死す。子の夫差繼で立ち。父の讎を復さんあとを志し。朝夕柴薪の中に臥し。又己の出入の時にい。人をして。夫差而い彼の越人の。而の父を殺したることを忘れたるやと。呼いしむ。かくの如く。夫差い父の復仇と。心懸けし甲斐ありて。周の敬王二十六年に。越と夫椒ゑ戰ひ。大ゑ之と破る。越王勾踐。僅かの殘兵を以て。會稽山に逃げ籠り。既に自殺せんと覺悟しけるを。其臣大夫種等其死を止め。種自ら吳ゑ赴きて。吳の太宰伯嚭に賂ひ。吳王夫差に願ひけるやう。越王勾踐い。今より吳の臣下となり。其妻い侍女となり。無二に服事せんゝ欲すれゝ。其請を許し給いんことをと請ふゑ。大宰の伯嚭も其賂を受けて。王に說きけれい。王夫差。其言に從ひ。越王勾踐を赦けり。時ゑ子胥と云へる。賢人ありて。越王を允るすべからず。と諫めけれども。聽かれず。抑此子胥と云へる人い。素と楚の人にして。父と伍奢と云て。楚の太子の傅たりしが。楚王の愛妾。其子を立んことを思ひ。楚王に向ひ。太子謀叛の心ある趣を讒言しけれい。楚王大に怒り。先づ其傅の伍奢を呼び。之を四へけるに。或人王ゑ見えて。伍奢の子に伍子尙。伍子胥と云ふ。二人の子あり。兄弟とも英雄あれば。此の者を殘されんと。後日の害なりと曰へは。楚王曰ふ之を如何せんと。其人曰く。ろい安きゑとなり。伍奢をして。王の仰せにより。兩人の兄弟來らゝ。父の命い助かるべしと。書き送らしむへしと敎へしかば。楚王其言に從ひ。直ちに其意を伍奢ゑ命せしゑ。伍奢曰く。此い詮なきゑとなり。兄の尙い來たるべきも。弟の子胥い來るまじ。弟の子胥ゑろ。後に楚國の仇をなす者なり。去りながら王の命に從ひて。書を送るべしとて。楚王の言の如く。書き認めて送りけるに。兩人の兄弟。其書を見て。兄の尙い。

斯くて直ちに赴くべしと云へば。弟の子胥い。此い楚王の謀なり。我等兩人を父と共に。殺さんと思へど。其容易に行かざるを慮り。斯云ひ遣されしあり。何條兩人の赴けいとて。父の命の助かるべき。此より兩人此處を逃れ出で。他國に赴きて。父の仇を復さんみとを。謀るころよけれと逃べけるよ。兄の倘曰く。汝の言ふ所其理あり。我も然か思ふなり。又た父もさる程の事を知られ給ひしならん。さりながら楚王の命のまゝ。かく書き送れしなるべし。されど假初にも父のかく言ひ遣いされしよ。子たるものゝ情として。何ぞ忍ぶおとを得んや。且つ他國に走りて。父の仇を復すことを計るい。我の爲すと得ざるところにして。汝の能く爲す所あり。されい我い都に赴きて。父と共に死すべし。汝い此處より何地へも。身を逃れ。我い我。汝い汝と。互に各其志を爲すべしとて。倘い都へ赴き。子胥は寄手の兵に矢を射て。之を退ひ退ぞけ。其隙に逃がれけり。都よりし父伍奢い。此の事を聞き。楚國は永く枕を高くして眠むることを得ざるべしと歎息し。倘と共に殺されけり。伍子胥い其より諸處を經て。身を乞丐兒と迄變して遂に吳の國に至り。闔廬よ用ゐられ。闔廬を進めて楚を攻め。其都郢に入り。楚王の墓を發きて。鞭を以て其屍を打ち。父の仇を復しけり。其れより益く

吳を助け。闔廬死せし後。夫差よ從ひ。越王を破りしも。皆伍子胥の謀なりしよ。惜むべし會稽の時ゐ。夫差い其言に從いざりけり。斯くて越王勾踐國ゐ反りて後い。膽を坐臥の處に掛け置き。起臥の折に。之を嘗めて曰く。汝會稽の恥を忘れたるかと言ふて。吳の仇を復さんことを思ひ。國の政事い。大夫種よ打ち任せ。己い范蠡と兵を治めて。日夜吳を討んことを計りける。吳にてい。太宰嚭頻りに。伍子胥のなるを忌ま。之を除かんと思ひしよ。折しも吳王夫差齊の國を伐んとす。子胥之を諫めて曰く。越い我心腹に在るの疾あり。早く之を伐つべし。今齊を伐ちて。勝ことを獲るも。其益なきこと。猶石の田を獲るがごとし。勞して功なきことあり。今にして越を亡ぼさずんば。吳い行々い泯びん。と云ひけれども。夫差其言を用ゐず。伍子胥さらば詮方なし。臣い病の爲めに從ふおと能はずとて。軍に從いず國に殘りけり。王終よ齊を伐ちけるが。却つて齊の爲めに。敗られけり。太宰伯嚭。此時おろと思ひ。伍子胥を讒して。伍子胥云ふ王い我言に從いざる爲めに敗を取りしと笑ひ居ると云へければ。夫差大に怒り。直ちに伍子胥よ。屬鏤の劒を賜ふ。伍子胥は王夫差の。太宰伯嚭の讒を信じて。己に死を賜ひしことを知り。終よ愚期を極め。其家人に告るに。我死なは必らず。吾墓よ檟の樹

と植よ。檟の樹は棺よ爲くるべきなり。其棺にて。吾王夫差の屍を葬むるべし。又た吾目を抉りて。東門に掛け置けよ。越兵の呉を滅すさまを觀んと遺言して。賜いりし屬鏤の劔を以て自ら刎て死しけり。夫差い此よてゐ。尚怒の止ずして其尸と取り皮の囊に入れて。江の中わ投げ入れけり。然るに呉人い。伍子胥の忠臣にして。呉の國に。功績の多かりしよ。却て罪を得て。死せしことを憐れと。江の上に其祠を立て之と祭り。今よ至る迄。胥山と云ふて殘りけり。斯くて越王勾踐い。二十年の歳月を經て。國を富し。兵を強くし。周の元王四年に呉を伐ちしに。呉い諸國と戰ひて。疲弊せし後あれば。大に敗られて。王走て姑蘇に逃げ籠り。和睦の義と。越王に請し乞たり。越王之を哀れなることに思ひ。與よ和睦を結いんとせしを。范蠡可ずして曰く。天の與ふると。取らざれい。反りて其災を受く。先さに。呉王夫差をして。伍子胥の言よ從ひ。王の請を許さざれは。今日の憂いなかりしものを。奸臣伯嚭の言よ從ひて。王の和睦を許せしかい。遂に其國を滅すわ至れり。今日若し王にして。呉王夫差の請を許されあい。後日必ず今日の呉王夫差の如き有様と爲り給いん。如何に請ふとも。呉王夫差と和睦の事い。思ひ止まられよと諫めければ。越王さらばとて。尚兵を進めしかば。呉王夫差。

今い詮方なし。疾く死すべし。吾先さに。伍子胥の言を用ゐざりしことの悔しけれ。其れに付けても。死して後。伍子胥の顔を見ることの羞しけれとて。慎冒を以て。面を覆ひ死しける。越王い太宰伯嚭を捕へ。臣として君に不忠なる者なり。其罪重大ありとて。之を殺して臣たる者の戒とせられける。

范蠡の事

范蠡い越王勾踐の臣なり。勾踐を扶けて。呉王夫差を滅し。會稽の耻辱を雪ぎけるが。越の國に還りし後。勾踐に請ひて。身を退き他國に去りけり。其時大夫種に。一書を遺る。其書わ。越王の人と爲り。長頸鳥喙よして。與よ共よ患難を同ふすべき人あれども。與に共よ安樂を等ふすべからざる人なり。功あるものは終に忌れて殺さるべし。卿も疾く去られよと。書たりけれい。大夫種も。其言の理あるを尤とおし。其よりい身に疾ありとて。朝に出でず。身を退くの仕度をなしけるよ。或人大夫種い。此の頃企つることあり。疾と詐いり家に閉ぢてもれり。と勾踐に讒しければ。勾踐大よ怒り。吾も其擧動の疑いしく思ひ居しなりとて。使を以て劔を賜はりける。大夫種。其劔を受けて。范蠡の言の果して違いざりしに服し。疾く去らざり

しゐとの。愚なりしと言ふて。其劔ゐ伏して。死しけるぞ是非おけれ。范蠡い財寶珠玉を。手輕く荷造りおして。一家の者と。舊く使ひし家僕どもを從へて。舟に乘り江湖に浮びて。齊の國ゑ至り。姓名を變へ。鴟夷子と呼びて。父子共に力を合せて。産業を營みしに。忽ち其産數千萬に至りける。然るに齊王は。鴟夷子の元と越國の范蠡にして。賢人なるゐとを知り。齊國の宰相と爲さんとす。范蠡之を聞き。喟然と歎息して曰く。家に居てい。富千金ゐ致し。官に居てい。位卿相を致す。此布衣たる者の極まりなり。高木は風に惡まるゝとかや。久しく尊名を受くるい。不祥なりとて。宰相の印を歸し。盡く蓄へし財産を諸人に分け與へて。只た貴き寶のみを持ちて。間かゑ齊を逃れ出で。陶ゑ至り。又姓名を陶朱公と呼びて。父子同じく産業ゐ勉めたりしゐ。程なく貲財。鉅萬を累ねけり。其頃魯國ゐ猗頓と云へる人あり。范蠡の往く所として。僅かの間に。鉅萬の富を致すを見て。此い其術あるべきならんと思ひて。其許に尋ね行き。如何なれば。君か家い容易く富有を致さるゝにや。苦しかふすい。其妙術を授け給へと請ひけるに范蠡い。莞爾として笑ひ。此い珍しき問かな。卿若し富有なるゐとを。望ま給はゞ。先づ五匹の牸を畜ひ給へと敎へけり。猗頓其言に從ひ。五匹の牸を畜ひけるに。其より漸

く々に。牛羊繁殖して。後には大なる牧場ゑ充滿なし。僅か十年の間に。貲財王公に比らぶべき程になれり。是によりて。後世天下の富めるものと云へゞ。陶朱猗頓と稱しける。

蔡國並曹國

蔡い周と同姓にして。姬姓なり。蔡仲の封せられし所にして。蔡仲の謀叛を企て。周公の爲に郭鄰に放たれ。一旦國い絶えさりしが。蔡仲の子胡。父ゑ異りて德ゑ率ひ。行を改めければ。復た父の後を受けて。蔡に封せられ。後春秋の末に至り。楚の惠王に滅されり。曹亦た姬姓にして。武王の弟。曹叔振鐸の封せられし所なり。此の國も。春秋の中頃まで在りしが。宋の滅す所とおれり。

宋國　襄王景公乃事並桀宋ゑ話

宋國い子姓にして。殷の紂王の庶兄。微子啓の封せられし所なり。春秋の時に至りて。襄公茲父。諸侯に弱たらんことを企て。諸國い征伐して勢强かりしが。楚と戰ふとき。公子の目夷。襄公に勸めて。楚軍の陣を立てざるゑ乘じて。疾く之を擊ち敗るべしと云ひけるに。襄公は。君子たる者い。人を困阨の時に。苦しむることい。爲さゞるものなりと云ひ。楚軍の陣立をな

せし後に戰ひ。反つて楚ゝ敗られける。因て世に之を宋襄の仁と云ふて笑ひける。其後景公ゝ至り。熒惑と云へる惡星宋國の分野に當りて出しかゞ。景公身に災あるの兆あらんと。大に之を憂ひけるに。天文を司れる子韋と云へる者。此の災い。宰相ゝ移すことを得べしと云へゞ。景公い。宰相は吾股肱なり。何條此ゝ災を移すべしと云へば。君たる者い。民を待りて立つ者あり。何條民に災を移すべきやと答ふ。さらゞ此の災い歳に移すべしと云へば。歳饑ば民困しむ。かくては。吾誰が爲めに君たるべきや。と答へられけれゞ。子韋曰く。天い高きと雖ども。卑きに聽く。今君ゝは人君たるへき程の德三を盲ひ給ひたり。斯くてい。如何で災のあるへきか。と云ひたりしに。果して其惡星他に徙りて。災をなさゝりけり。其後數世にして。康王偃に至り。雀あり鷗と生みたり。此い不思議の事とて。之を占いせしに。此ゝ王の天下に霸たるへきの兆あり。と云ひければ。偃大に喜びて。其より頻りに。兵を出し。齊。楚。魏を破り。外い諸國を敵とし。內い淫虐を放まゝに去けれゞ。天下の人。夏の桀に似たりとて。桀宋と名づけ。惡みける。周の愼王の時。齊の湣王。楚。魏と力を合せて。之を滅し。各其地を分ちけり。

魯國

周公子伯禽を敎る事並周公太公望と政治の得失を問答の事

周公。成王を誨ゆるに。成王若し過あるときい。己の子伯禽を撻ちて。成王を自然と懲されける。かゝりし程に伯禽も自ら。其誨と受て。賢明の人となりけれゞ。魯の國に封せられたり。其魯國に赴かんとする時。周公之を戒めて曰く。我い文王の子にして。武王の弟。今の成王ゝ叔父ゝ當るなり。我貴けれども。心驕れるまとなく。髮を結ぶに。三たび髮を握りて立ち。食をなすに。三たび哺を吐くまとあり。此出迎ふことの遲延して。天下の賢人を失いんことを恐れ。士の來るあれば。暫しと云ずして。何事も打ち捨て。起ちしあり。子も能く此の心して。魯に之きなば。魯の君たるを以て。人に驕るべからずと。敎へけゝ。其頃太公望を齊に封せしが齊に之きしより。僅か五月ばかりゝして。政事の施こし方を報げ來たりたり。周公之い何とて。疾きやと問ひしに。吾い君臣の禮と簡易ゝして。凡べて其土地の風俗に。從ひ置きしと答ふ。又た伯禽。魯の國に之きしより。三年を經て政事の施ゝし方を報げ來りしかば。周公何とてかくい。遲かりしやと。問れしに。吾い其風俗を變へ。悉く其禮と革め。三年の喪。

を固く守らしめければ。遲延せしと答へらる。周公之を聞て。魯は後世北面して。齊ゑ臣とあるべし。夫れ政い簡易ならざれば。民親み近づく能いず。平易ゑして民を親し近づくるときい。民必ず歸服して。國富强に至るべし。然るゑ斯く手重くせしぞ。拙おしと云いれける。一日周公。太公望に問ひ。卿い如何に齊國を治めらるゝやと問ふ。太公望曰く。賢者を尊び。功あるを尙ぶと答へしに。周公曰く。斯くてい後世必ず君を弑し。其位を簒ふ臣の出ることあるべしと云ふ。又大公望。周公に向ひ。君い如何に魯國を治めらるゝやと問へば。周公吾い賢者を尊んで親戚を親むへしと答ふ。太公望曰く。かくてい後世漸く衰弱に陷らんと云いれけるが。後果して。齊い臣の田子ゑ。其國を奪れ。魯い衰弱して。僅に其國を存しける。

孔子の事

魯の定公の時に至り。孔子を以て。中都の宰となす。僅か一年の中ゑ。四方皆之に則とりける。定公因て。中都より司空とし。尙ほ進めて。大司空と爲す。孔子定公を相けて。夾谷に齊公と會する時。孔子曰く。文事ある者い。必ず武備あり。左右の司馬と從へて赴んとすと。軍兵を從へて赴きける既にして。齊侯と會せしが。齊の方にい。魯を脅かさんとの企てありて。齊の有司。四方の樂を奏せんことを請ひて。旗旄劍戟鼓譟して至る。孔子其計を知り。趨り進み吾が兩君の好みの爲めに會せらるゝに。夷狄の樂い無禮ありと。嚴然として止めければ。齊の景公も。勢に心恐れて。急に之を退かし免ける。齊の有司又た請て曰く。さらい更らに。宮中の樂を奏せんとて。優倡侏儒(ヤクシヤイヤスンホシ)。戲れて前み來る。孔子之を見て趨り前みて。匹夫等何ぞ尊者の前と亂すや。其罪死ゑ處すべしとて。直ちに之を有司に命じて刎ねければ。景公大ゑ懼れて。少しも魯公に手を出すを得ずして歸り。其臣と責て曰く。魯い君子の道を以て。其君を輔くるに。子等は何とて夷狄の道を以て。寡人ゑ教ゆることゞと云ひて。遂に先きゑ魯より侵し取りし所の鄆。汶陽。龜陰の地を返して。魯ゑ謝しける。孔子定公に言ふて。三都を毀ち。公室を强くせんとす。是より先き。莊公の庶弟ゑ三人あり。長を慶公と曰ひ。其後を孟孫氏と爲す。次を叔牙と曰ひ。其後を叔孫氏と爲す。其次を季友と曰ひ。其後を季孫氏と爲す。是を魯の三桓と云ふ。皆桓公の子なり。國君を助けて國の政を執りしが。後次第に勢を得て。君命ゑ從いざることもありしかば。昭王の時。季氏を伐ちしゑ。三家共に力を合せて。反りて昭王を伐ち。昭王勝すして。乾侯ゑ走り。遂に其處にて卒そ。次で立ちしは定公なり。孔子其三

家の次第ゐ。君家を侵さんことを慮りて。かく計ひしゐり。三都とい。三家の本城のある處。先づ叔孫氏をして。其都郈を墮たしめ。季氏をして。費を墮たし先ず。孟孫氏の臣下。其都城を墮つことゐ肯んせざりしかば。兵を以て之を攻め圍みしに反て之に破られける。孔子大司寇となり。又た宰相の事を攝ね行ふあとを命せられしが。其より七日目にして。國の政を亂せし大夫少正卯と誅しければ。僅づか三月の中に魯國大よ治まりける。齊人之を聞きて。かくてい魯國益々强くありて。齊國危ふし。如何せば善からんと評定し。之を試えんとて精ぐりたる美人を以て。組み立てたる一隊の女樂を。魯國に歸りしに。魯の政を執る所の季桓子之を受けて。其れより政に心を用ゐず。祭時にも大夫に對して禮を欠きければ。孔子も今い詮方なしとて。魯ゑ去りける。是より魯國い次第に衰ろへて。後の君に至りても子思。孟子などの賢人を。用ゐることゐ能わず。頃公に至り。楚の考烈王に滅されける。抑孔子の出生を尋ぬるよ。孔子名い丘字い仲尼其祖は宋の人あり。嘗て正考父と云へる人あり。宋に佐たりしか。其始め。士に命せられしとき。人に對して恭しかりしか。大夫爲るに至りて益恭しく。卿に命せられしに。愈恭しくなりける。其傍に置ける鼎に銘して。一命して僂じ再命して傴し。三命して俯す。墻よ循ふて走る。亦余を敢て侮るゐとなし。是に饘し。是に粥し。以て予口を餬すと。記るして。常に戒しめける。後孔氏は宋に亂と絶ち其亂魯よ適きて叔梁乞と云へる人に至り。顏氏の女を娶り。尼丘山に禱りて。孔子を生めり。孔子兒たりしとき嬉戯するに。常よ俎豆を陳ねて。禮容を設けける。人と爲りて後。季氏の吏と爲りしが。倉廩の出入。毫厘の違ひなく。司職の吏と爲りしに。畜益蕃息しけり。周よ適きて。禮を老子に問ひ。反りし後。弟子益加いる。齊の景公。其德を慕ひて。魯の二卿季氏孟氏との中間の祿を以て。臣とせんとせしが遂ひに用ひられず。魯に反り定公に仕へける。左れど定公も始終用ゐることゐ能はず。其れより衛よ適き。將よ陳に適かんとし。途よ匡を過りしに。嘗て陽虎と云へる人匡を暴せしことゐりしに。孔子の容陽虎よ似たりとて。之を止む。既にして免れて。再び衛に反りしが。衛の靈公の爲す所と醜み。去て曹を過きて。宋に適き。弟子のためみ。禮を大樹の下に習はす。桓魋と云へる者ありて。其樹を伐りて。之を妨げければ。孔子い去て鄭に赴きしに。鄭人之を見て曰く。東門よ人ゐり。其顙い堯に似て。其頂は皐陶よ類し。其肩い子產よ類す。腰より下は禹より低きこと三寸。累々然として。喪家の狗の如しと語りける。

孔子其れより。陳に適き。又た衛に適き。進えて西に赴き。趙簡子に會いんとて。河の邊に行きしに。其處にて竇鳴犢。舜華の二賢人の殺されしを聞き。河に望えて。美なるかな水。洋々乎たり。丘か渡らざるは。此れ命なりと。嘆息して。衛に立ち戻り。陳に適き。蔡に適き。葉に行き。復た衛に反りしが。楚より之れを招きけるを。陳。蔡の大夫謀りて。孔子若し楚に用ゐらるれい。陳。蔡い危ふしとて。俄に兵を出して。孔子を取り圍む。孔子い詩に云く。兕に非ず虎に非ず。彼の曠野に率ふと。吾道非なるかと云ひて。少しも恐れたる氣色なし。弟子の子貢曰く。夫子の道は至大なるゆゑに。天下能く容ることなしと。弟子の顏回曰く。容れられざるとて。何ぞ病まんや。斯くてこそ君子の見いるゝなりと云ふて。毫も動ずる色なかりける。其中に楚の昭王兵を出して之を迎へ取り。書社の地七百里を以て。封せんとせしに。令尹の子西之を可かさりしかば。孔子此處をも去りて衛に返る。季康子迎て魯に歸りしが。哀公用ゐること能いず。孔子是より。書を序でゝ。上い唐虞より。下い秦の繆公に至る。是れ今の書經なり。又た古詩三千を刪りて。三百五篇となし。皆音樂に合せて。歌べしとす。禮樂是より述ぶべし。晩年に至りて尤も易を喜み。彖。象。繫辭。說卦。文言を序でける。其易を讀むこと。

其卷を編し韋。三たび絶ちたりとぞ。又た魯の史に因て春秋を作くり。隱公より哀公に至る。十二公の間の事を記し。西の狩りに麟を獲たりと云ふに筆を止めける。此書を作るとき。自ら筆すべきい筆し。削るべきい削りしに。弟子の中にて。文章に名を得し子夏の徒すら。一辭をも贊することい能いざりし。孔子の弟子。三千の多きに及び。禮。樂。射。御。書。數の六藝に通達せし者。七十有二人あり。孔子年七十三にして卒す。子あり名い鯉。字は伯魚。孔子に先ちて死せ。孫あり。名い伋。字は子思。中庸を作る。後ち孟子と云へる者あり。名い軻。魯の孟孫の後なり。鄒に生れ。慈母三遷の教を受け。長じて子思の門人に付きて學び。道既に熟達して。齊梁に遊びしが用ゐられず。因て退きて門人萬章の徒と。難疑答問して。書七篇を作る。今の孟子此なり。

老子の事

老子い。楚の苦縣の人あり。姓い李。名い耳。字い伯陽。又たの字い聃。周の守藏吏と爲る。孔子之ゐ事を問しに。老子曰く。良賈い深く藏めて。虛あるか如く。君子は盛德にして。容貌愚なるが如しと。孔子去て。弟子に謂て曰く。鳥い吾其能く飛ぶと知り。魚い吾其能く游ぐを知

る。獸ハ吾其能く走るを知る。走る者ハ網を用ゐ。游ぐ者ハ綸を用ゐ。飛ぶ者ハ矰を用ゐ。次で之を捕獲ることを得べけれども。龍ハ至てハ。吾知ること能ハず。風雲ハ乘して天ハ上る。今老子を見るに。恰も龍の若きかと。老子周の衰へたるを見て。去て函谷關に至りしに。關令の尹喜。老子に向ひ。子今將に隱をんとす。願ひくハ。我爲ハ一書を著せと請ひしに。老子さらゞとて。道德五千餘言著はし。之を授けて去り。其終ハる處を知らず。其後鄭の人。列禦寇。蒙の人。莊周。皆老子の學を爲し。莊周書を著ハし。孔子を侮り。諸子を誚る。其書即ち今の莊子なり。

衛國

衛ハ姬姓にして。武王の弟。康叔封の封られし所なり。春秋の時靈公の夫人南子。亂を作す。靈公の子蒯聵。南子を殺さんとし。克たずして出奔す。時ハ靈公死せしかバ。國人蒯聵の子輒を立り。然るに蒯聵位に立んと欲し。國に入る。孔子の弟子に子路なる人あり。輒に仕へけるが。戈を横たへ之を拒ぐ。子路は勇力の聞えありし人ゆゑ。蒯聵の臣。石乞孟黶などの猛者。群ゝ來りて子路を取り圍む。子路多勢を相手に戰ひしか。冠の纓を擊ち切られしに。君子ハ死すとも冠ハ脫かしとて。纓を結バ直しける其隙ハ死されける。衛人其肉を醢とせ。孔子其事を聞きて。直ちハ醢の壺を覆さしめられける。後戰國の時。子思衛ハ居て。苟變を大將に用ゐへしと薦めけるに。衛侯曰く。變嘗て吏と爲りしハ。民をして人ごとハ。鷄の卵二つゝを。己に納させし程の私ある者なり。ゆゑに大將には用ゆへからずと。子思曰く。聖人の人を用ゐるハとハ。猶匠人の木を用ゐるがごとし。其長ずる所を以て。短ある所と捨り。故ハ連抱の杞梓ハして。數尺の朽處ゐるも。良工ハ之を棄てず。今君ハ戰國の世に在りて。僅かに卵二のハとを以て。干城の大將を棄てらるゝことハ。如何ゐるハとなるや。斯ることハ鄰國に聞しむるへからず。此方の虛實を敵に知られなんと言ひける。子思又衛侯の言。道に背きたる事ゐるも。群臣之ヲ贊して同ずること。皆一つの口より。出るが如きを見て。衛侯に告て曰ふ。君の國事ハ。將に日々に。惡からんとす。君一言を云ひて。自ら是ありと云へハ。卿大夫等も。是は非ゐることゝ。心には思へども。口には君の言是なりと諛び諂らひて。君の非を矯むる者ハなし。斯樣の卿大夫ゆゑに。卿大夫等言を出し。己自ら是と爲せハ。庶人も其意ゐ逆ふことを恐れて。只管之を是として。其非を矯むることなし。斯くてハ誰ゐ

つて。己の過ちを知る者あらんや。詩ゑ云ふ。具に予を聖なりと曰ふ。誰か鳥の雌雄を知らんと。今日衛の君臣の事を。斯くゝ云ひしならん。と諫めけれども。衛侯終ひに其言と用ゐざりけり。衛ゝ周の諸侯の中にてゝ。最も後れて亡びけり。即ち秦天下を幷せ。二世皇帝の時。衛君角。廢されて庶人となり。終に國滅びけり

鄭國

鄭國も姫姓にして。周の宣王の弟。桓公友の封ぜられし所なり。桓公の子武公。其子莊公と。幷びゑ周の司位と爲れり。數世の後。聲公に至り。子產を相とす。子產は公族にして。氏ゝ國。名ゝ僑。孔子鄭を過ぎし時。始めて子產に會ひ。兄弟の如く交りける。鄭國ゝ穆公襄公より以來。毎歳晉楚の兵を被らざる事なかりしが。子產相となるゑ至りて。禮を以て自ら固く守りしより。晉楚の暴と雖も。一兵とも加ふること能ゝざりしが。鄭周の威烈王の時に至り。君乙。韓の哀侯に滅され。韓徙て之ゑ都しけり。

晉國重耳覇となる事

晉亦姫姓ゑして。成王の弟唐叔虞の封せらるゝ所なり。成王幼とき叔虞と戲れ。桐の葉を

削りて圭の形を爲し。之を詩に作らば以て若を封せんと云ふ。叔虞立ろに詩を作る。史佚直ちゑ進えて。さらゝ何の日を以て封ずへきか。其日を擇ばんと云ふに。成王曰く吾ゝ只戲れしのみと。佚曰く天子にゝ戲言なしと。遂に之を唐に封ずける。後文公に至りて。諸侯に覇たり。文公名ゝ重耳。獻公の次子なり。獻公驪姫を聘し。太子申生を殺し。兵と遣ゝして重耳を補に伐たしめしに。重耳ゝ早く他國に出奔しける。重耳他國にあること十九年ゑして。始めて國に反ることを得たり。其他國に在るとき。嘗て曹ゑて餒しことあり。其時從ひし臣に介子推といへる人あり。我股の肉と割きて。重耳に上つりける。後重耳歸るに及びて。共ゑ從つて亡げたる。狐偃。趙衰。顚頡。魏犨を賞して。各祿を與へけるゑ。如何せしか子推には。賞祿ゆらざりける。子推の從者之を偏頗の處置と思て。書を宮内に懸く。其言に。龍あり矯々たり。頃く其所を失ふ。五匹の蛇之に從ひ。天下を周流せしゑ。或る時龍饑ゑて。食に乏しかりしかば。一蛇股を割きて。龍に食はせり。龍淵ゑ返り其壤土に安じ。四蛇も穴に入りて。皆其居處を得たりしに。獨一匹の蛇。入るべき穴あく。中野に號ぶと記しける。文公之を見て。噫寡人の過ちなりとて。直ちゑ人をして。子推を求めしめしに。何地へ行きしか在らず。其綿上

の山中ゑ隠れしと聞き。之ゑ焚かば自ら出で來らんとて。其山ゑ火を放ちしに。子推終に出で來らず。山中にて焚れて死にけり。後人之を哀しゑ。是れより。其死せし日にハ寒食とて。火を以て食物を烹ざりけり。文公も其功を思ハれて。綿上を環ぐれる田地を以て之を封じ。之を改めて。介山と號しける。文公の後。世々諸侯に覇たりしが。悼公に至て。覇業大に盛となりしが。頃公より後。范氏。知氏。中行氏。趙氏。魏氏。韓氏の六卿勢を得て。公室益弱くなり。出公の世ゑ。知氏。趙魏韓の三氏と。計を合せ。范中行二氏を滅ぼし。其領地を分ち取りければ。出公其罪を責免しに。知趙魏韓の四氏。反て公を攻め。其後哀公の時。趙魏韓の三氏。知氏を滅して。之を分ち取り。幽公の時にハ。晋ハ獨縫曲沃の一處を有つのみにして。餘ハ皆趙魏韓の三氏に領せられ。三氏益盛大にして。三晋と號し。烈公の時。三卿。周の威烈王の命を以て侯と爲り。靜公に至りて。魏の武侯。韓の哀侯。趙の敬侯の三侯に廢され。其地悉く三侯に入りけり。

陳國

陳。姓ハ偽。虞舜の後裔蟠公滿の封せられし所なり。春秋の時に至り。公子完と云へる人。出

奔して齊ゑ仕へ。陳ハ後に。楚の惠王に滅されしが。完の後遂に齊ゑ於て盛大となる。即ち齊の田氏是なり

齊國　齊の祖先ゝ事並管仲ゝ話し

齊。姓は姜。太公望呂尚の封せられし所なり。桓公ゑ至りて。諸侯ゑ覇となる。五覇の中に於て。覇となりし者ハ。桓公を以て始めとなす。桓公名は小白。兄の襄公無道にして。殺伐を好みしかバ。群弟皆禍の及ばんことを恐れ。子糾は魯に奔り。管仲之に從ひ。小白ハ鮑叔之に從ひて。莒に奔れり。然るに國内にてハ。襄公。其弟無知に殺され。無知亦た國人に殺され。國君なかりしかば。國人小白を莒より迎へける。時に魯も兵を出して。糾を送り。管仲ハ莒の道を遮ぎりて。小白を射て。其帶鉤に中てたり。されど小白別に傷を蒙らず。先きに齊に入りて位に立ち。魯ゑ人を遣りて。糾及び管仲を送らんことを。請ハしめたり糾ハ之を聞きて自殺せしに。管仲ハ囚れとなり。齊ゑ歸りしが。鮑叔牙之を薦め。管公も其怨を捨てゝ。之を用ゐけり。此の管仲と云へるは。字を夷吾と云ひて。嘗て鮑叔牙と商賣をなせしが。其利益を分つ時に當り。管仲ハ自ら多く取りけり。されど鮑叔牙ハ。此を以て別に管仲を。貪慾の者

と思へり。是れ貧なればころとて。怒らず。又嘗て共に事を謀りしに。管仲人に窮困せり。鮑叔亦た管仲を愚とおさず。時に利不利の運ある者とて。之を侮らざりけり。又た管仲或る時の戰に。屢戰ひしが。屢敗北して逃げたりしに。鮑叔牙い。管仲を以て。怯者となさず。是れ管仲にい。老たる一人の母あればころ。かく身を重ずるなりと云ふて。益之を敬ひけり。鮑叔牙の管仲に交ること。斯の若なりしを以て。管仲常に人に語るに。我を生む者い父母にして。我を知る者い鮑子なりと。云ひける。管仲桓公を扶けて。諸侯を糾合し。天下を匡しける。其功大なるゆゑに。桓公も之を重じて。一にも仲父。二にも仲父と云ひ。何ごとも管仲の手に依りて。敬ひ悅ばれける。管仲病あり。疾篤くなりしとき。桓公親しく其病床に至りて。卿の後い群臣の中にて誰か代りて。相となるべき者ぞ。彼の易牙い如何ぞと問ふ。管仲曰く。彼い己の子を殺して君に食ませし者なり。是れ人情に非ず。必らず近づくべからずと。王曰く。されば開方い如何ん。曰く彼は親の意に背きて。君の意に適ふことを爲せしものあり。是れ人情ある者に非ず。近づくべからずと。蓋し開方と云へる者は。故と衛の公子なりしが。衛を出奔して。齊に來りし者なり。王又曰く。されば豎刁い如何ん。曰く。自ら宮して

君の意を迎へし者なり。是れ人情を知れる者にわらず。決して近づくべからず。と諫めしに。管仲死せし後。桓公其言を用ゐずして。三子を近づけしに。三子權政を專らにして。齊の政を亂しける。桓公又た內寵多くして。夫人の如き者六人ありて。各其腹に子ありければ。桓公薨せし後。五人の公子。互に位に立んことを爭ひ相攻め合ひて。公の尸を殯斂する者なく。床の上に捨てありしこと。六十七日の久しきに及び。尸に蟲生へて。其室の戶の際より。處々へ出でける程なりしと。

晏子の話し

齊の景公の時に至り。晏子なるものあり事へて。宰相となれり。晏子名い嬰字い。平仲。節儉と力行とを以て。齊人に重せられける。晏子三十年の間。一枚の狐裘を着け。又た其食物い。豚肩は豆を掩いざる程の。粗食となせり。斯く己の身を養ふこと。賤しけれども。人に惠むことを好きて。齊國の士にて。晏子よりの。賜物を以て。生計を立つる者。七十餘家の多きに及べり。或る日晏子。外に出し時。晏子の御者の妻。門の間より窺ひ居しに。其夫大なる蓋を冠ひり。駟馬に策ちて。意氣揚々として。最も自得の色見えにけり。かくて御者。內に歸り來り

しに。其妻何故か。離別を請ひけり。御者何の謂れを知らず。何とて。離縁を請ふやと問へば。妻答て主人の晏子い。身齊國に相として。其名い諸侯に顯れ居るに。其志を觀るに。少しも人に驕れる色なく。常に自ら謙遜ふ身を持てゝ。子い人の僕御たゐ身分にありながら。自ら以て十分なりと。思ふ色見ゑ。今日も斯くゝにありたり。斯くてい末頼母しからねば。離別を請ひたるなり。と其由を語りければ。御者大に耻て其れよりは。御者の擧動。從來に變りて。少しも傲慢の氣色なく。甚だ抑損して見にければ。晏子甚だ怪しく思ひて。御者ふ如何なれば。急ゐ抑損もるにやと。問ひしに。御者。即ち有りし樣を審に語る。晏子之を聞きて。大に其志を嘉みし。之を君に薦めて。齊の大夫と爲しける。晏子。景公の爲めふ。晉に之きしことありしが。晉の叔向と物語りの序でに。行く行くは。齊の政い。必ず陳氏ゐ歸そべしと語りしが後ち。果して。其言に違はざりけり。康公の時。田和。周の安王の命を受けて侯と爲り。遂に康公を海濱に遷しければ。齊の祀遂に絶えけり

田氏齊　淳于髡の話并威王

田氏齊い。本と嬀姓にして。故とゐ陳の厲公佗の子。完の後なり。完齊ふ奔りて陳氏とあり後又た陳を田氏と改めけり。完齊の桓公に事へ。工正と爲る。其れより五世の後。釐子乞に至り景公に事へ。大夫と爲り。民より賦稅を收むるゐい小斗を以て之を取り。其粟を民に予ふる時い。大斗を以て量り授けなどして。專ら民ゐ私惠を施しけゝば。是より大に齊の人望を得て。政を專らにしけり。其子成子恒のとき。簡公を弑して平公を立て。我領する地い。公の領地より多きに至れり。恒の子襄子盤に至り。韓趙魏の三家と。互ひに好を結びける是れ三家各晉を押領せんとするの志ある也。田氏も齊を領押せんと。謀るを以て。同氣相ひ通じけるなり。太公和に至り。遂に周の安王の命を以て。始めて侯とある。然るに其孫威王齊立つに及び。初め國内治まらざりければ。諸侯皆來り伐ち。八年に楚大ふ兵を起して。攻め來れり威王。援兵を趙ふ請いんと思ひ。其使者として。淳于髡を遣いし。金百斤車馬十駟を以て。其遣ひ物として。齊らせけるに。髡い只だ。天を仰ぎて笑ひければ。王髡に向ひ。先生には之を少しとせらるゝかと云へば。髡い他事を以て答へて曰ふ。臣或る時道の傍に田を穰る者あると見たり。先づ一の豚蹄と一壺の酒とを操り。祝して曰ふ。甌窶滿篝。汙邪滿車。五穀蕃熟し。穰々として家ゐ滿てよと。臣其供ふる所の物狹くして。其願ふ所の者奢さを思ひ餘りに。

可笑しきまとゆゑに。かくい笑ふありと答ふ。王其吾に謎ぞと掛けたることを悟り。乃ち黄金千鎰。白璧十雙。車馬百駟を益したれば。髡乃ち趙に赴きけり。此の時齊の勢甚だ衰へけり。王一日即墨の大夫を召し寄せ。子が即墨に居しより。子を毀れる言。日として至らざることなければ。吾人をして。即墨を見せしめしゐ。田野い能辟け。人民は足り官衙い無事にして。東方大だ安寧の様なり。是れ畢竟。子が吾左右に賄賂を用ゐざりしよ由てなりと知らる。因て之を賞するとて。直ちに萬家の士に封じける。又た阿の大夫を召し寄せ。子が阿を守りしより。子を譽むるの言。日として聞かざることあかりしかば。人をして。阿を視せしめしに。田野い辟けず。人民い貧餒し。趙より到を攻めしに。子い之を救いず。衛より來て薛陵を取りしに。子之を知らざる如く。打ち捨て置けは。かく子い政を治めざるに。譽言の日々聞えるは。是れ子が。吾左右の者よ。厚く賄路せしゆゑなるべし。と之を責めて。即日阿の大夫と。嘗て之を譽めし者とを。烹たりけり。威王かく賞罰を正ふせしかば。群臣大に聳懼して。其れよりい詐り飾るも者もなく。皆其職を勤めければ。是れより齊大に治まりて。諸侯も復た安らよ。兵を向けざりけり。威王嘗つて。魏の惠王と會せしとき。惠王。威王に齊國にも尊き寶

ありやと問ひしに。威王おしと答ふ。惠王又最と誇り顔に寡人が國い小ありと雖ども。猶直徑一寸の珠よして。十二乘の車の前後を照す程の者十枚許りありと語れば威王は。少しも驚ける色なく。寡人の寶と申すい。王の物とい相違せり。吾が臣に檀子と云へる者あり。南城を守らしめしに。其れより楚敢て泗上に寇を爲さず。十二の諸侯皆來り朝するよ至れり。又た腴子と云へる者あり。高唐に守たらしめしに。其れよりい。趙人敢て東に出て河に漁りせず。又た黔夫と云へる者あり。徐州よ守たらしめしよ。燕人い北門に祭り。趙人い西門を祭りて恐れけり。又た種首と云へる者あり。盜賊に備へしめしに。道に遺ちたるを拾ふ者なきよ至れり。此の四人の臣い。將さに千里の遠きを照さんとす。特り車十二乘を。照す如き比にい非ざるべしと思いると云いれて。惠王大に慚ぢて歸りけり。

孫臏の話

齊の威王卒して。宣王立しが。宣王文學游説の士を喜みて。騶衍、淳子髡、田駢愼到の徒。七十六人。皆上大夫と爲れり。是れ因つて。齊の都稷下に。學士の盛なること數百千人の多きよ及べり。然るに時の賢人孟子も來りけども。終に之を用ゆること能はざりし。此の時。魏

韓を伐ちしかば。韓より齊に救いせける。時に孫臏と云へる者。齊の軍師たり。抑此の孫臏い嘗て魏の大將龐涓と共に。同じ師に就きて。兵法を學びしが。涓の術。孫臏に劣りけり。涓魏の將軍となるゝ及び。己常ゐ孫臏に及バさりしを以て。孫臏若し他に行かバ。己の害なりと思ひ。孫臏を罪ありと誣ひ法を以て其兩足を斷ち。且つ之に黥して。魏ゑ止め置さしに。或る時齊の使者。魏に至りしとき。窃かに車に乘せて歸り。其れより齊に止まりて軍師となりしなり。臏因りて田忌に勸め。韓の方へ赴き援はずして。直ちに魏の都へ。攻め寄せたり。涓いして。魏の地に入りし初の日ゑ。十萬の竈を爲くらしめ。其翌日は五萬の竈に減せし処。又た齊の軍魏の都へ寄せしと聞き韓の方を打ち捨て。魏に歸りて。之を禦ぐ。臏又た齊の軍ゐ令其翌日い減じて僅かに二萬の竈を爲くらせける。涓其竈の日々に減するを見て。是い齊軍の境に入りてより怯氣を增し。日々ゑ逃け去ると思いる。齊軍何にとて。斯くい臆怯ゐるや。魏の吾境に入りしより。僅か三日なるに亡ぐる者其過半ゑ及べり。かゝる臆怯者。疾く之を打ち拂へとて。二日路の處を。一日路に縮めて。之を逐ふたり。臏い疾くに。此事を知り。心に其行程を量りみるに。暮程にい馬陵と。云ふ處に至るべし。此の馬陵い道陿くして。旁ゐ阻

多ければ。伏勢をなすに。屈强の塲處なりとて。乃ち馬陵の大樹を。白く剝きて。其上に龐涓此の樹下に死せんと。墨黑々と書きるし。又た齊の師の善く射る者をし。万弩を備へ。道の兩方に伏せ置き。且つ暮ゑ及びて。火の擧がるを見ば。直ちて射出せと。敎へけり。然るに涓果して。夜ゑ及び。白く削りたる樹の下ゐ至り。文字の書しゐるを見て。火を燭して之を讀まんとゐせしに。俄かに左右の崖より。萬弩俱ゐ發したれバ。魏の軍勢不意を打たれて。度を失ひ上を下へと亂れけり。涓い此の有樣を見て。迎も脫がるべく見えざりければ。自殺せんとせしが。臏に計られしことを口惜しく思ひ。遂に竪子が名を成せりと罵りて。自ち頸て死しける。只さへ亂れし魏の軍勢大將討たれて。何とて戰ふべき。只散々とゐりて逃げたりける。齊軍大に克ちて。魏の太子申を虜ゑして歸りけり。

孟嘗君の話

齊の湣王の時。孟嘗君と云へる人ゐり。其父は靖郭君田嬰にして。宣王の庶弟なり。薛に封せらる。孟嘗君。名を文と云ひ。父の富貴を受け。人に客を喜ゑ。食客數千人の多さに及び。其名諸侯ゑ聞こけり。秦の昭王。孟嘗君の賢人ゐることを聞き。先づ質を齊に遣いして。孟嘗君を

見んこと請ふ。孟嘘君即ち秦に赴きしに。昭王。其賢を嫉み。之を止め殺さんと計りけるに孟嘘君。或人を昭王の寵愛せる姫の許に遣りて。身の助からんやうよ取成さんことを願ふ。と云いせしよ。其姫答へしめて此い容易けれども。願くい君の狐白裘を賜へよと云ふ。然るに此の狐白裘と云るい。孟嘘君前きの日。昭王に獻じて。他に其裘なかりしかば。如何いせんと思ひしに。客の中に。能く狗の如く忍び入る者あり。秦の藏中に入りて。其裘を盗み取り。之を姫に献じければ。姫大に喜びて。秦王に孟嘘君い天下の賢人あり。天下の賢人を殺さば。天下の人に笑いれんと。取り成しければ。秦王も尤ありとて。孟嘘君を國に歸しける。孟嘘君釋されしかば。議の變せざる中にとて。直ちに秦の都を出で立ち。姓名を變じて馳せ去り。夜半の頃に。函谷關に至りしが。此處い關の法にて。鷄の鳴くを合圖に初めて關門を開き。客を通する例なれば。其時孟嘘君如何お思へども。此の關を出ること能はず。さりとて躊躇せば。秦王の後に悔ひて。追手を向けんことを恐れ。兎やせん角くやせんと。議したりしに。客の中に。克く雞の鳴聲を。眞似する者あり。一聲時を報じければ他の野に在る雞ども。早や夜明の近づきしと思ひ。悉く時を作くりしかば。關守の人も。其時至りしと誤りて。關門を開きけれ

ば。孟嘘君障りなく關を通り過ぎけり。然るに秦王。孟嘘君の去りしと聞き。大に悔ひて。急に追手を向けたりしが。追手は。孟嘘君の關門を出でし後に。關門に來りける。其間一食の少時の程にてありける。孟嘘君歸りて後。大に秦を怨み。韓魏と謀を合せ。秦を伐ちて。幽谷關迄攻め入りければ。秦之を恐れ。城を割きて。和睦をしける。其後孟嘘君齊に相となり。勢旭日の昇るが如くなりしに。或る人王に讒言しければ。孟嘘君罪を恐れて出奔し。中立して諸侯となれり。後齊。燕に破られ。襄王新たに立ち。孟嘘君の他に在りて。諸侯なりしを恐れ。使を遣はし與に連和しける。是より先き馮鑵と云へる者。孟嘘君が客を喜むと聞き。孟嘘君の許お尋ね來りしがば。孟嘘君之を傳舎に置きしお十日計り。馮鑵之を喜ばず歌を作り劍を彈じて。長鋏歸へらんか。食に魚なしと歌ひける。孟嘘君之と聞き。是い食に魚の付ざりしを。不平に思ひてあるべしとて。馮鑵を幸舎に遷しけり。此い中等の處お。食に魚を附けいり。然るに馮鑵又劍を彈じ。歌ふて曰く。長鋏歸らんか。出るに輿なしと。孟嘘君因て。之を代舎お遷す。此處い上等の客と待する所にして。客の出るとき輿に乘せける。然るに馮鑵い。又た劍を彈じ。歌ふて曰く。長鋏歸らんか。以て家を爲むること能はずと。孟

嘗君之を聞き。彼の馮鑵は何の功もなきよ。其言がまゝよ待遇するよ。尙之を不足とすること。心得ずと心に悅ひず。其まゝ打ち過ぎけるが。折しも孟嘗君の領地より。收ひる所の物客を養ふに不足し。又た薛の民よ。錢を貸し置きしに。其息を出さゞりければ。孟嘗君馮鑵をして之を責めんことを命ず。馮鑵承引して薛よ往き。其息と出すこと能はざる者い。悉く其券を取り出して。之を燒き捨てゝ歸りけり。孟嘗君先きより。心よからず思ひし馮鑵が恣に此の如きことをなしければ。大に怒て。君よ錢を取る事を賴とこそすれ。其券を燒げとい賴まざりし者をと。責めけるに。馮鑵恐るゝ氣色なく。吾は薛の民をして。君に親ましめんとて斯くい計らひしなり。何條怒ることのあるべきと答へければ。孟嘗君其意を悟り。大に悅びて。厚く馮驩を待しける。後孟嘗君齊王より。疑を受けて。危かりしまともありしが。薛の民に援くいれしまとありて竟に昭公となりて。薛に身を終いりける。

即墨の戰並田單の話

齊の湣王。宋を滅して。心益驕り。國の政を怠りしが。此の時燕の昭王。齊の嘗て燕を破りしまとを怨み。諸侯と謀を合せ。齊よ攻め來り。燕の軍既に齊の都臨溜に迄。攻め入りければ。湣王之を防ぐ力なくして。莒の國に奔りけるが。楚の將淖齒。齊を救ふ爲めに來りながら。反て湣王を殺して。燕と與よ齊より侵し取りし地を分ち取りけり。此の亂よ。王孫賈といへる者あり。湣王よ從ひて共よ莒に奔りしが。途にして。王の所在を失ひて。獨り家に歸り來て。其由と母よ語りしに。母の曰く。吾い汝が朝出て。晩よ歸るさへ。汝の歸り來る比い門に倚て。今や來んかと汝を望み。汝若し日暮れてより家を出で。時後れて還らざれば。吾は閭の門迄出て。汝の影や見ゆるらんと望む。吾の汝を思ふこと斯の若きよ。汝今王に事へながら。其の王の何地へ走られしや。其在處を知らずとて。斯く歸り來ることい。如何なる心なるぞや。と深く之を責めければ。賈い。母の言に心感されて。是い己の過ちありしとて。直ちに家を出で。義兵を募りて。淖齒を攻め之を殺して王の仇を復し。又た湣王か子法章の民家に隱れし者を求めて之と守り立て。莒の城よ據りて。燕の軍を拒ぎけり。此の時齊の城ゐて燕よ下らざる者は。此の莒と。即墨との二城のみあり。即墨の城い。田單と云へる人を推して大將となし之を守る。田單將軍となり。躬から版鍤を取りて。士卒と同じく働き。己の妻妾をして。行伍の中よ編を入れ。上下力と合せて燕軍を防ぎしが。田單終に謀を運らして。

城中の牛を悉く驅り集めて千餘の數を得たり。又た絳繒の衣を爲くらせ。其上に五彩を以て色どりたる。龍の文を畫かしめ。之を牛に着せ。又た刃を牛の角に結び付け。脂を灌ぎさる葦を牛の尾に付け。其端に火を放けて。城の塀に擊ち置きたる數十の穴より。夜に紛れて。一同に此の牛を縱ち出し。壯士等い其後に隨ふて押し出し。老弱の者い城内にありて。鼓譟して其勢を助く。斯くて縱たれたる牛どもい。尾の次第に熱くなるに隨ふて猛けり狂ひ。群り立ちし燕の軍中ゑ駈け入り。左右前後の嫌なく。突と立て跳ね飛ばし。其觸る所一人として傷を蒙むり。倒れ死せざる者もなし。其吼る聲。矢叫びの音。城内の皷軍鼓に和して。天地を振動するばかりなり。燕軍遂ゑ總敗軍とあり逃れければ。其れより齊軍頻さりゑ勝ちて。七十餘城を悉く取り返しけり。因て襄王位に即き。田單を封じて安平君と爲す。田單身富貴となり。勢國中ゑ振ひしが。折しも狄の叛きされば。單大將として。討手に向ひしゑ。三月を經たれども克つ能はず。流石の單も攻め倦て見けるゑ。魯仲連と云へる人。單に說て曰く。將軍先きに。即墨に在りしとき。一國悉く燕ゑ攻め取られ。何地に往かんどするに往くべき處なく。且り宗廟の滅亡旦夕に迫りしかば。生きんと云ふ心い毫りなく。只死を極

死ければ。下々の士卒に至る迄も。悉く生きんと云ふ氣を有たず。皆忠義に凝りて。泣を揮ひ臂を奮ふて。戰いんとを願いざる者なし。將軍始め兵卒の勢。斯の若くなりしを以て。遂に孤軍を以て勝ち誇りたる。燕の軍を打ち破ることを得たるなり。今之に反して。將軍の心には東ゑ夜邑の奉あり。西にい淄上の娛とあり。黃金を帶びて。紫驪を淄繩の間に聘せるの豪快あれば。生きて樂まんと欲する情慾ありて。死を極めて戰いんと欲する思ひあし。將軍既に此の如き心あり。士卒亦自ら怠慢の心ありて。力を盡して戰いんと思ふ氣なし。是のゆゑに。將軍久しく軍略を運ぐも。戰ひ克たざる所以なりと說きければ。田單實ゑもと思ひて。其翌日氣を勵し。勇を鼓して。矢石の飛び來る間だに突り立ち。自ら抱を取りて皷を打ち。兵卒を勵げまし。戰ひける程に。狄人遂に防ぐ能いずして。田單に降りけり。襄王の時田單等の賢臣ありて勢強く。其子建立りに及んで。其母君王后。賢明にして秦に事ふること謹愼を以てし。諸侯と交るゑ信義を以てしければ。國内いよ〳〵平穩なりしが。王后卒せし後。齊の客多くい秦よりの賄賂を得て。心を秦ゑ通じ。齊に在りて反間をなし。王の建を勸めて。秦ゑ朝せしめ。秦に備ふるまとをあさず。亦他の五國を助けて。秦を攻ひること

とゝもなさず。只秦に事ふるあとを。專らとなせしが。秦王政。五國を滅せし後ち。都臨淄に攻め入りける時。王建遂に降參せしかど。共と云るへ處の。松柏の間よて死されけり。秦因て齊を以て郡となす。齊人之れゝの爲めに歌ふて曰く。松か柏か。建を共よ住ましむる者い客。かと蓋し建客を用ゐるに詳かならず之が爲めに反間をなされしを嘲けるなり。

趙國　程嬰公孫杵臼の事

趙の先祖は。本と秦と同姓にして。蜚廉の子孫あり。造父と云へる者に至りて。周の穆王に事へ。功を以て趙城よ封せらる。由つて趙氏と改む。春秋の時に至つて。趙夙と云へる者。晉よ事ふ。夙の子成子衰。宣子盾を生む。衰い性質忠順。盾は性質猛武なり。ゆゑに世の人父子を評して。趙衰い冬日の日なり。趙盾は夏日の日あり。冬日い愛すべきも。夏日い畏るべしと云へり。盾の子朔の時。晉の大夫屠岸賈。朔を殺し其一族を盡す。獨朔の遺腹の子に武と云ふ者あり。賈は武の成長して後。己に災せんことを懼れ。嚴しく之を探がし求めける。時に朔か客に。程嬰公孫杵臼と云へる者あり。與よ朔が一族の亡びたることを傷み。相與に謀りける は。後に孤を守り立ると。今日身を殺すと。何れか難きと云ひけるに。嬰進み出で。死するあ

とい最と易く。孤を立ることい。甚だ難しと答るを聞き杵臼。程嬰に向ひ。子は其難き方をせよ。我い其易き方をなさん。其謀い云々なすべしと。互に示し合せ。杵臼い。或る者の兒と懷きて。山の中に匿れ入り。程嬰は賈の許に赴きて。謬り告ぐるやふ。若し吾に千金を與なば。吾能く子の深く求め給ふ所の。孤の在處を教へ申さんと云ひければ。賈大に喜びて。直ちに人を遣いし。程嬰を案内者として。先に立させ。杵臼の匿れたる山に至らしめ。之れを取り圍きて。杵臼と共ゐ其の孤を殺しける。是より賈大に心を安じ。晉國に威權を振ひしが。朔の眞の孤い。尚ほ世よ存在して。程嬰潛かに之を守り育て。成長の後之を武と名付け。力を合せて。賈を攻め滅ぼし。趙氏の仇を報じ。武を立てゝ趙氏の後を襲がしめ。之を文子と號そ。而して後程嬰い。我が望み既に足れり。是よりは世に在りて。亦た用もなし九泉の下とに在る宣孟及び杵臼の許よ赴きて。此の事を報けて喜ばせんとて。止むるも聞かず。自殺しけるあとそ。

無恤の事并豫讓の話

晉の文子の子。景叔。簡子鞅を生む。簡子の臣に。周舍と云へる人あり。人となり忠直にして。

簡子若し過ちあれば。事として諫めざるなく。諫むるは必らず直言を以てし。常に簡子を正しけり。されば其人死せし後。簡子朝より出で。政を聴くごとに。不快の面色あり。曰く千羊の皮は。一狐の腋に如かず。諸大夫の朝に出つるごとに。徒らに唯々の答のみ聞きて。周舍が如き鄂々の言を聞かずと歎じけり。簡子に二人の子あり。長を伯魯と名づけ。幼なるを無恤と云ふ。簡子此の二人の子に。訓戒の辭を二卷に書きて。一卷づゝを授け。能く謹みて之を覺え置けと命じ。三年の月日を經たりし後二子を呼び近づけ。先づ長子の伯魯に問ひたりしは。伯魯は其一辭さへ對ふること能はず。さらば其卷いと問ひしに卷は何處へか失ひしと答へける。簡子又た無恤に尋ねたりしに。無恤は懸河流水の如く。一點の淀みもなく。其卷は記るしたる辭を誦うしけり。簡子又た其卷は何地にと尋ねたりしに。無恤此處にとて。其卷を懐の中より。取り出して見せければ。簡子心に其怜悧なることを感じければ。後終に世を無恤に讓りけり。簡子或る時其臣尹鐸をして。晉陽を爲めしむ。尹鐸。簡子に向ひ。臣をして晉陽を守らしめ給ふは。其處より租稅を多く取り立てんとの意か。又た其處を以て。後の城塞と爲し給はんとの事か。即ち繭絲の爲めか。保障の爲めかと問ふに。簡子答へて。余の汝をして。晉陽を爲めしむることは。保障の爲めあり。何とて租稅を多く取り立てんとの。卑しき意ならんやと云へば。尹鐸其意を領して。晉陽に赴きし後。晉陽の戶數を減じて。其土地よりの租稅を少くし。多く其地に恩惠を施しければ。晉陽の人民は。皆趙氏を慕ふあとゝあれり。されば簡子常に無恤に語るには。晉國に若し變あらば。汝晉陽を以て。身の寄せ所とせよと云ひけり。簡子卒し。無恤其後を嗣ぎ。襄子と號す。時に智伯の勢。尤も强くして。始め韓氏に向ひ。土地と我に與へんことを求む。韓氏其勢に恐れて。土地を出しける。智伯又魏氏に向ひ。同じく土地を我に與へんことを求めたりしに。魏氏も其勢の勝ちかたきを察し。其意に從ひける。是により智伯は其心益驕り。趙氏に向ひて又地を割かんことを求めけるに。襄子は。智伯の求めは飽くことを知らず。さらは我等の土地を。次第に貪り盡さゝれは飽き足らざるべし。斯くては今土地を與へずして亡びんも。土地を與へて後に滅びんも。其滅亡に至ては一なり。さらは今其求めに應せずして。滅されんこと勇ましけれ。且つ少しは智伯の貪ぼりて飽くことを知らざる。心を挫じくに足りなんとて。土地を與へざりければ。智伯は果して大に怒り。何にとて我が意に逆ふや。さらは之を滅して。互に其土地を分たん

とて。自ら韓魏の兵を率ゐて。趙氏を攻めける。襄子い固より期したることあれい。直ちに晉陽に赴き。智伯の兵を防ぎける。智伯い此に押し寄せて。攻めけるど久しけれど。晉陽の城固ふして亡びず。智伯い韓魏と計り。晉陽の傍ある河と堰きて。晉陽城を水攻めになしけれい。晉陽城い日を増して。河水浸し入り。城内い宛がら海の如く。水の涵さゝる處は僅かに數尺のゑなりしかい。竈の中ゑ蛙の生じ。人々今や皆藻屑とやならん。魚とやならん。と生たる氣色なかりけり。されど一人として。趙氏に背く者いおく。皆死を極めて守りけり。襄子も既に死を期したるが。或る時一計を運らし。使を韓魏の陣に遣いし。今日趙氏亡ひば。明日は韓魏二氏隨て亡ぼさるべしと。利害を說きて共に力を合せ。智伯を滅ぼさんことを謀りしに。韓魏も固より智伯に。服從せしにあらず。只だ勢の勝ち難きゑ由つて從ひしおれい。趙氏の說く處に尤と同ー。互ひに日を期して。智伯を滅さんと謀りけり。智伯かくとい少しも知らず。今數日にして晉陽城を亡ぼすべしと。心驕り益韓魏を驅使しけるが。其不意ゑ乘じ韓魏は早くも高き地に陣を移し。堰きたる水を放ちしかば。此の氷反つて智伯の陣を浸し。智伯の軍勢忽ち洪水に遇ひたる心地して。我れ生きんと騷きけるを。襄子い城内より之を見て。すい機ころ好けれと城門を開き。一同ゑどつと打ち出づれい。韓魏の兩軍。亦た高みより鬨を合せ。智伯の陣を攻立けれい。智伯之を防ぐの術てを失しなひ。遂に三家の爲めに滅ぼされけり。之ゑ依り趙韓魏の三家。智伯氏の土地を分け領しける。襄子は智伯を怨めること尤も甚しく。智伯の頭に漆を塗り之を飲器とおして弄ひける。時に智伯の臣ゑ。豫讓と云へる者あり。智伯の爲めに襄子を殺し。仇を復せんことを謀り。詐つて刑人とおり。匕首を懷に匿し。襄子の宮中に出入して。或る時圊を塗り居たりしが。襄子圊に行かんとて立ちたりしに。如何おしけん頻さりに心動けれい。最と不審に思ひ。圊やへ行かずして。近侍の者をして。奇しき者あるべきかと。近邊を求めさせたりしに。果して豫讓を獲たりしかい。襄子自ら之を責めて曰く。子い嘗て范中行氏に。事へしゑあらずや。范中行氏は智伯の爲めに亡ぼされしに。子は范中行氏の爲めに。仇を報ひんとの心おく。反つて智伯氏ゑ事へ。今に至りて獨り智伯氏の爲めゑ。我を仇とするいおんぞやと云ひけるに。豫讓さればとよ。范中行氏い只だ尋常の者と同じく我と遇したれい。我も尋常の者を以て之に報ひしのゑ。智伯い之ゑ反して。國士を以て。我を遇したれい。我も亦國士を以て。之に報ゆるおり。何條不審のこ

とやならんと。恐る氣色なく答へしかば。襄子其義ある言よ感じ。是い義士なり如何で之を殺すべき。但だ我より謹んで之を避んのことて。豫讓を其儘宥しける。豫讓は今殺さるべき命を。危ふくも助かりしが。尙ほも襄子を。仇とする心い止まで。再ひ其躬に漆を塗り。厲者の如く仕立て。炭を呑ミて啞とあり。食乞ふ者に身を寠して。市に出で食を乞ひ〳〵。我が家の門に立ちしも。豫讓が妻すら夫の此く成り果てし狀に見違ひける。豫讓い かくてこそ襄子に近づくべけれ。と心竊かに喜ひけるに。或る日朋友に遇ひけるに。其友い豫讓あることを知り。豫讓の心を苦しむることを傷ミ。豫讓に告ぐるよい。子が才を以て。出でて趙孟に事へあば。趙孟い固より子を貴べば。子の趙孟に寵せられて。其傍に近づかんこと。何條難かるべき。さらば之を刺し殺し。子の志を果さんこと。囊の中の物を取るよりも。尙ほ易きと思はる。然るを何とて斯く心を苦しめ。身を難めることの。あるべきかと云ひけるに。豫讓曰く。卿が言不可なり。既に人に質を委ね。其臣下となりて後。其人を殺さんい。是れ二心を有つと云ふ者なり。凡ろ吾が爲所い。固より難儀の事なり。吾之を知らざるにあらず。されど知りながら之を爲す者は。之を爲して以て。天下後世の人の臣下とありて。二心を懷く者

を愧かしめんと思へばなり。と其友豫讓が義の堅に感じ。泣を拭ひて別れける。豫讓其れより彼處此處と徘徊して。或る日橋の下に伏したりしに。折しも襄子其橋に行きかゝり。不思議に乘りたる馬の先さよ進まず。打てども叩けども。動かざりしかば。襄子い臣下をして。怪しき者やあらんと命じければ。從臣處々を探ねたりしに。見るも忌はしき乞兒一人と。橋の下より引き出しける。襄子能く之を見るに。豫讓なりしかば。已の天運强かりしを祝し。且つ豫讓を責むる。子は何とて斯く吾を深く讐とするや。吾先さに子が義の厚さよ感じて。子を舍るしたりしに。子い尙ほ改めずして斯くの若し。今子を殺すも。誰一人吾を義を知らざる者とも云ふべからず。子も亦心に憾むることあるまじと云ひけるに。豫讓も今い運の極めと心に決しければ。少しも怖れたる色なく。君の寛大なること。我能く知れり。今君よ殺されんこと。少しも遺憾の思ひなし。さりながら此の期の思ひ出に。君の着けたる衣を得て。切めて腹心を慰めんと請ひければ。襄子も其心に感じ。着たる衣物を脫ぎて與へしに。豫讓い之を取りあげ。懷ころにしたる匕首を取り出し。之を三刀迄も刺し通し。是にて智伯に報ゆる心の果しとて。靜かに死に就きけるとぞ。

蘇秦の話

趙の襄子。伯魯の孫浣を立て後と爲す。是を獻子と爲す。獻子烈侯籍を生む。籍。周の威烈王の命を以て侯と爲る。籍より武公。敬侯。成侯を歴て。肅侯に至る。此の時秦勢を天下に得。諸侯を恐喝して。地を割き與へんとを求む。諸侯其威に怖れざるなし。時に蘇秦と云へる者あり。是より先き秦に游ひ惠王に說きしことありしが。惠王其言を聽かざりしかば。秦を去り燕に往き。文侯より。說て趙と從親せんことと勸めたり。文侯乃ち其言に從ひ。蘇秦に多く金を與へて其資となし。趙に至らしむ。蘇秦趙に至り。肅侯に見え。今諸侯の卒を合せば。其數の多きこと。秦に十倍せり。此の衆き力を合せて。西の方秦に向ひあば。秦を破らんこと。鏡に照らして見るが如し。故に大王の爲めより計るに。大王の國。燕。韓。魏。齊。楚と。六國相ひ合從して。秦を擯けあば。秦如何に强しと云ふも。爭で敵し得へけんやと。述へけるに。肅大より其言を可とし。又た多く金を與へて其資となし。他の諸侯と從親を約せしむ。蘇秦他の諸侯に赴きて之を說くに。寧ろ鷄口と爲るも。牛後と爲る勿れとの諺を以て。其心を勵しける。諸侯皆其言に激して。忽ち六國の合從となりけり。此に於て蘇秦。六國合從の長となりて。六國の相印を佩ひたり。抑此の蘇秦の出所を尋ぬるに。素と鬼谷先生を師とし學ひ。其初出游して甚た貧困に陷いり。貧しき狀にて歸り來たりしより。其妻折しも機を織り居たりしが。其窶れたる狀を見て之を賤しを。機より下り來たらず。嫂も同じく茶一つだに汲み出ださず。之を侮りければ。蘇秦大より心に感じ。其より晝夜眠をなさず。眠催せば股より錐をさして眠を覺し。鬼谷先生より授かりし書を繙きて。終に大より得る所ありて。再ひ家を出で。他國に游ひ。遂に六國合從の長となり。洛陽に來て。我が家を訪ひたりしに。其車騎輜重凡へて王者に擬らへしかば。先きに反して。昆弟妻嫂。皆蘇秦より眞向ふて。物言ふ者もなく。只地に平れ俯して。食事等に給事しければ。蘇秦心の中より可笑思ひ。卿等い何とて。前きに甚だ驕りて。後にはかく恭しきやと云へば。嫂進み出で。前きにい季子の貧しき狀を愚にも悔りたればなり。然るに今い。季子が位高く金多きと見て。我れあがら覺えずかく恭敬の心出てしなりと答ふるを聞きて。蘇秦喟然として歎息しつゝ。此れ一人の身より。富貴なれは親戚も之を畏懼し。貧賤あれい之を輕易す。況して他人をや。若し我をして。此の洛陽城外に。二頃の田あらしめたらい。何にとて今日能く。斯の若く六國の相印を。佩ぶることを得べけんや

。此の今日ありしは。貧困なりし賜なりと云ふて。千金を分ちて。宗族朋友に與へけり。蘇秦合從の約を定めし後。朝に歸り。武安君と爲り。富貴に身を送りしが。秦より犀首をして。趙を欺き。合從の約を敗しよより。齊魏の國。趙の合從の約を背くことを怒り。兵を起して之を攻めければ。蘇秦罪を恐れて。趙を逃げ。之より合從の約。終よ解け敗れり。

藺相如廉頗の話

趙の肅侯より。武靈を歴て。惠文王の時に。楚の和氏の璧を得たり。此の玉い天下に名高かりしゆゑに。秦の昭王頻さりに。之を得んと思ひ。使を趙よ遣し。十五城を以て。其璧と易へんことと請へり。趙い其璧を與へざれば。秦い其强に任せて攻め來らん。さりとて之を與ふれい。十五城い得られずして。徒よ欺かれんことの明かなれい。如何にせいや。と評議紛々たりし。藺相如席を進んで。其璧を持ち秦に赴き。昭王に會し。若し眞に城と取易へない。璧を秦よ渡し十五城を趙に受取り來たらん。昭王若し城を與へざれは。再び璧い完ふして。持ち歸らんと請ふに。さらいとて。藺相如をして。璧を齎らしめて秦よやれり。藺相如い昭王に謁して。璧を献じけるに。果して璧を取りて。城を與ふる氣色なかりけり。藺相如其氣を察し。璧に一處の瑾あれい。之を示めさんとて。欺き取るや否。座を却きて柱の下に突立ち。怒れる髮い冠を指し。聲を振り立て。無法に此の璧を得んと欲せい臣が頭い此の璧と俱に碎けんのみ若し此璧を欲せい。大王宜しく齋戒沐浴して後敬して之を受け給へと。罵りけるに。秦王始め幷み居る諸臣も藺相如の勢に恐れて。一人も手向ふ者なし藺相如依て靜かに旅舍よ退りぞき。從者をして璧を持ち。先づ間かに秦を逃がれて。趙よ歸らしめ。身は死と極めて。秦王の命を待ちたりしに。秦の昭王も。藺相如の賢に感じて。之と宥し歸しけり。藺相如趙に歸りて後。惠文王其功を賞し。上大夫と爲し。重く之を用ゐける。此の後。秦王又た趙王に。澠池に會せんことを。約し來たりけるに。趙王い。往かざれい臆怯なり。往けい秦に脅かされん。と恐れけるに。藺相如。趙王に勸め。自ら之に從て澠池の會に赴きける。酒半いの頃秦王趙王よ瑟を皷せんまとを請ふ趙王之を皷しかたり。相如因て復た。秦王に缶を擊て。秦の俚歌を歌いん事を請ひしよ。秦王肯いざりしお。相如聲を荒らけ。大王。富强を負み給ふといへども。今五步の內に。臣が頸血を以て。大王に濺ぐべしと罵たり。秦王の左右近侍の徒。之を怒り相如に刃せんとせしを。相如が叱咤せしに。皆怖をて後へ靡さけり。秦王も其勢に脅

かされて。缶を擊ちて相如が請ひ儘ゐせられける。かゝりしかゞ秦終に趙に一歩も加ふること。あたわざりし相如の功。屢々斯の若くなりしを以て。趙王之を重く用ゐる。將軍廉頗が右に置きたり。されゞ廉頗心ゐ之を面白からず思ひ。嘗て其家人ゐ語るに。我れ趙の將となりて攻城野戰の功あり。然るに此頃相如卑賤の者なりしに。徒らに辨舌を以て。我が上ゐ位するに至れり。吾之が下に付くことを羞ず。我相如を見ば。之を辱しめて。朝より退ひ退ぞけんとぞ語りけるを。相如洩れ聞きて。其れより廉頗朝に出つる時ゝ。相如病と稱へて。席を列ねず面を會はすことを。なさゞる樣に計らひける。相如或る時途上にて。遙かに廉頗の來るを見て。己の乘たる車を。急に他の途ゐ轉せしめたるに。從者共怪て我主人ゝ何とてかく廉頗を恐れ給ふにや。世の人も卑怯を笑へゝ。我々も耻かしく思ふなりと云ふを。相如莞爾として。此れゝ吾ゐ思ふ旨の在れゞなり。夫れ秦の猛威を恐れず。其朝廷にて其王を叱咤し。其群臣を辱かしむ。されば吾如何ゐ罵と雖ども。獨り廉將軍を畏んや。顧念ふに今强秦の敢て兵を趙に加へざる者ゝ。徒に吾と廉頗將軍との。兩人あるを以てなり。然るに今兩虎共に鬪ゝゝ。其勢俱に生きず。何れか一方ゝ傷りくべし。兩人亡びゞ。趙の國危ふし。即ち吾り此の如く爲す者は。國家の急と先にして。私讐を後にするなりと說きけるを。廉頗人傳に聞きて。我か今迄の振舞の愚かなりしとて。肉袒して脊の上ゐ荊を負ひ。相如の門に詣り。無禮の罪を詫ひて。遂ゐ刎頸無二の交をなしける。其後孝成王の世に。韓の上黨の事により。秦の兵を受けしかゝ。廉頗將軍として。長平を堅く守りければ。秦人反間の謀をなして。秦ゝ獨り馬服君趙奢の子括か。大將とならんことを。恐ると云ゝせけるに。趙王其言を信とし。趙括として。廉頗に代ゝらしむ。時に相如。趙王を諫めて曰く。其名の高さのみを以て。括を使ふことは。柱に膠して琴を皷するか如く。括ゝ。徒に能く其父の書を讀むのゝ。機に臨み變ゐ應ずるゐとを。知らざるものなり。と又括の母も上書して括ゝ大將に使ふべからざる者ゐり。と云ひける。抑括少ぎ時より兵法を學ひ。天下能く吾に當る者なしと心に誇りて。父の奢といへども兵法を論ずるに。勝つゐと能ゝゝ。されども父の奢。常に括の母に語るに。兵ゝ死地なり。然るを括ゝ容易の事に思ひ爲すゆゑに。趙若し括を大將とすることあらゝ。必ず趙の軍を破らんと云ひける。されは相如も其母も。共に諫めたりしに。趙王其言に從ゝず。括と大將とせしに。括秦と戰ひ。秦の大將白起に。射殺されて。其軍四十萬人。皆長平に坑

埋没にせられけり。廉頗大將を廢せられて後。魏に行しか。孝成王の子悼襄王に至り。再ひ廉頗を用ゐんことを思ひ。人を遣いして廉頗の樣子を觀せしめしに。頗の仇郭開と云へる者。頗の再び用ゐられんことを恐れ。其使者に多く金を與へて。頗を毀りて。再び用ゐられざるやう計らふべと賴みたり初め頗が使者と會ひしとき。一度に一斗の米。十斤の肉を食し。甲を被て馬に上り。老ひたりとも。尙は勇力の劣へずして。十分に大將とあらるべきことを示めせしよ。使者還りて王に申すに。廉將軍い昔に變らず。健かに飲食せらるゝも。但だ老年の惜むべきい。臣と談話せる僅かの間に。三たひ淨手と立ちしと語りけれ。王も頗は最早年取りたとて。召び戻し用ゐざりけり。楚人頗の魏に在ることを聞き。之を迎へけれど頗楚の將となりし後。さしたる功も立てざりければ。頗自ら嘆して。我趙人を用ゐんことを思ふと云ひける。此れい頗久しく趙人を訓錬せしを以て。其者を率もれ大功あるべきに。楚にて顏新しき兵を用ゐて。功あきことに付き。舊きを思ひ出でしあり。趙い藺相如。廉頗の二人卒し。李牧大將となりて。北邊に居り。屢々匈奴を破り。悼襄王の子。幽繆王遷の時に。秦王政の兵を受け。李牧又た大將となりて。之を破りしに。幽繆王秦の反間の言を信じ。李牧を

誅し。遂に王は秦の虜となる。因て趙の七大夫。趙嘉を立て王と爲せしが。遂に秦に滅ぼされけり。

平原君之話並毛遂乃話

趙の相に平原君ゐるものあり趙の公子にして。名を勝と云ふ。平原君い其號あり。客を喜て。食客常に數千人あり。客に公孫龍と云へる者ありて。堅石い石にあらず。白馬い馬にあらぎ。既に堅きと云へば。是れ石あらざることを知るべし。既に白しと云へば。馬にあらざることを知るべし。又た人の異ゐると云へることを。同じまとなりと云ゐて。之を同一にす。世に之を堅白同異の辨と稱へけり。或る時趙の邯鄲。秦に攻められけれい。平原君。救ひを楚に求めんとて。門下の中より文武兩道と。備へたる二十人と擇びて。俱に赴かんとして。既に十九人を擇ひたりしが。今一人を得ざりけるに。客の中より毛遂と云へる人。我ころ其中に入らんと自ら薦めける。平原君。毛遂と向ひ。士の世に處するい。錐の囊中に處るが如し。其末立ごろと見はる。今先生の吾門下に來りて處らるゝこと。三年の久しきを及べども。未だ何ごとも聞きたることなしと難じけるに。毛遂答ゐるやう。遂として囊に處ることを得せしめゐ

ば。其穎は脱出でゝ。特り其末の見るゝ如きのみにあらずと平原君因て二十人の中に加へけれは。餘の十九人ハ。互ひよ袖引き。目を見合ハせて笑ひける。斯くて平原君楚よ至り。從約のことを議し。容易に定まらざりしが。毛遂劍の柄に手を掛け。階を走せ昇り。聲を振り立て。從の利害は。兩言にして決せんのミ。利あれバ合從すべし。害なれハ合從すべらず。然るに今日の出よりして之を論し。日中に至りしも決せざるハ何事ぞやと罵りければ。楚王大に怒り。胡んぞ此處を下らざる。吾ハ汝の君と論するのみ。汝何者なれハ。斯く無禮なるぞと叱りけるに。毛遂一歩も退かず。劍の柄に掛けし手も緩るべず。尚ほ楚王の方に前み。大王の遂と叱する所以ハ。楚國の衆を負みてあり。然れども。今此の十歩の内にハ。楚國の衆は恃むことを得ざるべし。大王の命ハ。遂の手の中に懸れり。夫れ楚の强を以てすれハ。天下能く之よ當ることなし。然るよ彼の一小竪子の白起。一戰して鄢郢(楚の地)を舉げ。再戰して夷陵(仝上)を燒き。三戰にして王の先人を辱しめたり。此れ楚よ在りては。百世の怨よして。楚の爲めに。趙ゐ於て羞とおす所あり。今合從して秦を討りハ。楚の爲めにして。趙の爲めに非ざるなり。然るを大王の此の議を決せざるハ。何のゆゑぞと。隈べけるゐ。楚王其勢と其理ゐ服し。誠よ先生の言の如し。謹んで社稷と奉して以て從ハんと。只だ唯々せしかば。遂乃ち左右に命じ。雞狗馬の血を取り來らしめて之を銅盤に盛りて。自ら捧げ跪き進みて曰く。王先づ血を歃りて。從を定むべし。次ハ吾が君なりとて其血を歃らせ。其次ハ遂ゐりとて。左の手に盤を持ちながら。右の手にて十九人を招き。血を堂下よ歃りつゝ。十九人に向ひ。公等ハ碌々として。謂ハゆる人よ因て事を成す者なりと云ひけるに。十九人の者。初め笑ひしに變ハりて。皆面を赤らめ心に耻ちて。一言も答へざりけり。平原君。從約を定めて趙に歸り。遂に謂て曰く。毛先生一たひ楚ゐ至って。趙をして九鼎大呂より重からしめたりと賞し。遂を以て上客と爲す。かくて楚よりハ春申君來り救ひ。又た魏より信陵君の來り救ふよ會し。大に秦の軍を邯鄲の下に破りけり。

魏國　文侯の事並田子方ハ話

魏の祖先は。周と同姓にして。文王の子。畢公高の後ゐり。中比にして國絶ゑ。其苗裔ハ畢萬に至りて。晉に事へ魏を領し。其れより數世の後に。絳と云へる者ゐりて世に聞え。其れより四世を歴て。桓子ゐ至り。趙韓と共に知氏を滅して。其土地を分ち。桓子の孫。文侯斯よ至

り。周の威烈王の命を以て侯となれり。文侯斯生れ得て。賢明にして。卜子夏。田子方等の賢人を以て師となし。段干木と云へる賢人を敬い。其閭を過ぐるとき式禮を施しける。かく賢人を敬ひしかば。之を聞傳て。四方の賢士。多く其下に集ひけり。文侯或る時李克に謂ひけるやう先生嘗て寡人に教へられしに。家貧ふして妻あらんことを思ひ。國亂れて臣。良き將を得んとを思ふは。是れ人情なりと。云へり。今吾國も良將を得んと思ふあり。誰をか將とせん。魏成が宜らんか。翟璜が宜らんか。克答て曰く。居ては其親しむ所を視。富て其與ふる所を見。達して其舉ぐる所を視。窮して其爲ざる所を視。貧して其取らざる所を視れば。其人の甲乙輕重を觀定むることを得べしと。文侯因て。子夏。田子方。段干木の人々を。成が薦舉せし所ありとて。遂に成を相とせり。此の田子方と云へる人は。富貴を諛らず。直言忌むなきの人なり。或る日文侯の子擊。途中にて子方に遇ひしかは。車より下りて。敬しく禮を施し。身を伏して謁しけるに。子方は敖然として。答禮をもあさゝりしかは。擊心に怒を含ませて。富貴の者人に驕るか。貧賤の者人に驕るかと問ひて。己は貴き身を持あから。斯く敬しく禮を爲すに。汝は貧賤にあらずなから。答禮をもあさゝるは。如何なることぞ。と難したる意なりしに子方は貧賤なる者まそ。人に驕るのみ。富貴なる者。如何で人に驕るあとを得べき。國君にして人に驕りあば。忽ち其國を失ふべし。大夫にして人に驕りなば。忽ちにして其家を失ふべし。之に反して士の貧賤ある者は。己の言ふこと。用ゐられず。已の行ひて合はざれは。屣を納めて去んのみ。貧賤は。何地に赴くとして得がたからんや。是れ貧賤の者は人に驕るべきも。富貴の者は人に驕るべからざる所以ありと答へて。擊に驕慢の心を有つ可らざると。又天下の士たる者は。少しも心に驕慢の心ありて。之を待遇せば。人に事ふべき者にあらざれは。常に富貴の身を謙遜して。あしらふべし。今吾の君に無禮の振舞あせしは。此の義を申さんとの意なりと。其れとなく教しへけれは。擊大に喜びて。其身の淺慮に怒りしことを謝しけり。

吳起の話

吳起は衛の人なり。初め魯に事ふ。魯曾て起をして。齊を擊たしめんとす。起が妻は。齊の國の人なり。魯の人之を疑ひ。起或は。齊に通ずるとあらんと思ひ。大將には用ゐがたしと議しけるを。起傳へ聞きて。我何條婦女の爲めに。身を過たんやとて。自ら其妻を刺し殺し。斯

くてい我ゝ疑ふ所あるまじと云ひけれい。魯人疑ふ所なく。大將に任じけれい。起衆軍を率ゐ。大ゝ齊の軍を破り。大功を立てける。然るゝ或人魯の君に云つて曰く。起は妻を殺して。大將たらんまとを求む。是れ殘忍薄行の人なり。其妻ゝ向て。此の振舞あれば。他人に向ひていい。如何なる振舞も。忍びて行ふべし。と讒しける。起之を聞きて。罪を得んことを恐れ。魯を逃れて魏に赴きしに。魏の文侯起を用ゐて。大將と爲し秦の五城を拔きけり。起の士卒を率ゆること。身い大將の貴きに在りながら士卒と。起臥と等くし。衣食を同す。或る時兵卒の中に。疽を病む者ありしか。起口にて其癰を吸ひ遣りけり。然るを其兵卒の母。其事を聞きて俄ゐ哭きけれい。人々怪しみて。汝の子い兵卒の身分なるゐ。大將の口つから。其疽を吸ひ賜ふこと。其恩にころ感ずべけれ。何とて哭くことやゐると云ひけるに。卒の母曰く。往年吳公此の子の父の疽を吸いれしことありしか。父い其恩義に感じて。踵も旋さず吳公の爲めに死しけり。今其子も吳公に疽を吸いるれば。其子も其恩義ゝ感じて。吳公の爲めに。身を殺すべしと思へば。最と〻悲しく思ふゐと答へける。起い文侯卒して後。其子武侯に仕へけるが。或る時武公と共に。舟と西河に浮べて遊びけるに。中流にして武侯起を顧ゑて。美なるかな。山河の固め。此れ實ゝ魏國の寶ゐり。と云いれけるゝ。起答へて。國の寶と云へる者い。德ゝ在りて。險なるゝゐらず。昔三苗氏い洞庭を左にし。彭蠡を右にしたりしか。禹之を滅す。桀の居い。河濟を左にし。泰華を右にそ。伊闕其南にあり。羊腸其北に在り。然るに湯之を放ちたり。紂の國い。孟河を左にし。太行を右にす。恒山其北にあり。太河其南を經。然るに武王之を殺せり。險の恃むべからずして。恃むべきい。德なること知るべし。若し德ゝ修めざれば。此の舟中の人。皆王の敵國ゐりと述べければ。武侯其理に感しけり。

張儀ゝ話

魏に張儀と云へる人ゐり。蘇秦と同じく鬼谷先生に從ひ學ぶ。嘗て楚の相に從ひ。大に辱しめられしまとゐりし時。儀の妻大ゝ慍りて。儀い丈夫に非ずと罵りけるゝ。儀少しも怒らず。妻に向ひ。口を開き吾が舌を視よ。尙ほ在りや否。在らば吾が事足れりと云ひける。蘇秦合從の約を定めしとき。秦國の之れを破らんことを恐れ。之を防がんには。儀をして秦ゝ遣い し置くゝ若かずと思ひ。人をして儀を己の門下ゝ召ひ。散々に恥辱を與へければ。儀心に憤りけるが。天下諸侯の形勢を察そるゝ。蘇秦に抗するい。秦より外になかりしかば。終に秦

に赴かんと欲し。蘇秦の家を出で。秦國に行かんとし。儀路の資よ乏しかりしに。一群の旅客。途上儀を丁寧に待する者あり。儀之を不審よ思ひけれども。其爲す儘にしてありしよ。寢ゐ就さし後。其旅客。儀よ多くの金帛を與へて。是れい我が主蘇秦よりの贈物なり。我主蘇秦六國の從約を秦より破らんことを怖れ之を止むるゐい。君より外に人ゐしと思ひ。前さの如く。無禮侮慢を加へて。君を激して。秦に入らし免んと計りしに。果して君秦に入り給ふよより。我をして其事を告げ。前日の無禮を謝し。且つ秦をして。從約を破らしめざることを請いしむと聞きて。儀始めて。蘇秦に計られしことを知り。儀い蘇秦に及ばずと歎息しつゝ。吾の在らん限りい。秦として。六國の從約を破らしめざるへし。と堅く諾なひける。其後蘇秦趙を去りて。從約解けしかゞ。其れより張儀專ら連横の說を唱へ。遂ゐ六國を連ぬて。秦よ事へしめける。秦の惠王の時。儀自ら兵を率ゐ魏を伐ち。一邑を得たりしが。之ゞ魏に復し。後に魏に說き秦い侵地を復へと程の好意あれゞ。魏よりも其に報ゆるとなかるべからずと。魏をして多く地を割きて。秦に謝せしめける。既にして又秦の相となる。凡秦に入りて相となること三回。魏に出でゝ相となるゐと三回。惡く秦の爲めに計りけるか。終に魏に相となりて

卒しける。

信陵君の事

魏の安釐王。公子無忌を封じて。信陵君と爲そ。無忌人を愛し士に接するよ恭讓なりしかい。食客三千人の多きをゐせり。秦趙を攻めしとき。魏より晉鄙を遣はして。之を救いしめんとせしゞ。秦の昭王。先づ趙を救ふ國に向つて。兵を向くべしと云ひければ。魏王大に恐れて。晉鄙の軍を境よ止め。又た新垣衍を遣いして。趙と共に秦を尊んで。帝となさんことを說かしめたり。時に趙に魯仲連ありて。此の事を聞き。衍を見て。彼の秦い。禮義を棄てゝ戰功を上ぶの國なり。即ち其志を肆にせしめて。天下に帝たらしめゞ。連い東海を踏んで。死するとゐふんのこと。或い之を激し。或い其非を辨じければ。衍い先生は天下の士なり。敢て復た秦を帝とすることを言はゞと。其理に服しけり。此の時趙の平原君の夫人い。無忌の姉ゐりしかは。平原君の許より。無忌の方に救を求め來ること。使者の冠蓋相望めり。無忌因て趙を救いんことを自ら王よ請ひ。又た賓客をして。萬端王ゐ說かしめけれども。王聽かず。無忌の客の中に侯嬴と云る者。無忌に敎て曰く。王の寵姬に禱先て。窃に晉鄙の兵符を取ら

しめ。又た力士朱亥を薦めて。與に行かしめ。晉鄙若し符を合せ見て。倘ほ疑ふことあらば。朱亥をして直ちに之を擊ち殺し。且軍を奪へと無忌因て一々其言に從ひ。遂に晉鄙の軍を得て。趙に赴き大に秦の兵を破りて。邯鄲の圍を解きけり。然れとも無忌は。魏王の命を矯め。晉鄙を殺し。其軍を奪ひしを以て。罪せられんことを恐れて。趙に止まり。魏に歸らざりける。後魏秦に伐たるゝに及びて。魏より人をして。無忌に歸ることを。請はしめけるに。無忌尚ほ歸へる事を肯せざりしが。客の毛公。薛公の二人。無忌を諫むらく。魏急あるに。公子之を憂へず。救ざる中に。秦大梁（魏の都）に克ち。先王の宗廟を夷げば。其時公子は何の面目ありて。天下の人に面を向くべきや。と說きければ。無忌其過を謝し。直ちに魏に歸り。之を救ひける。又た他の諸侯も。無忌の再ひ魏の將となりしと聞き。さらば之を救へとて。皆援兵を遣はしけゝ。無忌五國の兵を率ゐて。秦の兵を河外に敗り。追ひて函谷關に至れり。後無忌魏に卒しけり。

魏國の末路

魏の武侯卒し。子惠王新に立ち。齊に敗られ。將軍龐涓も。太子申と皆之に死し。又多く秦に

地を奪はれければ。辭を卑くし幣を厚くして。賢者を招きし時に孟子の至りしも遂に之を用ゐること能はず。子襄王立つに及んで。孟子去つて齊に之きけり。此の後張儀に屢々欺かれて。地を秦に取られ假の世に至りて。秦王政に攻められ。假終に殺されて。魏亡びけり。

韓國聶政の話

韓の先祖は。本と姬姓にして。武王韓侯の後なり。中比にして國絕えけるが。其後齋晉に事へ韓子と爲る韓武子より三世を厥と曰ひ。世に聞えり。厥より五世。康子に至りて。趙魏と共に知氏を滅し。其二世景侯虔に至つて。周の威烈王の命を以て侯と爲れり。景侯より四世哀侯に至つて。都を鄭に徙す。哀侯より二世にして昭公に至る。昭公賢明にして。鄭の人申不害を以て。相と爲し。國治まり兵强し。申不害は。黃老刑名の學を以て著はる。昭侯一切の弊れたる袴を。大切に藏め置て。左右に賜はらざりければ。近侍の者之を怪しみ。君も亦不仁ありと云ひけるに。昭侯曰く明主たる者は一頤一笑とても。容易にあざゝる者あり。君頤すれば。臣其意を逆へて。頤する者あり。君笑へば。臣亦た笑ふ者あり。今袴は特に頤笑の比にあらずや。假初めに之を與ふべけんや。吾は有功の者を待りありと。昭侯卒し。子宣惠王立つ。三世

にして。桓の惠王に至り。韓の上黨の守趙に降り。趙をして秦の兵を受けしめしが。韓亦長平の敗あり。後一世よして王安に至り。秦王政に虜とせられ。韓卒に亡びけり。韓の景侯の時。相俠累と。僕陽の嚴仲子と善からず。仲子俠累を殺さんと欲し。軹の人聶政の武勇勝れたるを聞き。黃金百鎰を以て。其母の壽を爲し。聶政に俠累を殺さん事を賴みしに。政の曰く。老母の在らん限りは。政が身は人に許すべからずと斷りけるが。母卒するに及びて。仲子再び之を請ふ。政即ち請に應じ。俠累の許に赴しに。俠累方に府に座して。兵士の衛甚だ嚴重なり。然るに政直ちに坐に駈け入り。俠累を刺し殺し。兵士の騷ぐ間に。自ら面の皮を剝き。眼を抉り出し。自殺しければ。韓の人其何人たることを。知るに由なかりしかば。其尸を市に曝して。能く之を知る者あらば。多く金を與へんと令しけるに。政の姉嫈。之を聞き。是れ弟の政。人の爲めに仇を報ぬるが。其累を妾に迄及さんことを慮り。かくは自ら身を刑して。人として何人たることを。知らしめざりしなり。されど妾奈何で。我が身を殺さるべきことを畏れて。終に此の賢弟の名を。沒せしめんやとて。政が旁に來り自殺しけり。政と云ひ。安と云ひ。兄弟とも。義に勇ましき人々なり。

楚國　莊王の事　並懷王の事

楚の先祖は。顓頊より出づ。顓頊の子。高辛の火正と爲り。祝融と曰ふ。弟吳回復た其職を次ぎ。吳回より二世季連。芈姓と得たり季連の後鬻熊。周の文王に事へ成王の時。其子熊繹丹陽に封せられ。夷王の時。楚子熊渠僭して王と爲り。其れより十一世にして。春秋の世に逢ひ武王に至りて。益々強大と爲り。文王に至つて。始めて郢に都す。成王齊の桓王と。召陵に盟ひ。尋で宋の襄公と覇を爭ひ。後晉の文公と城濮に戰ふ。後穆王を歷て莊王に至る王位に即きしより。三年に及ぶまで。政を聽かず一令をも出ださずして只だ日夜飲酒を樂みけり。又國中に令し。敢て諫むる者あらば。死に處せんと云ふゆゑに。人其非を諫むる者あかりしか。一日伍舉。王に向ひ阜の上に鳥あり。三年の間。飛ばず鳴かず。是れそも〳〵何の鳥ぞと云ひけるに。王の曰く。之れ尋常の鳥にあらず。三年飛ばざるは。飛へは將さに天を衝かんとす。三年鳴かざるは。鳴かば將さに人を驚さんとすと答へける。蘇從亦之を諫めたりしに。王乃ち左に從が手を執り右に刀を抽きて。鐘鼓を懸けたる紐を。斷ち切り。遊興も此れ限りとて。明日より政を聽き。伍舉蘇從を用ゐて。國の政を執らしめけれは。國人始めて其賢に服し大に

悅び。國治りける。又た孫叔敖を得て相と爲し。遂よ諸侯よ覇となれり。是れより共王。庚王。郟敖。靈王。平王。昭王。惠王。簡王。聲王。悼王。肅王。宣王。威王を歷て。懷王に至り秦の惠王。齊を伐たんとして。楚の齊に與せんこと患へ。乃ち張儀をして。懷王に商於の地六百里を献するを以て。齊と交を絶んことを請ふと說かしめければ。懷王其言を信とし。勇士をして齊王を辱かし先。交を絶しめたり。齊王大ゐ怒り。反つて秦に合しけり。懷王之を知らず。使を遣いし地を請いしめしに。儀曰く。某の地なり某の地に至る迄。廣袤六里の處を與へんと云ひければ。王大に怒り。兵を起し秦を。伐ち却て大ゐ敗れけり。後秦の昭王と黃棘よ盟ひ。又た秦より武關に會せんと云ひ來りし時。屈平なる者あり。此い秦の謀あれば。行くべからずと諫先しに。公子蘭。王ゐ勸めて赴かしめければ。王い秦に虜よせられ。遂に秦よ卒す。楚人王の子頃襄王を立つ。初め屈平懷王に信任せられしが。人の讒により王に疏せられ。離騷を作つて自ら怨み。頃襄王に至り。又た譖せられて江南に遷され。遂よ汨羅に投して死しけり。是れより後。秦に郢と拔かれ。陳に徙る。考烈王よ至り。又た壽春に徙りけり。

春申君の話 并 楚國の末路

春申君。名い黃歇。楚の相たり。時に齊にい孟嘗君あり。魏にい信陵君あり趙にい平原君あり。楚にい春申君ありて。皆客を喜ま。互に其多きを誇りけり。而して春申君の食客三千餘人ゐり。或る時趙の平原君。春申君の許よ。使者を遣いせし日。楚ゐ夸ゝんと欲し。玳瑁の簪を爲くり。珠玉を以て。刀劍の室ゝ飾りけるに。春申君の上客い。皆珠の履を穿きて出で來たり。使者に應對しければ。趙の使者大に慙ぢたりけり。趙の人荀卿。楚に至りしかば。春申君之を用ゐ蘭陵の令と爲ま。又た李園と云へる者。其妹を春申君に献じ。娠めるよ及びて。春申君に勸め。考烈王に納れけり。則ち其子い幽王にして。李園獨り楚の權を專らにせんと欲し。盜をして春申君を殺さしめ。幽王い實は春申君の子にして。李園の計りなりしことを。人ゐ知らしめず。是れより楚の權と恣にしける。幽王卒し。弟哀王立つ。人に弑せられ。其庶兄負芻立ち。後ち秦王政に虜にせられて。楚卒に亡びけり。

燕國 昭王ノ事 并 郭隗樂毅の話

燕は姬姓ゐして。召公奭の封せられし所ゐり。三十餘世にして。文公あり。蘇秦の說と納れて。六國と從約す。文公卒し。子噲立つに及び。其相子之を信し。位を之子ゐ讓り。身い臣とゐり

て子之を事しかば。國大に亂れ。齊其虛に乘して攻め來り。子之を醢よし。隗を殺す。燕人太子平を立て君と爲す。是を昭王と爲す。昭王死を吊し生を問ひ。辭を卑ふし幣を厚くして。四方の賢者を招く。或る時郭隗に問ふに。齊國孤が國の亂に乘して。燕を襲ひ破れり。孤是に報いんと思へども燕い國小にして。力の足らざることを知る。故に賢士を問て。國の政を委ね。後に齊國を伐ち。先王の耻を雪がんと欲す。是れ偏に孤の願なり。先生幸に賢者を薦めよ。孤身を以て是に事へんことを欲すと。隗曰く。古の或る君。千金を消人に持たしめ。千里の馬を求めしめしに。消人死馬の骨を。五百金にて買ひ來れり。君大ゐ怒りけるに。消人の答ふるやう。死馬の骨すら。五百金を以て之を買ふを聞かば。生ける馬は必ず之を貴く買ふべしと思ひ。良馬を持ち來る者多からるべしと云けるゐ。果して一年ならずして。千里の良馬三つを得たりと聞けり。されば今王。賢士を得んと欲せば。先づ隗より始め給へ。隗より賢なる者。千里を遠しとせずして。來るべしと云ひければ。昭王然るべしとて。俄に宮を改め築き。隗ゐ師事しければ。四方の士爭て燕に趨き。樂毅も魏より來りければ。昭王乃ち樂毅を以て亞卿と爲し。國政を任し。又た毅を大將として齊を伐たしむ。毅勝に乘して臨淄に入り。齊王

を走し。六月の間に。齊の七十餘城を下し。惟た莒と即墨のみを剩せり。折しも昭王卒し。惠王立ちしが。惠王太子たりしときより。毅と好からず且つ田單。反間をして毅は新王（惠王を指す）と隙あるを以て。齊を伐つを名として齊に止まり。燕に歸らざるなり。今僅に莒と即墨との二城のみを剩し。之に克ちことと易きに。未だ之に克たざるい即ち其故あり。故に齊人い。惟他將の來らは。即墨い直ちに破れんことを恐るゝと。云いしめけれは。惠王果して毅を疑ひ。騎却をして代て將たらし先。毅を召し還す。毅罪を恐れて。趙に奔りけり。之が爲先ず燕の軍遂に田單に破られて。悉く七十餘城を取り復されけり。

荊軻の話 并燕の末路

秦の惠王より後。武成王。考王を歷て。王喜の世に。太子丹秦に質たりしが。秦王政不禮ありしかい。丹怒りて亡れ歸り。秦に向ひ其怨を報ゐんと欲せり。折しも。秦の將軍樊於期。罪を得亡げて燕に來りしかば。丹之を止め置きたり。又た衛の人荊軻の賢人なることを聞き。辭を卑くし禮を厚ぬして迎へ來たり。丁寧ゐ奉養なしし上。秦に赴き怨を報ひんことを請ふ。軻さらば樊將軍の首と。燕の督亢の地圖。との二品を得て赴かんと云ふに。太子丹流石に。

於期を殺ス忍びず。躊躇の体なりしヨ。軻自ら於期ヨ諷て曰く。願くハ將軍の首を得て。秦王に獻せん。秦王必ず喜んで臣を見ん。其時左手ゐ。秦王の袖を捕へ。右手ヨ其胸を堪ん。然らば將軍の仇を報ゐて。燕の耻を雪ぐを得んと。於期慨然として然からんにハ。何條吾首の惜からんやとて。直ちに自ら刎ねけり。丹之を聞き大に驚き。其塲に奔せ至り。尸ヨ縋がりて泣き伏せしが。死せし者の生くべきにもあらざれば。懇ヨ其首を函ヨ盛り。又た豫め天下に聞えし。匕首を求め置きしを。於期の首。督亢の地圖と共に添えて。軻に渡しけれバ。軻之を受け収めて秦に赴きけり。丹之を送くりて易水に至りしに。軻歌を作くつて曰く。風蕭々として易水寒し。壯士一たび去りて復た還らずと。其悲壯なるを見て。丹を始め人々皆袖を涙に濡しけり。軻秦の都咸陽に至り。使ひの旨を申しける。に秦王政大に喜び軻を召し見けるに。軻督亢の地圖を獻じ。次第に開き行きて。終りに匕首出でけれバ。軻直ちに王の袖を取り。之を捉かんとす秦王大に驚き。取られし袖を絶ち切りて。柱を環りて逃げ廻ハれり。軻之を逐ふ。秦の法に殿上に出る者は尺寸の刃物とても。持つことを禁ぜられければ。並居る人々只だ素手にて軻を搏つのみ。軻愈猛けり狂ゐひしを。近侍の者秦王に劍を拔かん事を心付れバ。

秦王之を拔きて。軻の左の股を斷り。軻今ハ敵ハしとて。秦王を目掛けて。匕首を投げたりしヨ。秦王の運や強かりけん。狙ひ外れて。銅の柱に立ち。軻終に殺されける。秦王政是より大に怒り。兵を出して燕を攻めければ。燕王喜大に恐れ。太子丹の首を斬りて。秦ヨ獻じける。三年の後王喜。秦に虜にせられ。燕ハ遂に滅亡しけり。

秦國　祖先ハ事　并繆公の話

秦の先祖は。本と顓頊の裔にして。大業の子拍翳。舜より姓嬴氏と賜ふ。其後蜚廉と云へる者あり。其子女防の後に非子と云へる者。馬を好みて周の孝王の爲めに。汧渭の間ゐて。馬を主どりしが。馬大に蕃息せし功ヨより。秦と云ふ土地を領して。附庸の國とゐる。其より二世にして。秦仲に至り。始めて大なり。莊公を歴て襄公の世に。犬戎周の幽王を殺せしかハ。襄公周を救ひ。功ありしを以て。岐西の地を賜ハり。諸侯となる。文公。出仕。武公。德公。宣公。成公を歴て。繆公に至る。繆公賢明あり。時ヨ百里傒と云へる者。故の虞の大夫なりしが。繆公の夫人の媵となりて秦ゐ來りしか。秦を亡げて宛に走る。其途に楚人ゐ執らる。繆公其賢者なるを聞き。五羖羊の皮と易へ來たり。直ちヨ大夫となして。國の政を授け。五羖羊の皮と

易へたれはとて。之と五羖大夫と云ふ。百里傒其友蹇叔を進め。上大夫と爲す。是よ因て秦國益〻治まる。繆公。晉の惠公を送て其國よ歸す。既よして惠公秦よ倍さしかい。之を攻めて韓の地に戰ひ。却て晉の軍に圍まれ。繆公の身危ふかりし時。忽ち三百人の勇兵。忽然として顯われ出で。身を死して戰ひ。秦軍の圍を解き。繆公を救ひけり。抑此の兵士等は。是より先きの事なりしが。繆公狩に出しとき。其乘馬を亡ひしよ。野人之を捕へて食ひたり。吏人見出して。君の馬を殺せしとて。法ゐ當んとせしを。繆公曰く。善き馬を食へば。人を傷ぶると聞けり。其毒を消すい酒に若くなしとて。酒と賜いりて。皆其罪と赦されけり。此の者共此度の軍に從ひて。繆公の危さを見しかば。死を爭ふて。其德に報ゐけるなり。繆公又晉の文公を送て。國に歸へし。遂に文公をして。諸侯に覇たらしめけり。後秦孟明をして。鄭を伐たしめけるに。晉の襄公よ崤に破られて歸りけるが。繆公少しも孟明を罪せず。前ゐ替らずして用ゐしかば。孟明益〻國政を修め。再び晉を伐ち。大よ之を破りて。遂に繆公をして。西戎よ覇たらしめけり。

孝公の事并商鞅の話

秦康公。共公。桓公。景公。哀公。惠公。悼公。厲公。共公。躁公。懷公。靈公。簡公。惠公。出子。獻公。を歷て。孝公の代に。河山以東に六の强國と。十餘の小國あり各勢を得て。秦と夷狄として。擯ぞけて諸侯の會盟ゐ與からしめざりければ。孝公口惜しきことに思ひ。何人にても。奇計を出して。秦國を强くする者あらば。重く用ゐんとの。令を出しけるよ。衛の公孫鞅。孝公の嬖人景監よりて。孝公ゐ見え。强國の術を說き。且つ民は與に始めい虞るべからず。與に成れるあとを樂しむべし。と云ひければ。孝公大よ喜び。心を決して。民をして十人五人と組を立たさせ。組中にて一人罪を犯せば。組中の者皆其連座となり。姦を告げざりし者い。腰斬の罪に處せられ。姦を告げし者い。敵の首を斬りしと同じ賞あり。姦者を匿せし者い。敵に降ると同じき罰と受け。軍功ありし者い。其率に從て爵を受け。私鬪を爲す者い。其事の輕重よ因りて。刑せられ。畊織を本業にし。多く粟帛を出せし者い。終身課稅賦役を免ぜられ。畊織を事とせず。及び之を怠つて。貧しき者い。一家舉りて收孥と爲すべしと令せり。然れども民の始めより。令を信ぜざることを恐れ。先づ都の南門に。三丈の木を立て。之を北門に徙す者あらば。十金を與へんと。云ひけるよ。民皆不思議の事に思ひ。誰一人徙す者なし又令し

て之を徙せし者にい。五十金を與へん。と云ひけるに。民之を怪しむと雖ども。五十金を得ることあれバとて。一人之を徙せし者ありしかば。輙ち五十金を與へし。其後に前の令を下しけり。然るに太子法を犯せしかば。鞅い。法の行はれざる事い。上より犯せバなり。されど君の世嗣には。刑を施すべからず。是れ必竟其師傅の罪ありとて。其傅公子虔を刑し。其師公孫賈を黥す是により。民皆恐れ慎しミて。令に從ひけり。斯くて十年を經るよ及び。道行く者い。遺たるを拾いず。山にい盗賊なく。里には家給み人足り。民公戰よ勇よして。私鬪に怯に。鄉邑大に治まりける。此の時初め。令の不便を訴へし者共も來たりて。令の便なることを訴へしに。鞅い是れ法を亂す民なりとて。悉之を邊境に流しけれバ。其後一人も法を是非する者もなかりける。鞅又た民に令して。父子兄弟一家の內に。棲ひことを禁し。井田を廢して。阡陌を開き。賦稅の法を更めしかい。秦益富强となれり。因りて孝公。鞅を商於十五邑に封し。商君と號しける。されど盈れい欠くるは世の習ひ。孝公薨じ。惠文王立ちしかば。公子虔の徒。先きの怨を含ミ。鞅謀叛を企つると。讒しければ。鞅罪を畏れて亡げけるよ何れの客舍にても。商君の法にて。印鑑なき人を舍らせし者い。罪せらるゝ令あれバ。舍らすること叶いず

。と斷いられ。鞅い己と己の法ゐ苦先られ。法の弊害斯く迄に至りしかと歎じつゝ。纔かに魏に之きしよ。魏人受けず之を秦に內る秦人之を車裂ゐして殉へけり。鞅初め法と用ゐることと殘酷にして。坪數の一歩六尺に過ぎたる者い罰あり。灰を道に棄てたる者い刑せらる。鞅嘗て渭水の邊よて。四人を調べ。多く殺せしを以て。渭水盡く赤色と變しけり

甘茂宣陽を拔く事

秦の惠文王の後。武王の代に。甘茂をして。韓の宣陽を伐たしめんとす甘茂王に向ひ。宣陽い大縣あり。數險を越えて。千里の遠きを攻むるのゆゑに事甚だ難し。魯に孔子の弟子曾參と同し名の人ありて。曾て人を殺せしが。世人曾參と間違へて。其の母に其子曾參人を殺せりと告げたり。折しも其母機を織りけるが之を聞きて始先い。一向に心よも留先ざりしゞ。三人ゞで告ぐるよ及ひ杼を投し機より下り。墻を踰ゑて走りけるとかや。臣が賢い魯の曾參に及はずして。王の臣を信ずるおと。又た其母に如かず。且つ臣を疑ふ者は。特よ三人のゞにあらず。されは讒臣ありて。大王の杼を投せられんことを恐るゝなり又た古魏の文侯。樂羊をして中山を伐たしめ。三年よして之を拔き。樂羊歸りて後。其功を論じて。文侯之に謗書を

入れたる。一つの大なる筐を示されければ。樂羊再拜して。此度の功い臣の功にあらず。全く君の力なり。と云へりとかや。今臣い羈旅の臣なり。然るに樗里子。公孫奭。韓の縁故に連れて臣を譏らば。王必ず之を聽かん。然らい此の事い中途にして功あかるべしと云ひけれい。武王。寡人必ず人の譏を入れずとて。息壤にて盟を結びければ。さらばとて。甘茂宣陽を伐ち。五月ゐして拔けざりしに。樗里子。公孫奭の二人。果して武王に讒せしかは。武王茂を召返し。兵を罷ぜんとす。茂王に向ひて。息壤い彼處ゑ在りと答へければ。武王も誠に然りとて初ゑ增して兵を出し。茂を扶けしかば。茂遂に宣陽を拔ひてけり。

范睢れ話

秦の武王の弟。昭襄王稷の世に。相の范睢と云へる人あり。本と魏人にして。須賈に從つて。齊に使せしとき。齊王辨者なりと聞きて。金及び酒肴を賜いりけるを。賈の心にい。是れい睢が魏國の陰事を。齊に告げしゆゑと思ひて。歸りし後魏の相魏齊ゑ告げしかい。魏齊怒りて。笞にて睢を擊ち懲らし。脅ゝ折り齒を拉く。睢因て死せし狀をなしけるゑ。魏齊い睢い既に死せしと思ひ。蓆にて之を卷き。厠の中に置きて。醉客をして交々之に溺せしめけり。睢い

窃かに守者に賂ひ。纔かに逃かれ出で。名を張祿と改め。秦の使者王稽の來りし時ゐ。共に伴いれて秦に入り。客卿と爲り。昭襄王に敎ゆるゑ。遠交近攻の策と以てし。時ゑ穰侯魏冉の政事を執り居しを。王に說きて之を廢し。己代いりて丞相と爲り。應侯と号す。然るゑ魏より須賈使ゑ來れりと聞き。睢敝れたる衣服にて。賈の許に尋ね行きければ。賈驚いて。范叔恙なくありしやとて。酒を出して共ゑ飲ゑ。且つ斯く迄貧しく為り果てしやとて。一枚の綿袍を贈りける。睢い之を謝し。且り我は相府に縁あれば。手引せんとて。賈の車を御し。相府に至り。先づ案内せんとて。門に入りしのゑにて。久しく出で來らざりけれい。賈怪しとて。門を守る者に問ひたりしに。范叔と云へる者いなし。先きに入りし人い。吾が相張君なりと云ふを聞きて。賈始めて欺かれしことを知り大に怖れて。睢の許に赴き。厚く不禮を謝したりしに。睢い之を責めて。爾の幸はひにして。死せざるを得しい。我に綿袍ゑ贈り。尙ほ懇々として故人の好ゑと思ふ優しき意あればなりとて。大ゑ酒宴の席を設け。諸侯の賓客を請ひ。其汝に莝豆なぞの。馬に食いさせる物を取り設け。賈を呼びて馬の如くして之を食はしめ且曰く歸りならば魏王ゑ。速に魏齊が頭を斬り來れ。然らざれい且ゑ大梁（魏の都）を屠らんと脅しけれ

い。魏齊大に恐れて。出で奔りけり。睢志を秦に得て。一飯の德をも必ず償ひ。睚眦の怨を
も必ず報ひけり睢が策により。三晉を破り。周を亡す。秦の將武安君白起。睢と善からざりけ
れい。睢之を廢して。杜郵に自殺せしめけり。睢が勢此の如くなりしかい。人皆之を恐れけり
。然れども。秦王。睢の意に任かせて。良將を失ひし事少からねば。內に良將無く。外に强敵多
しと歎息しけるを聞き。睢も漸く心に畏れを生じける。時に蔡澤來りて。四時の序の春終れ
ば。夏之に代いるの理を以て說きしかば。睢も其理に服して。病と稱へて相位を辭し。澤乃
ち之に代はりけり。尋で昭襄王薨し。孝文王柱莊襄王楚を歷て。政に至り。遂に六國を幷す。
是を秦の始皇帝と爲す。

繪入通俗十八史畧卷之一終

秦始皇帝

秦の始皇帝。名い政。邯鄲に生る。始め昭襄王の世。孝文王柱未だ太子たりし時。其庶子楚を
以て。趙に質と爲せしを。陽翟の大賈呂不韋趙に適きて之を見。此れ奇貨居くべしと云ふて。
秦に適き太子柱の妃華陽夫人の姉に付き。妃に說き。楚を立て嫡嗣となす。不韋因て邯鄲の
美姫を納れ。娠めるに及び。之を楚に獻じ。政と生む。ゆゑに政實い呂氏の子なり。政十三歲
にして王となり。母を太后と爲し。呂不韋を文信侯に封す。太后復た不韋と通ず。王の長ずる
に及びて。事顯いれ。不韋自殺し太后廢せられ別宮に居りしが。茅焦の諫めにより王母子の
交復た初の如し。秦の宗室大臣。諸侯の人來て仕るは。皆其主の爲めに謀る者なれば。悉く之
を逐はんと議したりしが。李斯上書して。其非と論じければ。其議止み。李斯は逐はれずし
て。反りて重く用ゐられ。其計に因つて。秦遂に天下を幷せけり。時に韓非あるもの韓の使者
として來る。韓非刑名の學に精しく。王之を悅びて用ゐんとす。斯疾んで毒藥を以て自殺せ

しめける。」王立てより十七年に內史勝。韓を滅し。王翦趙を滅し。二十三年ゑ。王賁魏を滅し二十四年に。王前楚を滅し。二十五年ゑ。王賁。燕を滅し。二十六年に。王賁。齊を滅し。秦王初めて天下を幷せり。是に於て王自ら謂らく。德三皇を兼ね。功五帝に過ぎたりとて。更めて皇帝と號し。命を制と爲し。令を詔と爲し。己を朕と曰ひ。諡の法は。死せる君父を。臣子の身として議するなりとて。之を廢し。朕を始皇帝と爲し。後ゐ數を以て計り。二世三世より。千萬世に至て。之を無窮に傳へんと定めけり。天下の兵器を。咸陽に聚め。銷て鐘鐻金人十二を爲くり。又た天下の豪富十二萬戸を。咸陽に從して。咸陽を盛んゑし。丞相王綰等。燕齊荊の地ゑ。王を置かんと云ふを。斯の言を用ゐて天下を分ちて三十六郡と爲し。守衛監を置く。二十八年に。天下大に治まりけれゐ。始皇東の方郡縣を行ぐり。鄒嶧山ゑ上り。石を立て功業を頌し。泰山に上り。石と立て封して祠祀し。山を下りしに。風雨暴かに至り。松樹の下に。雨宿せしかゐ。其松を封して五大夫と爲す。其れより梁父ゐ禪し。遂に東して海上に遊ひ。方士徐市等の言を用ゐ。多く童男童女を率ゐて海に入り。蓬萊。方丈。瀛洲三神山の仙人。及び不死の樂を求めしむ。始皇江に浮ひ。湘山ゑ至り。太風に阻められる。博士ゑ問て湘君ゐ堯

の女舜の妻なりと云ふと聞き。大に怒り。其樹を伐り。其山を赭ゑす。始皇東遊して博浪沙に至りしに。韓の人張良五世韓に相たりしを以て。韓滅亡して後。其仇を報ひんと思ひ居りし折あれば。時こそ好けれとて。力士をして鐵椎と操つて。始皇を擊たしめけるゑ。誤て副車に中りしかば。張良跡を隱くす。始皇大に索むれども得ず。三十二年始皇北邊に巡せしに。方士盧生。錄圖書を上り。秦を亡さん者は胡ならんと云ひけれゐ。始皇乃ち蒙恬をして。兵三十萬を率ゐ。北の方匈奴と伐ち。長城を築かしむ。其城臨洮より起り。遼東に達し。延袤萬餘里ゑ亘る。三十四年。丞相李斯の言を用ゐ。天下に令し。醫藥卜筮種樹の書の外。詩書百家の語悉く之を燒き。詩書を偶語する者ゐ。之を棄市し。法令を學ばんとする者ゐ。吏を以て師となさしむ。三十五年侯生盧生等。始皇を譏れうとて。遂ゐ儒生四百六十餘人を咸陽ゑ坑にし殺し。長子扶蘇之を諫めたりとて。怒りて北の方蒙恬の軍を監せしむ。始皇心愈驕り。先王の宮庭小なりとて。渭南の上林苑中ゑ朝宮を作くる。東西百步南北五十丈。上ゐ萬人を坐せしむべく。下ゐ五丈の旗を建つべし。天下之を阿房宮と云ふ。」始皇人と爲り。天性剛戾にして。天下の事大小となく。皆自ら之を決し。晝夜己の決すべき書類と。衡を以て量

るに至れり。三十七年に。始皇出遊し。沙丘の平臺に崩ず。時に丞相李斯。少子胡亥。宦者趙高從ひ喪を秘し。始皇の詔なりとて。胡亥を立て。扶蘇に死を賜ひ。始皇い猶生けるが如くし。咸陽に至り。始めて喪を發す。胡亥位に即く。是を二世皇帝と爲す。

二世皇帝 幷 諸豪傑義兵を起す事

二世皇帝。名い胡亥。即位の始め。耳目の好む所を悉くし。心志の樂む所を窮めんとて。趙高と媒り。法を嚴にし。刑を刻にし。親族及び功臣に死を賜ひ。殺戮を專とせしかい。天下の民多く之を怨む。陽城の人。陳勝字は涉。少して人に傭れ畊し。常日大言を吐けるを以て人之を笑へば。燕雀安ぞ鴻鵠の志を知らんやと嘆息しけり此に至て吳廣と兵を起し陳勝吳廣に。漁陽に戍りとして。徒屬を率ゐ赴きしが。大雨ゐ道を阻められ。期を過ぎしが。徒屬を召ひ。失期の罪斬らるべし。同じ死ぬべ。大名を舉げて死なん。王侯將相。寧ぞ種のあらんやとて。其衆を率ゐ。陳勝い公子扶蘇と號し。吳廣い項燕と呼び。大楚と稱す大梁の張耳陳餘も亦た來り從ふ。勝大に喜び。自立して王と爲り。張楚と號す。諸郡縣。秦の法に苦むを以て爭て長吏を殺して涉に應ず。陳勝。舊友の武臣を以て將軍となし。耳餘兩人を校尉となし。趙の地を徇へしめしに。武臣趙の地に自立して。趙王となる。此の時沛人劉邦沛より起り。沛公と爲り。沛邑の椽主吏蕭何曹參。沛の子弟三千人を收め之に從ふ。又た項梁兵を起す。項梁い楚の將項燕の子にして。嘗て人を殺し。兄の子籍と仇を避けて吳中に之く。籍字い羽。少時書を學ばしめしに。成らず。劍を學ばしめしに。又た成らざりしかば。梁之を叱りしに。籍曰く。書い姓名を記すに足るのみ。劍い一人と相敵するのみ。學ぶに足らず。吾い萬人の敵を學ばんとて 專ら兵法を學ひける。陳勝起るに及び。會稽の守殷通之に應せんと欲し。梁をして大將たらしめしに。梁籍をして通を斬らしめ。自ら其印綬を佩び。吳中の兵八千人を得。籍を裨將となしける。此の時齊にい田儋自立して齊王と爲り。趙王武臣。將韓廣をして。燕の地を略せしめしに。廣自立して。燕王と爲り。楚の將周市。魏の地を定め。魏の公子咎を迎へ立て魏王と爲す。天下亂るゝ麻の如く。朝起夕倒定まれる所なし。故に二年に。吳廣其家人に殺され。陳勝い。其御者莊賈に殺さる。又秦の將章邯魏を擊つ。齊楚之を救ひ。皆敗られて。齊王儋。魏王咎。周市皆戰死し。趙王武臣も其將李良に殺る。因つて張耳。陳餘。趙歇を立てゝ王と爲す。」居鄲の人范增。年七十の老人なりしが。奇計を好む。項梁起ると聞

き。往て之を說き。楚の懷王の孫心を求め。之を立て楚の懷王と爲。以て民望に從ふ。此時外は諸處の豪傑蜂の若く起り。內は趙高。丞相李斯と善からず。李斯を欺きて二世が婦女と聚めて燕樂する時に際し。之を諫めし先しと以て。二世之を怒る。趙高之に乘じ。丞相の長男李由。三川の守として。盜と通し。丞相の權陛下より重しと譖しければ。二世。斯を殺し。其三族を夷らぐ。趙高。李斯を殺し。秦の權を專にせんと欲せしが。群臣の聽かざることを恐れ。先つ鹿を二世に獻じ。之れ馬なりと云ひしに。二世笑ひて。丞相い誤りしにや。鹿を指して馬と い何を云と云ふに。趙高い。然らんにいとて。左右近侍の者に問ふに。或い默して答へざる者もあれば。鹿と云ふ者もあり。馬と爲す者もあり。高後に其鹿と云ひし者い。悉く法を以て罰しければ。其れより群臣皆高を恐れ。其意に隨わざる者なし。高因て益々意を恣にす。」項梁。秦の將章邯に敗られ戰死す。秦又趙を攻む。趙も亦敗れんとす。楚の懷王。宋義が先きに項梁の破れんことを。先知せしと云ふを聞き。義を上將軍とおし。項羽を次將軍となし。以て趙を救はしむ。然るに宋義驕る。羽之を殺し代はりて上將軍となり。秦の兵を鉅鹿の下に破り。王離等を虜にし。章邯。董翳。司馬欣を降らしめ。勢益振ふ。趙高始め。二世に云ふ關東の盜能く爲すとなしと。秦の兵屢敗るゝに及で二世の是を知りて。己を怒らんことを恐れ。婿の閻樂をして。二世を望夷宮に弑せしめ。公子嬰を立て。秦王と爲す。嬰高が謀を知り。趙高及び其一族を悉く殺しける。此の時沛公。楚の懷王より。先づ關中に入る者い。關中に王たらしめんとの約を受け。既に關中に向ひしに。途ゑして鄢食其を得。食其は高陽の人なり。沛公の麾下に謂て曰く。沛公い慢にして人を易る。又大略多し。此眞に吾が從ひ遊を願ふ所なりと。騎士曰く。沛公儒を好まず。客の儒冠を冠むり來る者あれば。沛公輒ち其冠を解き。其中に溲溺す。故に儒生と云ふと以て。云ひ入るべからずと。食其因つて。騎士をして。人い皆食其を狂生なりと謂へど。食其自ら謂ふ。我い狂生にあらずと云ふと言いしむ。沛公。高陽に至り。生を召し入れしひ。沛公時に床に踞し。兩女子をして足を洗いしめ。其まゝにして生を見る。生禮をなさずして。沛公に向ひ。足下必ず無道の秦を誅せんと欲せば。宜しく踞して長者を見るべからず。と沛公是の言を聞き。直ちに洗を輟め。生を上坐に延き是を謝す。生因つて說いて隙留を下し。常に沛公の說客と爲る。張良又た沛公に從つて西す。沛公の軍益振ひ。大に秦の軍を破り。漢に入り霸上に至る。秦王子嬰既に敵すべからざるを知り。素車白馬にして。頸

に組を繫けて。軹道の傍に降參に出でける。秦い始皇より二十六年にして。天下を併せ。二世三世にして亡ぶ。其間帝と稱そるまと。僅ゐ十有五年なり。

西漢

漢太祖高皇帝

沛公い。堯の後にして。姓い劉氏。名は邦。字い季。沛の豐邑中の人なり。母媼大澤の陂の上にて夢に神と遇ふ。時ゑ雷雨して晦冥あり。父太公會ま往きて。交龍を其上ゑ見る。既にして媼劉季を產む。劉季隆準にして龍顏美なる鬚髯あり。左の股に七十二の黒子あり。寬仁にして人を愛し。意豁如たり。大度ありて。家人の生產を事とせず。壯なるに及びて。泗上の亭長と爲る。嘗て秦の始皇帝と縱觀し。嗟乎大丈夫當さに此の如くあるべしと嘆しけり。單父の人呂公。劉季を相して曰く。吾れ人を相そるまと多きが。君が如き尊貴の相を見たるまとあし。願くゞ身を重せられよ。吾が息女不肖なれども。願くゞ箕帚の妾と爲せんとて。卒ゑ之を劉季ゑ與ふ。是を即ち後ちに呂公と呼ばれし夫人なり。秦の始皇嘗て。東南ゑ天子の氣ありとて。自ら東遊して壓當す。劉季恐れて。其陽山澤の間に隱る。呂氏人々と之を求めて常ゑ得。

劉季之を怪しゑ。呂氏云に。季が居る所は。上に雲氣あり。故に常に求むることを得と。劉季大ゑ心に喜ぶ。沛中の子弟。之を聞き附かんと欲する者多し。劉季亭長たりしとさより。竹皮と以て冠と爲せしが。貴さゑ及びても。常ゑ之を冠むりける。是れ即ち劉氏冠と云へる者なり。劉季。徒と驪山に送りしが。徒多く道より亡げたりしかゞ。心に謂ふやう。かくては。志す所に至る頃にい。徒い大方亡げ失せんと。因つて豐西に到り。送り來りし徒ゑ酒を飲ませ。公等皆去れ。吾も亦此より往んと云ふて縱しけるに。徒中の壯士ゑて。從いんと願ふ者十餘人ありけれゞ。之を從へけり。劉季夜澤中を經たりしに。大蛇徑ゑ横いれり。季劒を披き之を斬りて通りしが。從者後れ來る者。其所ゑ至りしゑ。老嫗哭きつゝ。吾が子い白帝の子ありゝ。然るに今亦帝の子之を斬りし。と云ふかと思へい。忽ち形い失せゐけり。劉季之を聞きて獨り心に喜んで自負しけり。陳涉起るとき。劉季兵を沛ゑ起し。旗幟い皆赤し。楚の懷王の命ゑより。秦と破り關に入り。秦王子嬰を降し。覇上に軍し。諸縣の父老豪傑を召し。父老秦の苛法に苦むまと久しとて。人を殺す者い死なん。人を傷つけ及び盜みする者い罪せんとの法三章を約しければ。秦の民皆大に喜ひけり。或人沛公に說き兵をして關門を守らしめしに。

項羽來り。門の閉ぢたるを見。大ゐ怒り之と攻め破り。戲に至り。鴻門ゐ陣す其兵四十萬。百萬と號す。沛公覇上に陣を取る。其軍十萬。三十萬と號す。范增又た羽ゐ說いて曰く。沛公素と財を貪り色を好きしに。今關ゐ入りしより。財物取る所なく。婦女幸する所あし。此を其計る所大あるべし。且つ人をして其氣を望ましむるに。天子の氣あり。急に之を擊つべしと勸めければ。羽も心を此に定め。明旦を期して沛公を擊たんとす。然るに羽の季父項伯。素より張良と善かりしゆゑ。其夜良の許に之き。共に逃がれんことを勸む。良曰く。吾れ沛公と存亡を共にする者なればとて。沛公ゐ其事を告げ。項伯を呼び入れ。沛公自ら項伯と婚姻を約し。其項羽に負けるの意あきみとを告げ。能く其意を項羽ゐ傳へんことを賴のきければ。伯歸りて羽ゐ向かひ。大功ある人を擊つは。不義なりと說きしかば。羽の心少しく解けたり。明旦に沛公百餘騎を從がへ鴻門に來り羽ゐ見みて曰く。臣將軍と力を合せ。秦を攻む。臣素より微力なれば。先づ關に入りて。此に再び將軍に見えんとは。意いざりしが。將軍の光庇により。今日あることと得たり。然るに今者小人の言により。將軍と臣とをして。其間よからざらしめんとす。されど臣に於ては。少しも間てあることなしと謝しければ。羽も大に打ち解

けて。其れより酒宴を始めけり。羽の臣に范增なるものあり。屢羽に眴し。又たゝ佩る所の玉玦を擧げて。疾く沛公を殺せと敎ゆれども。羽少しも應ぜず。增因つて項莊を伴い來り。劍舞をおさしめ沛公を刺んとしたりしゐ。項伯も劍と拔き共に舞ひて。常に身を以て沛公を蔽ひしかば。莊之を擊つまとを得ず。されど其勢甚だ危かりしかば。張良外に出で。樊噲に事の急なる由を告ぐ。樊噲直ちに盾と擁し入り來り。目ゞ瞋して羽を視る。頭髮上り指し。目眥盡く裂け。其狀最恐ろしかりけり。羽之を見。此は壯士なりとて。一斗を入るへき程の巵を與へ。之に酒を充分に注がしめ。又た生たる豕の肩を與へしに。噲之を受けて立ながら酒を飲み。劍を拔き肉を切り之を啗ふ。羽復た飲べきかと問へば。噲曰く。死をだも避けず。何ぞ酒を辭おまんやと。復た大巵を手に取り。酒を飲み盡し巵を置き。沛公先づ秦を破る其功大あり。然るゐ未だ封爵の賞あらずして。將軍反て細人の言を聽き。有功の人を誅せられんとす。此れ亡臣に異らざる所業のみ。將軍の所業に似ず。と憚る所あくと述べける。須臾して沛公則に之くとて其座を立ち。樊噲を從へ間かに覇上に還へり。張良を留め。白璧一双を羽ゐ獻せしめ。玉斗一双を范增に獻ぜしむ。羽良に沛公い何處にありと問ふに。良の答ふるやう。

沛公は。將軍の責め給ふまとありと聞き。既に身と脫して覇上の軍に還りしと云を聞き。范增憤悶に堪へ兼ね。劒を拔て前に置きし玉斗を撞き碎き。咲豎子共と謀るに足らず。將軍の天下を奪ハん者ハ。必ず沛公あらんと嘆息しけり。

漢王諱信陳平を得て。義帝の喪を發し。項羽と大ゴ彭城に戰ふ事

項羽關中に入り。猛威を恣にし。咸陽を屠り。降王子嬰を殺し。秦の宮室を燒き。始皇の冢を掘。寶貨婦女を收め。又た富貴にして故鄉ゴ歸らざるハ。錦を衣て夜行くが如きのみとて。東に歸るの思ひ深かりしを。韓生なるものあり。人ハ楚人は沐猴ゴして冠りすると言しが。果して其言の違ハさりしと識りけるを。羽聞て韓生を烹けれハ。秦民大ゴ望を失ひけり。又た懷王ゴり。約の如く沛公を關中に王たらしめよと云ひ送りしを怒り。懷王は吾が家ゴて立つ所あり。功伐あるにあらず。何とて專ら約を主るゴを得んやとて。陽に之を尊んで義帝と爲し。江南に徙し。郴に都せしめ。天下を分ちて己ゴ從ふ諸將を善地に王とし。他の諸將を惡地に王とし。羽自立して西楚の覇王と爲り。巴蜀も亦關中の地なり迚。沛公を巴蜀漢中に王たらしめ。漢王と爲し。關中を三分して。秦の降將章邯等三人を王とし。以て韓の路を塞ぎ。凡て偏頗の沙汰多かりければ。漢王大に怒り羽を攻んとす。蕭何之を諫めて。暫らく漢中ゴ王となり。其民を養ひ。賢人を致し。巴蜀を收用し。還て三秦を定めは。天下ハ圖るに足らずと云ひけれハ。漢王乃ち國に就き何を以て丞相となしけれハ。韓信。陳平も來りて從ひけり。韓信は淮陰の人あり。家貧しく城下ゴ釣りす。一人の漂母ありて。信が饑ゑたるを哀れと。之ゴ飯を與へしに。信喜びて吾必ず厚く母に報ひんと云ふ。母怒りて大丈夫自ら食そること能ハず。吾ハ只だ王孫を哀んで食を進むるのミ。豈ゴ報を望とてあらんやと云ひける。又淮陰の屠中の少年等或る日信と辱しめて。若長大にして。好んで劒を帶と雖も。思ふに中情ハ臆怯ならん。能く我を刺す勇のあらば。我を刺せ。刺す能ハずば。我が胯の下を潛ぐれと云ひけるに。信其者の面を熟く視て。蒲伏して胯下と出でけれバ。市中の人皆。其臆怯を笑ひけり。されども信少しも意とあさず。項梁淮を渡りしとき之に從ひ。屢羽に謀を進ひれども用ねざるにより。亡げて漢に歸せしが。漢王重くも用ゐず。因て復び亡がれけるを。蕭河追ひて伴ひ歸り。漢王ゴ說き諸將は得易し。信の如きハ國士無双なれバ。天下を爭ハんと欲せハ。信

よあちざれば。共に事を計るに足る者なしと勸め。且り厚く禮と以て。之を大將に拜せんことを請ひけるにより。漢王遂ひに壇場を設け。禮を具へて之と大將よ拜しげれば。諸將皆意外の事に驚きけり。陳平い。易武の人にして。家貧しけれども。讀書を好む。嘗て里中の社に。平。宰と爲り肉を分りあ。均しかりしわ。老人其平均なるを褒めけるに。陳平曰く。平をして天下に宰たることを得せしめば。亦た此の肉の如けんと誇りけり。初め魏王咎に事へ。用ゐられず。去て項羽に事へ。又た用ゐられず。去て魏無知に因り。漢王に見ゆ。都尉參乘典護軍となれり。周勃陳平を誹り。陳平い家わ在しとき。其嫂を盜む。魏と楚に容られず。今護軍となり。諸將の賄賂を得たり。と云ひしを。魏無知漢王に說て臣が云ふ所い其能あり。人の責む る所い行なり。今日い尾生孝己の行あるも。成敗に用あるべからずと曰ひけるよ。漢王遂に之を用ゐけり。漢王遂に信が策を用ゐ。蕭何い留まりて。巴蜀の租を收め。軍の粮食を給し。信い蜀の棧道い先きに燒きて失せしを以て。故道より不意に出で。章邯を殺し。司馬欣。翟王董翳を降し。是より漢王の勢破竹の如く。洛陽に至れり。漢の二年に。項羽義帝を江中よ殺す。漢王。新城の三老董公の言を用ゐ。義帝の喪を發し。羽の義帝を弑せし罪を鳴し。五諸侯の兵五十六萬を率ゐ。楚を伐ち彭城に入り。其寶貨美人を收め。置酒して大よ諸將軍卒を勞らひける。時に項羽。齊を伐りが爲めに齊にありしが。此事を聞き。自ら精兵三万を以て。還りて漢王を擊ち。大に之を睢水の上よ破り。二十餘萬を殺し。漢王を圍むこと三匝。會ま西北の風大に起り。木を折り屋を發き。沙石わ吹き揚げ。晝尙ほ暗かりしを以て。漢王僅に數十騎と共に脫るゝを得たり。審食其。太公呂氏に從ひて。俱に楚の軍に虜にせられけり。然るに漢王滎陽に至りしに。諸敗軍皆集まり會し。蕭何も。關中の老弱を發し。悉く滎陽わ來り會せしめしに由り。漢の軍復た大に振ひけり。

韓信及び漢の諸將諸處戰ひの事。並項羽滅亡の事

漢王一たび彭城に破ると雖ども。滎陽に至り。再び軍威大に振ひ。蕭何い關中を守り。宗廟社稷を立て。事は便宜わ因つて施行し。關中の戶口を計つて。軍兵粮食を轉漕しければ。漢王の軍中。一切も乏絕の事なかりけり。韓信い別に兵を率ゐ。魏王豹の叛けると擊ち。之を虜よし。北のかた趙燕を擧げ。東の方齊を擊ち。南楚の粮道を絕ち。西大王と滎陽に會せんと請ひ。張耳と俱に兵を率ゐ趙と擊ち。背水の軍と設けて之と破り。陳餘を殺し。趙歇を禽にし。李左

車を得て師とし事へ。其策を用ひて。辨士として燕に說しめければ。燕い風を望んで靡けり。漢王い。隨何をして九江王黥布を說き降す。漢王布を見るに。床よ踞し足を洗ひながらにす。布悔ひ怒りて自殺せんとそ。出て舍よ至り見れば。食飲從官。皆漢王の居の如くなりしかば。布大に喜び遂よ心服しけり。又滎陽に圍まるゝ時に當り。陳平の計を用ゐ。黃金四萬斤を與へ。平をして縱まに反間の謀を運らさし免。項羽をして其骨鯁の臣范增を疑いしめ。之をして遂に骸骨を請ひ。憤悶して。疽背に發して死せしめ。滎陽の圍ま益急なりに當り。紀信。韓王と詐り東門より出で降り。楚を欺き羽に燒殺さる。漢王其隙に乘じ。西門より成皐ゑ脫がれ出で。羽に追ひ圍まれ。又た逃がれて。晨に趙壁に入り。韓信の軍を破り。信をして趙兵を收め。齊を擊たしめ。酈食其の言に從ひ。滎陽を收め。敖倉の粟に據り。成皐の險を塞ぎけり。酈食其漢王の爲に。齊王を說きて之を降すに當り。蒯徹韓信ゑ說き。酈生い軾に伏して。三寸の舌を掉ひ。七十餘城を下す。將軍い將と爲るまと數歲なるに。反つて一竪儒の功よ如かず。此れ漢王より將軍に詔して。將軍を止しものかと云ひければ。四年に韓信齊と襲ひ之と破る。齊王大に怒り。酈生を烹て走る。韓信遂に齊を亡そ。楚龍且をして齊を救

しむ。信沙囊を以て濰水を壅ぎ。且の軍半ば渡るを待ち。俄よ水を潰して之を破り。急を擊て且を殺し。遂に漢王に齊に假に王と爲て。齊を鎭んと請ふ。漢王大よ怒り之を罵る。張良隨ゆの二人。漢王の足を蹈そ。耳に附けて諫めしにより。漢王悟り。復た罵るやう。大丈夫諸侯を定りい。即ち眞王と爲らんのそ。何ぞ假を爲さんやとて。遂に信を立て齊王となす。項羽龍且の死せるを聞き。大に懼れ武涉をして信よ連和して。天下を三分にせんことを說かせけるに。信答て漢王我に上將軍を授け。衣を解きて我に衣せ。食を推して我に食はしめ。言い聽かれ。計い用ゐらる。然るよ之に倍くは不祥あり。死すとも此の心い易へじとて。蒯徹も亦天下三分の事を勸むれども。信遂に聽かざりけり。是より先き漢の楚と廣武に軍せしとき。羽高き俎を作くり。太公を其上に置き。漢王よ急に下らそんい。太公を烹んと脅かす。漢王曰く。吾汝と俱に懷王に事へ。兄弟の契りを爲せし者にあらずや。されい吾の翁い即ち亦汝の翁なり。汝の翁を烹んとならい。幸よ我にも一杯の羹を分てとて。少しも動する氣色なし。羽又漢王と親しく戰はんと云へい。王曰く。吾は智ころ戰いすれ。力は鬪いしめずとて。羽の十罪を責め立てけれい。羽大ゑ怒り。弩を發し王を射て胷を傷けゝり。されど漢王は韓信を齊

に王とし。黥布を淮南王とし。益〻勢を張り。羽い之よ反して。助け少く食盡き。韓信又た兵を進めて之を擊ちしかば。羽大に困苦し。天下を中分して。鴻溝以西を漢となし。以東を楚とあし。太公呂后に歸し。己れ東に歸りければ。漢王も亦西に歸らんとするを。張良陳平此の時ころとて兵を返し。五年に羽を追ふて。固陵に至る。韓信彭越期わ違ふて來らず。張良漢王に勸め。二人に楚と梁の地を與へんことを許しけれい。韓信彭越皆來り。黥布も亦た來り會し。羽の垓下にて。兵少く食盡きたるの時に乘じ。信等均く攻たかゝりしを以て。羽敗れて壁に入るを。之を數重よ圍みけり。羽圍中に在りて。漢軍の四面に楚歌の聲頻りなるを聞き。大に驚き。漢い既よ楚の地を得たりと思ひ。心大に悲傷し。因て帷中よ酒筵を設け。虞美人に命じて起ち舞いしめ。羽自ら悲歌慷慨して。力山を拔き氣世を蓋ふ。時利あらず雖逝かずや。雖逝かずや奈何すべき。虞や虞や若を奈何せんと歌ひて。數行の涙よ暮けり。虞美人い項羽の愛して戰場よも尙は伴ふ所の美人。雖い羽が平日乘る所の駿馬あり。羽乃ち夜半に騎八百を從へ。圍を潰し。南に出で淮を渡らんとせしに。迷ふて道を失ひ。大澤に陷いり。時を移せし中に。漢の追兵に及ばれ。東城に至りし頃い。僅よ二十八騎を殘しけり。羽其騎に向ひ。吾兵を起せしより八歳。七十餘戰。未だ敗れしことなかりしに。今卒よ此に困しむ。此れ天の我を亡ぼす者り。戰の罪にいらず。今日い固より死を決せしまとなれゞ。決戰して。必ず圍を潰し將を斬り。諸君をして之を知らしめんとて。群がる漢の軍中に驅け入り。其言の如く働きて。東に赴き烏江を渡らんとせしに。亭長既に船を艤ひて待ち。江東小なりと雖も。亦以て王たるに足る。願くい急に渡をと勸めしよ。羽反つて亭長の己を思ふ心に付け。坐よ哀れを催ふ。籍江東の子弟八千人と。與よ江と渡りて西せしに。今一人の還る者なくして。我獨還るまと。縱ひ江東の父兄憐れみて我を王とするも。何の面目ありて。父老に會ふべき。獨り心に愧ぢざらんやとて。遂わ自ら刎ねて死しにけり。

漢王皇帝の位に即き。諸將賞罰の事并都を關中よ徙す事

漢王羽を亡ぼし。楚の地を定め。獨り魯のみ禮義を守て降らざるを。羽の頭を示して之を降し。還りて直ちに齊王信の軍に馳せ入り。其軍を奪ひ。信を立て楚王と爲し。彭越を梁王と爲し。是に於て漢王遂に皇帝の位よ即きけり。上洛陽の南宮に置酒し。己と項羽の成敗を論ず。高起王陵が陛下い人として。城を攻め地を掠さしめ。因て其地を與へ。天下と利を同くす。項

羽い功ある者い之を害し。賢者い之を疑ひ。戰勝てども。人ゑ功を予へず。地と得れども。人に功を與へず。是成敗の分かるゝ所ありと云ひけるに。上い曰く。然らず夫れ籌を帷幄の中に運し。勝を千里の外に決するい。吾れ子房に如かず。國家と塡め。百姓を撫し。餽餉を給して。粮道を絶ざるい。吾れ蕭何ゑ如かず。百萬の衆を連ね戰へば必ず勝ち。攻れい必ず取るゑとい。吾れ韓信に如かず。此の三人の者は人傑なり。吾れ能く之と用も此れ吾の天下を取る所以ゑして。項羽い一の范增あるも用ゆる能はず。此其敗るゝ所以なりと。群臣皆其智に服しけり。上故の齊の田横を召す。横二客と傳に乘り途に至りて自刑す。上其節と嘉とし。王禮を以て之を葬むる。其從者五百人。横の死せるを聞き亦た皆自殺す。」季布。初め項羽の將と爲り。屢帝と窘む羽滅て上の嚴しく布を求むる聞をき。布髡鉗して奴と爲り。身を魯國の朱家に賣る。其主人心に布なるを知り。朕公ゑ付き。布の所業其主の爲ゑ之せしのみ。何の罪かあらん。若し敵國に奔らば。大なる寇ありと說きしかば。上布を赦して郎中と爲し。又丁公の上が彭城に窘むとき。之を救たればとて來り謁せしを。上曰く。此を以は不忠の臣なり。項王をして天下を失いしめしい。此の者ありとて。之を斬り天下ゑ徇へける。時ゑ齊の人

畫敬。上ゑ說くに。洛陽い形勝の地にあらず。關中い天下の要地。帝王の都なりと云ひ。張良も王に。洛陽は四面敵を受け。武を用ゆるの地にあらず。關中い三面險を阻て。以て守るべく。以て天下を制すべしと答へければ。上即日に都を關中ゑ徙し。虞敬を賞して。奉中君と爲し。姓劉と賜ひけり。上又た張良ゑ留ゑ封ず。張良既に天下の定まりしを見。病と稱し穀を辟け。曰く家世々韓の相と爲ゑ。韓滅て韓の讐を復し。三寸の舌を以て帝者の師となり。萬戶侯に封せらる。此れ布衣の極なり。願くい人間の事を弃て。赤松子に從つて遊ばんのみと。世の事を弃てけり。良少かりし時。下邳の圯上にて。老人に遇ひ。老人履を圯下に墮し。良をして取らしめしを。良一たびい其不禮を怒り。之を歐んと思ひしが。再たび其老たるを憫み。履を取り遣りしに。老人足を差し出し。良をして我ゑ穿たしめながら。孺子敎ゆべし。五日の後。此ゑ吾と會せよと約して去りければ。良期日を違へず往きたりしに。老人先づ在りて。長者と約して後くるゝは何ぞやとて。大に怒り。復た五日の後を約し去る。良再び往きしに。老人又先だち在りて。又怒りて五日の後を約しければ良即ち夜半に往く。老人後れ至りて。良の心の堪へ忍べるを喜び。一編の書を授けて此を讀まば。帝者の師と爲らん。異

日濟北穀城山下に。黃石を見ば。即ち我なりと云て。何處ともなく失せにけり。良不審に思ひつゝ。其書を觀るに。乃ち太公の兵法なれい。晝夜習讀して。遂に上を佐け天下を定めけり。上功臣を封するとき。良に齊にて三萬戸を擇しめしを。良曰く。陛下の初めて遇ひしい留まれいとて。留に封せられに。穀城を經しとき。果して黃石を得しかい。之を奉祠しけり。六年に。楚王韓信反すと告ぐる者あり。上乃ち陳平の計を用ゐ。雲夢に遊ぶと稱し。諸侯を陳に會せしめ。信の來るを待ち。武士をして之を縛せしむ。曰く狡兎死して走狗烹られ。飛鳥盡きて良弓藏まり。敵國破れて謀臣亡ぶと。言ひさりしが果して然りと。終に縛を受け都に上り。後ち赦れて淮陰侯と爲り。上と嘗て諸將の能と論じて曰く。上の我が如きい。幾何の兵に將たるべきか。又た君の如きは如何やとの問ひに。信答るやう。陛下い十萬に將たるに過きず。臣の如きい多々益辨せんのみ。然るに陛下に擒はせられしい。陛下は兵に將たる能はずして。善く將に將たれいなり。且陛下は。所謂る天授にして。人力にあらざるなりと。上符を剖き功臣を封するとき。鄧侯蕭何。食邑獨多かりしかい。功臣皆戰功を論じ。蕭何い汗馬の勞なきに。反つて其賞諸將の上に居るい。何ぞやと云ひけるに。上曰く。之を獵に譬ふれい。

獸を殺す者は狗なり。發縱指示する者い人あり。諸君い走獸を得し功狗あり。蕭何の如きは功人なりと說きけれは。人亦異議を唱ふる者なかりしか。大功の臣のみ賞地を賜いりて。餘の功ありし者い。未だ其賞あらざりしまに。上一日複道より。諸將の沙中に座して語る者あるを見。之を張良に問ふ。良曰く。陛下。此屬と以て天下を取りあから。今其封せらるゝ者い。皆陛下の故人親愛する所の者にして。誅する所は。平生の仇怨あり。故に此の屬賞を受けず。反りて過失あると思いれて。誅せられんことを恐れ。相聚つて叛を謀るのみ。之を鎮めんにい。陛下平生の憎きて。群臣の共に知る所の最も甚しき者を。先づ封じ給へと敎へけれい。上さらいとて雍齒を什方侯に封じ。急に丞相御史を趣して。功を定め封を行いしめけれい。群臣皆雍齒もら封せらる。吾屬患なしと喜けり。上遂に詔して。元功十八人を定め。丞相何に劍履上殿。入朝不趨の禮を賜はり。太公を尊ひて太上皇と爲す。帝秦の苛法に懲りて。簡易を貴ぶの故に。群臣酒に醉ひ。劍を拔き。無法を爲す者多かりけれい。叔孫通禮樂を興さんことを請ひ。上の左右及ひ弟子百餘人と。緜蕞を野外に爲くり。之を習いしむ。七年長樂宮成り。群臣朝賀の時に及ひ。謁者禮を治し。次を以て奉賀せしめけれは。皆振恐肅敬せ

ざるあく。酒を置くに至つて。御史法を執つて。儀の如くならざる者い。引き去しめければ。終わ誼譁して禮を失ふ者なし。上之を見て。吾乃ち今日皇帝たるの貴きあとを知ると云ふて。通を拜して太常と爲す。此の頃匈奴勢を得邊に寇す。帝自ら將として之を擊ち。冒頓單于。代谷ゑ居るを聞き。兵三十万を悉くして。北して之を逐ひ。平城に至り。冒頓精兵四十万騎に。白登に圍まれ。陳平が秘計を用ゐる。厚く閼氏に遺り物して。圍を脫しけり。平。帝に從ひ。六たひ奇計を出し。其度毎に封を增しける。上匈奴の寇を憂ひ。九年に劉敬を遣いし。匈奴と和親し。家人の子を取り。公子と名づけ。單子に妻いしけり。

諸將誅せらるゝ事 幷 漢高崩御之事

十年に代の相國陳豨。謀叛しければ。帝自ら將として之を擊つ。淮陰侯韓信が舍人の弟より韓信。豨と謀を通ずる由を訴へけれい。呂后。蕭何と謀り。豨已ゑ敗れたれば。諸將入つて賀すべしと命し。韓信の來るを待ちて。武士をして之を縛し。卒に之と斬りけり。信斬らるゝに臨み。吾蒯徹の謀と用ゐざりしため。兒女子に詐いられしまとの。悔しけれと云ひつゝ斬られけり。遂ゑ信が三族を夷ぐ。十一年帝豨を破る。還りて韓信が死に臨こしとき。云ひしこと

を聞き。蒯徹を捕て之を烹んとす。徹が曰く。秦其鹿を失ひ。天下共に之を逐ふ。高材逸足の者先づ之を得。當時臣い獨り韓信を知りて。陛下を知らす。天下の人陛下の爲を所を。爲さんと欲する者甚だ多し。只ゞ力の足らざるのみ。然るを此輩悉く烹るべけんや。と述べければ。帝之を赦しけり。次いて。梁王彭越が太僕。其將扈輒。越を勸めて。叛すと告ゝれば。上人をして越と掩ふて之を囚にせしめ。復之を赦せしが。呂后後患を遺すなりとて。越を誅し。其三族を夷らけゝる。帝亦陸賈を遣いし。南海の尉佗を立て。南越王と爲す。賈時々說くに詩書を以てす。帝曰く乃公馬上に天下を得たり。安んろ詩書を事とせん。賈曰く。陛下馬上を以て之を得るも。寧ぞ馬上を以て之を治むべけんや。文武並ひ用ひ。先王に法とるい長久の術ありと。書十二編を著いす。奏する毎ゑ帝善と稱し。號して新語と曰ふ。淮南王黥布韓信彭越の殺さるゝを見て。禍の及ばんことを疑ひ。遂に謀叛を企てしかば。帝自ら之を擊ち。十二年ゑ之を破り。皈路に魯を過ぎり孔子を祠り。沛を過ぎ宗室故人と召し。飲酒し。帝自ら歌曰て曰く。大風起つて雲飛揚そ。威海内ゑ加いつて故鄕に歸る。安くに猛子を得て四方を守し免んと。沛中の子弟をして之を習ひ歌はしめ。沛と湯沐の邑と爲しけり。帝初免寵姬戚氏

あり。趙王如意を生しより。王后疎ぜられ。且太子い仁弱おして如意い其質帝ょ類そるを以て。太子を廢し如意を立んとの意あり。群臣皆之を爭へども聽れず。呂后之を愛しが。張良の計により。商山東園公。綺里季黃夏黃甪里先生の四人を招き。太子に待せしむ。四人皆年八十餘鬚眉皓白あり。帝之を見て羽翼已に成りとて。廢立の意止みにけり。蕭河帝に奏して上林中の棄れたる空地に。民をして田つくらしめんと請ければ。帝之を怒り。何を獄ょ械繫するまと數日にして。後初めて赦しけり。漢の功臣蕭何と雖ども。罪を得る程なりしが。只張良のみ獨り責罰を受けしまとなかりけり。帝布を擊ちしとき。流失に傷き。遂に篤疾と爲りしかば。呂后上に向ひ。陛下百歲の後。蕭相國死せば。誰か代しむべきと問れしに。帝曰く。曹參こそ然るべし。其次い王陵なれども。少しく戇愚おれば。陳平を以て之を助くべし。平い智餘あるも。獨に任じ難し。周勃い重厚にして文少なし大尉とせよ。劉氏を安んぜん者い此人おり。此後い。亦乃ちの知る所ょならずと遺詔ありて。崩ぜられたり。之を長陵ょ葬ふる。帝漢王となること四年。帝と爲ること八年。凡て十二年おり。太子盈尋で立つ。是を孝惠皇帝と爲す。

孝惠皇帝　呂氏の亂の事

孝惠皇帝即位の元年ょ。呂后趙王如意を鴆殺し。戚夫人の手足を斷ち。眼を抉り耳を燻て藥を飲しめ。圊中に置き。人彘と命づけ。帝を召して之を見せしむ。帝大に驚き。遂に病と成り。歲と越えて起さりけり。二年蕭何卒す。時に曹參齊の相たりしが。何の卒去を聞き。吾且に入て相たらんと。舍人を趣がして。其仕度をさせけるに。果して召され相となりける。參相となり。一に何の約束に遵がひ。國好く治りしかば。百姓。蕭何相と爲り較として畫一の如しと歌ひ。曹參之に代て。守つて失ふこと勿し。載其れ清淨。民い以て寧壹なりと歌けり。五年に曹參卒し。六年に王陵右丞相と爲り。陳平左丞相と爲る。此年張良卒し。周勃大尉と爲る。七年に帝崩じ。子なかりしかば。呂太后他人の子を取り。太子とおし。位に即しめ。太后朝ょ臨て制を稱し。其元年に。諸呂を王とせんとの議あり。王陵曰く。高帝と盟給ひしとゆり。劉氏にあらずして。王たらば天下共に擊てと。然ょ呂氏を立るい不可おりと云へど。陳平周勃太后の議を可としければ。陵は相を罷られ。呂氏遂に王と爲る。四年に太后少帝を愛し。之を幽殺し恒山王義を立て帝と爲し名を弘と改たむ。亦他人の子を取り。惠帝の子と名くる者なり。

八年に太后崩ず。此時に鄭氏諸呂亂を作さんと謀る。時に呂祿。北軍に將たり。呂產南軍に將たり。大尉勃兵を主どると能はず。因て酈寄が呂祿と最とも親愛するを以て。寄をして祿に說き印を解て勃に兵を授しめければ勃直に軍營に入り。呂氏の爲めにする者は右袒せよ。劉氏の爲めにする者は左袒せよと令しけるに。軍中皆左袒しけり因て朱虛侯劉章を召して。卒千餘人を與へ。呂產を擊て殺さしめ。又兵を分遣して悉く諸呂を捕へ。少長とあく。皆之を斬りけり。是に於て諸大臣。代王恒を迎へ立つ。代王位に即き。弘等を誅し。天下に大赦す。是を大宗孝文皇帝と爲す。

孝文皇帝

帝名は恒。母は薄氏龍胸に據ると夢て帝を生む帝立に及び尊とんで皇太后と爲す。元年に陳平を左丞相と爲し。周勃を右丞相とす。帝賢明にして。漢の諸帝中最も治績著る。即位の年に。千里の馬を獻ずる者あり。帝曰く。帝王道を行くに。吉凶各其禮儀あり。我獨千里の馬に乘。安くに之んとて。送來る費を與へ。其馬を還され。且詔のりを下し。朕獻を受すと。天下に令せられけり。帝國家の事に明習し。右丞相勃に。天下の決獄幾何。一歲の錢穀出入幾何と問

れしが。勃知らずと謝す。帝又之を左丞相平に問ふ。平曰く。各其主者あり。決獄の事は廷尉に問ひ。錢穀の事は。治粟內史に問へ。宰相は上天子を佐け陰陽を理し。四時を順にし。下萬物の宜きを遂て。外四夷を鎭撫し。內百姓を親附し。御史大夫をして。各其職を得せしむるありと。答へければ。勃大ひに慙。病ひと稱じ職を辭しけり。河南の守治平天下第一と爲す。召て廷尉と爲す。吳公。洛陽の人賈誼を薦む。誼時に年二十。一歲中に超遷して大中太夫と爲る。後帝。誼を以て公卿に位せしめんとす。大臣多く之を譏しかば。長沙の大傅と爲。後梁王の大傅に徙る。誼上疏して。方今の事勢。爲に痛哭すべき者一。爲に流涕すべき者二。爲に長大息すべき者六とて。當時の弊害を條列せり。梁王馬より落ち。死するに及び。誼己れの教足ざりしとて。之を傷み遂に死しけり」是年陳平卒す」二年は其年の田租の半を賜ふ。三年は張釋廷尉となる。帝中渭橋を行く。時に一人橋下を走り。乘輿の馬を驚ろかせしは。捕へて廷尉に屬す。釋之奏すらく。之罰金に當と。帝怒る。釋之曰く。法是の如し然るを更は重せば。法民に信あらず。廷尉は天下の平なり。此平にして一度傾かば。終に民は手足を措に所なかるべしとて。法に從かつて罪しける。後高廟の王環を盜みし者あり。帝之を族せんとせられしを

釋之曰く。宗廟の器を盜みて之を族せば。縱令い愚民。長陵一杯の土を取ば。如何なる法を以て罪すべきやとて。之を棄市に當けり」六年に淮南厲王長謀叛す。帝之を廢し蜀に徙す。途ゑして死す。民因て之が歌を作つて。一尺の布は尚縫ふべし。一斗の粟い尚舂くべし。兄弟二人相容ずと。歌ひければ。帝之を痛み。後其子四人を侯に封じける。是年匈奴冒頓死す。二十年に。民に其年の田租の半を賜。十三年に大倉令淳于意罪あり。刑に當られんとす。少女緹縈上書して。死者い復生くべからず。刑者い復屬くべからず。妾を官婢と爲し。父の刑を贖いんと。哀しみければ。帝其意を憐れみ。遂に詔のりして。天下の肉刑を除ける。六年匈奴上郡雲中に寇す。將軍周亞夫細柳に屯し。劉禮霸上に次し。徐厲棗門に次す。上自ら軍を勞らひ。霸上棗門の軍ゑ驅入りしか。細柳の軍に往けば。都尉曰く。軍中にい將軍の令を聞て。天子の詔のりを聞ずとて。軍令に遵かひ。帝をして轡を按じ。徐行せしめける。帝之を見て。是眞に將軍なりと感稱ありけり。」七年ゑ帝崩ず。帝在位二十二年。宮室花宥車魏服御。增益する所なく。露臺を爲らんとせしに。百金を費すと聞き。是中人十家の產とて之を止む。帝常に弋綈を衣。幸する所の愼夫人と雖も衣地ゑ曳ず。天下に示すゑ質朴を以てす。吳王朝せざれば。几杖

を賜ひ張武賄賂を受くをば。更に賞賜を加へて。其心を愧かしめ。專ら德を以て民を化せられしかば。當時の公卿大夫。風流篤厚にして。人の過ちを言ことを耻づ。是を以て海內安寧家給し人足る。霸陵に葬る。太子位ゑ即く。是を孝景皇帝と爲す。

孝景皇帝　吳王の亂

帝名い啓。即位の元年に。丞相申屠嘉の言を用ゐ。高皇帝を太祖の廟と爲し。孝文皇帝を。太宗の廟と爲す。帝太子たりし時より。鼂錯家令と爲り幸あり。太子の家之を智囊と號しけり。帝即位の後錯內史と爲り。寵九卿を傾け。多く法令を更定しけり。初め孝文の時。吳王濞の太子入り見え。皇太子と博を爭そひ。皇太子博局にて之を擊ち殺ける。因て濞疾と稱し朝せず。錯其封を削り罪を正んと。云ふ文帝聽かず。帝即位に及び。錯帝に向ひ吳王謀叛の企頻なり。今其封を削るも反せん。削らざるも反せん。削らば反丞かにして禍小ならん。削らざれば反遲くして大ならんと。又楚趙膠西各罪ありとて。各其封を削る。吳王大いに怒り。膠西。膠東。菑川。濟南。楚趙と共に反す齊王い初め其謀ゑに加はりしが。後悔て與らざりけり。文帝崩御の際帝を戒め。即し事あらば。周亞夫を將とすべしとありければ。是の七國反する

に及ひ。亞夆を大尉と爲し。吳楚を擊ち之を平ぐ。初め袁盎平生より鼂錯と。交り善ちざりしかば。帝よ錯を斬り諸侯の削地を復さば。及に衂ずして。亂罷むべしと云ひけれバ。錯遂に東市に斬られける。然れども亂卒よ罷ざりけり。亞夆將と爲りし後。人ゐ誣られ。獄に下り血を歐て死そ。漢興つてより。五六十載の間。國家無事にして。人給し家足り。府庫貲財を餘し。京市の錢鉅萬を累ね。貫朽て校すべかふず。大倉の粟陳々相因り。充溢して外よ露積し。紅腐食ふに勝す。富民益驕侈にして。兼并の徒鄉曲に武斷し。宗室有土。公卿以下。奢侈度あかりしが。物盛にして衰るは。固より其常なれば。後武帝の世に至り。衰弱を來たしける。帝在位十七年にして崩ず。太子立り。是と世宗孝武皇帝と爲そ。

孝武皇帝

帝名ハ徹。即位の元年に。始めて改元して建元と曰ふ。年よ號あること此ゐ始まる。常賢良方正直言極諫の士と舉け。親しく之を策問し。廣川の董仲舒が。事ハ勉强に在るのみ。又人君は心正しくするを第一とす。又大學ハ敎化の本源ありと論せしを善し。江都の相と爲す。帝禮を厚し。魯の申公を迎へ。治亂の事を問れけるよ。公時に年八十餘。對へて曰く。治を爲すハ力行如何に在るのことと。三年帝始めて微行を爲し。上林苑を起。五年に五經博士を置さ。元光元年に。初めて郡國に令し。孝廉各一人を舉ぐ。二年に方士李少君來り。說くよ仙術を以てし。竈を祠り封禪すれば死せずと云ふ。帝之を信じ。始めて竈を祠り。方士を遣り海に入つて。蓬萊の安期生か屬を求めしむ。是より海上の燕齊の迂怪の士。多く更々來りて神事を云ふ。帝大行王恢が議を用ゐ。匈奴を欺ひきしより。遂に單于と和親を絕つ。司馬相如を中郎將となし。蕃川の公孫弘の對策を第一とし。之と擢で用ゆ。哥人轅固年九十餘。時ゐ賢良を以て徵れて在り。弘目を仄たて固に事ふるを見て。固云公孫子正學を務めよ。曲學して世に阿ること勿れと。六年に商車を算す。五年に公孫弘亟相と爲り。平侯に封せらる。帝方よ功業を興す。弘是よ於て東閣を開き。賢人を延く。元鼎二年。方士文成將軍李少公。詐を以て誅せふる。五年また方士五利將軍欒大詐を以て誅せらる。帝氏よ如さ。中嶽に登り。遂に海上ゐ東巡し。神仙を求め泰山に封し。蕭に禪し。五年に南江漢を巡りて。泰山に至り封を增す。大初元年帝泰山に如さ。十一月甲子。朔旦冬至に。太初曆を作り。正月と以て歲首と爲す。天漢元年。中郎將蘇武を匈奴に遣はす。單于之を降さんと欲し。武を大窖中に幽し。飲食を與へ

す。武雪と氈毛とを嚙みて食ひ。因て數日死せず。匈奴神と爲し。武を北海の上無人の地に徙し羝を牧しめ。羝乳せバ乃ち歸ることを得んと云ひける。帝好んで酷吏を尊用し。東方の盜賊滋く起りし時。使者を遣はし。戎衣と衣。斧を持し。督捕して二千石以下を斬ることを得せしむ。太始四年東巡して明堂を祀り。封禪を修す。征和二年に巫蠱の事起る。衛皇后及び太子據自殺す。後帝高廟の寢郎田千秋の言を聞き。太子の罪なくして死せしを悟り。歸來望思臺を太子自經せし湖の邊に作る。天下の人之を聞て皆悲みけり。四年に方士の神人を侯せし者を罷め。又田千秋を以て相と爲し。富民侯に封じ。輪臺屯田の議と罷め。詔を下して深く既往の悔を陳べ。後元二年に。帝五柞宮に幸し。病篤し。霍光を以て。大司馬大將軍と爲し。遺詔して太子を輔けしむ。帝在位五十四年。改元する者十一。建元。元光。元朔。元狩。元鼎。元封。太初。天漢。太始。征和。後元等なり。帝雄材大略にして。文景豊富の後を承け。武事を究極し。高の憂を平城に遺せしを思ひ。九世の讎を復せんとて。屢匈奴を討ち。衛青霍去病等を大將軍とし。之を攻む。其間李廣利。李陵等敗れて匈奴に降りしが。遂に大に勝ち。匈奴をして遠く遁れしめ。其地に郡縣を立て。受降城を置く。又西城及び西南夷に通じ。東朝鮮を

擊ち。南粵を伐ち。軍旅歲ごとに起り。內には土木を事とし承露銅盤を作る。高さ二十丈大きさ七圍。上に仙人掌あり。諸の宮殿を建つ。皆侈靡を極む。又た數巡幸して。祠祝を崇び。封禪を修めしかば。國用給せず。因て武功の爵級を賣り。鹿皮幣白金を造り。桑弘羊孔僅の徒。均輸平均法を作り。利を興して費を佐け。鹽官を置き舟車を算し。緡錢を造くる。故に天下騷然として。末年には盜賊起り。輸臺の一詔なかりせば。漢幾ど秦たることを免かれず。帝用ふる所の丞相初め田蚡のみ唯稍專にせしが。後は皆位に充るのみ。公孫弘の後は。國家多事にして丞相連りに誅せらる。公孫賀。相となりし時。涕泣して拜することを肯せざりしが。遂に相と爲り誅せらる。酷吏張湯。趙禹。杜周。義縱。王溫舒の徒。刑法を峻用す。然ども湯等も罪あれば容されず。其間に卜式兒寬の屬。亦長者を以て用ひられ。汲黯は獨り嚴を以て憚かる。黯數切諫して。內に留まることを得ず。東海の守と爲り。清淨を好み。閤內に臥して出ざれども。郡中大いに治まる。入て九卿と爲る。上方に文學の士を招き。黯に云々せんと欲すと語られしに。黯陛下內多慾にして。外に仁義を施す。如何ぞ唐虞の治に傚はんと欲するやと答へしかば。帝は甚だしひかな黯の戇なるやと怒りて朝を罷む。然れども黯は古への社稷の臣に

近しと稱せらる。淮南王安反せし時獨黯を恐る。大將軍衛青等貴しと雖ども。上或は廁に踞して之を見ども。黯は重せられて冠せざれバ見ず。黯淮陽に守となり。十歲にして率す。帝又天下材智の士俊異の者を招き之を寵用し。莊助。朱買臣。吾兵壽王。司馬相如。東方朔。枚皐。終軍等左右に在り。相如特に詞賦を以て幸を得。朔と皐い持論を根とせず。詼諧を好み。帝亦俳優を以て之を畜ふ。伏日肉を賜ふと晏かりしに。朔先づ肉を斫て持歸る。上之を召して。自ら責めしむ。朔曰く。賜を受けて詔を待ず。何ぞ無禮なるや。劒を拔て肉を斫る。何ぞ壯なるや。之を斫りて多からざる。何ぞ廉なるや。歸て細君に遺る。又何ぞ仁なるやと。然れども朔も亦時に直諫して。補益する所あり。帝始め李少君の言を用ゐ。神仙の事を信じ。末年に悟りて。天下豈に仙人あらんや。盡く妖妄のこと。食を節し藥を服すれい。差や病少なかるべきのことと。惠帝挾書の禁を除き。文帝既に遊學の路を廣むと雖とも。儒學未た盡く盛あらず。帝の世に至り。董仲舒。公孫弘皆春秋を以て進こと。兒寬經術を以て吏事を飾り。後又孔安國等ありて。六經と表章するあとい。實に帝より始まる。帝數祥瑞と得て。皆樂章に爲くり。之と郊廟に薦ゆ。文章も亦帝の世に至つて。始めて盛んあり。人以て三代の風ありと爲す。帝壽七十

にして崩ず。茂陵に葬る。太子立り。是を孝照皇帝と爲す

孝照皇帝

帝。名い弗陵。母い鉤弋夫人。趙氏なり。娠んでより十四月にして帝を生む。武帝因て其門を堯母門と命つく。帝年七歲にして体壯大にして多智なり。武帝之を立てんと欲し。群臣の中。惟霍光の思厚にして。大事に任すべきを察し。黃門をして。周公の成王を負ひて。諸侯を朝せしむる圖を畫しめ。光に賜いり。鉤弋夫人を譴責して。古國家の亂るゝ所以い。主少に母壯にして。驕淫自恣なるに由るありとて。死を賜ひけり。帝即位の初め。燕王旦反を謀る。帝赦して治せず。黨與のみ誅に伏す。始元六年。蘇武匈奴より還る。武初め北海に徙り。野鼠を掘り。草實を取て。之を食ひ。臥起常に漢節を持す。李陵武に語つて曰く。人生い朝露の如し。何ぞ自から苦しむこと此の如きや。陵と衛律と匈奴に降りしに。皆富貴なりと。律も亦屢武に降を勸めしかども。武終に降らず。漢の使者匈奴に至り。武の死せざるを知り。天子上林中に雁を得。其足に帛書有て。武大澤の中に在りと。記せりと詐い言しにより。匈奴大いに驚きて。乃いち武を還らし免けり。武匈奴にあること十九年。始め强壯にして赴き。還るに及びて

頭髮盡く白し。帝之を拜して典屬國とす。左將軍上官桀の子安。霍光の婿と爲り女を生む。之を立て皇后と爲す。故に桀及び安。后の祖父たる勢を負むと雖ども。光の外戚と以て朝事を專制するゝ若ず。因て桀。光と權を爭ふ。時に鄂岡蓋長公主。事を以て光を怨望す。王旦も帝の兄にして立つと得ざるを常に怨望し。御史大夫桑弘羊。亦子弟の爲に官を求めて得ざりしを以て。光を怨望す。因て皆旦と謀を通じ。人をして上書して光叛を謀ると告ぐ。帝時ゝ年十四。一々其書中云ふ所の妄と辨し。上書せし者逃たるを捕ふるゝと甚だ急なり。後桀が黨。光を讚する者ありしゝ。帝大いゝ怒り。大將軍い忠臣ゝして。先帝の屬する所。以て朕が身を輔くる者。敢て毀る者あらば。坐せんと。是より敢て復光の事を云ふ者なし。桀等再ひ謀て。長公主をして。置酒して。光と請しめ。之を格殺し。因て帝を廢し。旦を立んとす。安又旦を誘ひ之を誅し。帝を發し桀を立んと謀りしゝ。謀りと洩れて。桀。安。弘羊等宗族共ゝ盡く誅せられ。蓋主と旦と皆自殺す。元平元年に。帝年二十一にして崩す。在位十四年。改元する者始元。々鳳。元年の三なり。霍光政を爲し。民と休息し。天下無事あり。光武帝の孫ゝして哀王髆の子冒邑王賀を迎へ位に即し。光。皇后と尊とび。皇太后と爲す。然るゝ賀淫戲度

なかりしを以て。光奏して之を廢し。武帝の曾孫を迎へ立つ。是を中宗孝宣皇帝と爲す。

孝宣皇帝麒麟閣の事

帝初めの名い病巳。後洵と改む。武帝の曾孫あり。戾太子據。史良の娣を納れ。史皇孫進を生む。進病己を生む。數月ゝして巫蠱の事に遭ひ。皆獄に繫がる。然るに氣を望む者。長安の獄中に天子の氣ありと言ふを以て。武帝使を遣いし。盡く獄中の人を殺しひ。丙吉時に獄を治す。因て曰ふ。他人の無辜も尙不可なり。況んや皇曾孫をやとて。使者を拒ぎ納れず。使者還つて其由を報せしゝ。武帝天なりとて之を容るしけり。帝長ずるゝ及び。高材ゝして學を好み。亦遊俠と喜み。具に閭里の姦邪。吏治の得失を知る。昭帝の元鳳中に。泰山ゝ大石あり。自然に起立す。卜林ゝ偃樹あり。復自然に起ち。盃其葉を食ひ。公孫病巳立つと云ふ文字を見いしけり。賀廢せらるゝに及び。光等病己躬節儉慈仁にして。人を愛すとて。迎へて之を立つ。帝時ゝ年十八。即位より六年にして。鶴光卒し。帝始て政と親す。地節三年路溫舒の言を用ゐ。廷尉の平と置く。其より獄刑公平と稱しけり。膠東の相王成。治ゝ異蹟あるを以て爵關內侯を賜ふ。魏相を丞相と爲し。丙吉を御史大夫と爲す。四年に鶴氏謀反し。誅に伏し。其族を夷

く。初め霍氏奢縱なり。茂陵の徐福上疎して。時を以て抑制して滅亡に至らしむることなからしめよと。三たび書を上まつれども聽かれず。事終ゐ此に至る。帝の初め立て。高廟に謁せし時。霍光 驂乘す。帝之を嚴憚して。芒刺の背ゐ在るが如し。後張安世。光ゐ代つて驂乘せしに。帝從容肆体甚だ安逸あり。故ゐ世間傳へて霍氏の禍ひい。驂乘ゐ萌せりと云ふ。北海の大守朱邑。治行第一を以て。入つて大司農と爲り。北海の大守龔遂入て水衡都尉と爲る。是より先き。勃海歳饑ゐ。盜起る。帝遂を撰び太守と爲す。遂之を治むる急にそべからず。臣をして便宜事に從いし免よと。勃海に至り合と出し。田器を持者を良民と爲し。兵を持つ者を盜と爲すと。遂自から單車にして府ゐ至りしに。盜即時に解散す。遂民の刀劍を持者あれば。劍を賣牛を買ひ。刀を賣犢を買しめ。勞來巡行せしを以て。是より郡中皆蓄積ありて。獄訟止息せり。元康元年に。京兆の尹趙廣漢を殺す。初め廣漢潁川の太守と爲りしゐ。潁川の俗豪傑相朋黨して。治むるゐ難し。廣漢鈚項筩を爲くり。吏民の投書を受けて。相告訐せしめしにより。姦黨散落せり。京兆の尹となりしより。善く閭里銖兩の姦を知る神の如く京兆政清し。故に長老漢起りてより。京兆尹中の第一とす。然るに廣漢私怨を以て人を論殺せしと上書する者

ありしにより。廷尉に下さる。吏民之を聞き。闕を守號泣する者數萬人あり。然れども廣漢竟に要斬せられける。廣漢廉明ゐして。豪强を威制し少民職を得たり。故に百姓追思して止まざりけり。尹翁歸を以て。右扶風と爲す。翁歸私心なく。常に其治三轉の最と爲す。三年に帝匈奴の衰弱なるに乘じ。兵を出して之を擊んと欲せしゐ。魏相が兵に名あく。內治まらざることを說きしより。帝其儀を止めけり。三年に太子太傅疏廣。兄の子太子少傅疏受と上疏して骸骨を乞ひ。許されて歸る。公卿故人之を送る者の車數百輛。道路觀る者。皆賢なるかな二丈夫と賞しけり。廣受歸りし後賓客を招き與に娛樂して。賢ゐして財多けれい其志さしと損じ。愚にして財多ければ其過まちを益し。且つ富い衆の怨む所なり。吾其過まちを益して。怨みを生ずるを欲せずとて。子孫の爲ゐ產業を立ざりけり。神爵元年に。先零諸羌と畔く。帝趙充國ゐ。將たるべき者を問ふ。充國時に年七十餘。躬ら請ふて金城に至り。屯田の便宜十二事を上まつる。其奏ある每に。初めい公卿の其議を是とする者什に三。中い什ゐ五。最後には什に八人あり。且魏相必らず其計りことの用ゆべきを云けれい。帝其計ことに從かひけり。二年に司隸校尉蓋寬饒。封事を奏す。帝以て怨謗となせしにより寬饒自到しけり。三年ゐ魏

相薨ず。故事に上書する者い。皆二封と作くり。其一に副と署し。尚書を領する者。先づ副封を開き。旨ふ所善らざれば。屏ぞけて奏せず。霍光薨せし後相奏して副封を去り。壅蔽を防げり。相好んで漢の故事を觀。漢興りてより。便宜の事及び賢臣賈誼。晁錯董仲舒等か言ひし所の者を。請ふて施行し。椽吏を勅して郡國の事を案せしめ。休告せし者。家より還り來されい輙ち四方の異聞を白さしむ。御史太夫成吉と同心政りごとを輔けゝり。是に至つて。丙吉代りて丞相となり。吉い寛大を尚とび。禮讓を好む。嘗て途上爭鬪して死者あるに會ふも之を問ず。牛の喘ぐに遭ひ。其來る路程を問ふ。人其故を問に。民の鬪い京兆の禁ずべき所。宰相い細事を親からせそ。問ふべき所にあらず。今春なるを牛の喘ぐは晝さが故あり。此れ時氣節を失なふなり。三公い陰陽を調す職として當に憂べしと。人以て大体を知りと爲す。五鳳元年に。左馮翊韓延壽を殺す。延壽吏と爲り。古しへの教化を好む。馮翊と爲り。昆弟相訟たふる者。其德に服し。各悔て復爭ろいず。郡中風化行あれて。復詞訟なる者なし。民吏至誠を盡す。殺さるゝに至つて。百姓流涕せざるなし。三年を丙吉薨ず。黃霸上相と爲る。霸嘗て潁川の守と爲る。吏民神明を稱す。霸教化を力先。誅罰を後にし。姦吏其盧に乘ずるを察し。安に長史を易ず。外寛ゐして內明なるを以て。吏民の心を得。治天下第一と爲す。然れども霸の材。民を治むるを長じ。相となるゐ及びて。功名郡を治むる時より損ず。四年に。大司農耿壽昌の言を用ゐ。常平倉の法を行ふん。上書して前の光祿勳揚惲。妖妄の言を爲し。免して庶人と爲すに。尚驕奢ゐして悔ずと。譏する者あり。遂に廷尉に下され腰斬せらる」。甘露元年に。公卿。京兆尹張敞は。惲の黨なり。位に處くべからずと云ふ。帝其材を惜み。之を問ず。敞後使椽絮舜を殺せしことにより。亡命すること歲餘ありしか。京師盜多きにより帝復た之を召し用ゆ。黃霸卒す。于定國丞相と爲る。定國の父于公。初獄吏たりしとき。東海に孝婦あり。寡居して嫁せず。以て其姑を養ふ。姑老年をして婦の嫁を妨ぐるを以て自到して死す。姑の女婦が迫まりて死せしむると思ひ。官に告ぐ。婦辨ずると能いず。自誣伏そ。于公其誣を知り爭へども得る能はず。孝婦死し。東海枯旱すると三年。後の太守來りしとき。公其故を言ふ。太守のち孝婦の冢を祭り。遂を雨ふる。于公獄を治め陰德あり。吾が後世必ず興る者あらんとて。門閭を高大をし。駟馬車を容るべからしむ。定國。地節元年を以て廷尉と爲る。朝廷之を稱して曰く。張釋之廷尉と爲り。天下寃民ゐし。于定國廷尉と爲りて。民自ら寃せずと。甘

露元年呼韓邪單于。藩臣と稱し來朝せ。帝戎狄賓服するを以て。股肱の美を思ひ。其人を麒麟閣に圖畫す。唯た霍光のみ名いいずして。大司馬。大將軍。博陵侯。姓は霍氏といふ。其次は張安世。韓增。趙充國。魏和。丙吉。杜延年。劉德。梁丘賀。蕭望之。蘇武。凡て十二人皆功德有。名を當世に知らる。帝在位二十五年。改元する者。本始。地節。元康。神爵。五鳳。甘露。黃龍等七つ。帝崩す杜陵に葬むる。帝閭閻より起り。民事の艱難を知る。勵精治を爲し。樞機周密にして。品式備具す。刺史守相を拜する時は。輒ち親しく見聞し。政平に訟理ありて。我と共に民に寃なからしむる者は。唯た良二千石かと。又太守は吏民の本。數變易すれば民安からず。とて二千石の治理ある者は。輒ち璽書を賜ひ。秩を增し金を賜ひ。之を勉勵し。公卿欽くる時は。次を以つて之を用ゆ。漢の世。良吏是の時を盛なりと爲す。帝信賞必罰。吏其職に稱ひ。民其業に安んじ。匈奴の衰亂に遭ひ。亡を推し存を固し。威と北威に信べ。單于義を慕ひ。功祖宗に光り。業後世に垂る中興の主にして德を高宗周宜に侔すと謂ふべし。太子位に即く。之を孝元皇帝と爲す。

孝元皇帝

帝名は奭。初め太子たりし時。柔仁にして學を好ひ。宣帝多く文法吏を用ゐ。刑名を以て下を繩すを見。儒生を用ゐべきを云ふ。宣帝怒りて。漢家の制度。本と覇王の道を雜ゆ。奈何んぞ純ら德教に任じ周政を用ゐんや。且り俗儒時宜に達せず。好んで古を是とし今を非とし。徒らに人を眩す。何ぞ委任するに足らん。蓋し我が家を亂さん者は。太子ならんと歎せられける。然れども宣帝少き時太子の母家許氏に依り。許后王氏の妻を以て死せし故に。太子を廢するに忍びず。帝遂に位に即きけり。初元元年に王氏を皇后に立つ。二年に蕭望之。周堪。及び宗正劉更生を獄に下し。皆免して庶人と爲す。初め望之等中書令弘恭。僕射石顯等の放縱擅肆なるを惡み。之を除かんこと及び中書の官官古の制にあらず。之を罷ひべしと建白せ。顯等之を以て望之を忌む。之れ大臣を讒詐し。親戚を毀離し。上を誣ゆるなり。不忠不道宜しく廷尉に致さんと奏す。時に帝即位の始めにして。廷尉に致すとい。獄に送るのみなるとを知らされば。其奏を可とし。後ち獄に繫さしと雖も。大に驚くと雖も。遂に高の言を用ゐ。之を罷免せり。後復帝堪更生を中郎と爲し。且つ望之を相と爲さんと欲せしに。恭顯許史に欺かれ。望之として。鳥を飲み自殺せしめけり。弘恭死し。石顯中書令と爲る。建昭二年よ。魏

郡の大守京房を殺す。房易を焦延壽に學ぶ。延壽嘗て曰く。我道を得て身を亡ぼす者は京生あらんと。郎と爲るゝ及び。屢災異を言ふて顯あり。宴見の時事を言ふ。其意石顯を指せしより。遂に棄市せらる。顯威權日に盛んゝ。中書僕射牢梁。少府五鹿充宗と結ひて黨友と爲。諸〻の附倚する者は寵位を得。故に民之を歌ふて曰く。牢か石か五鹿の客か。印何んゞ累々たり。綬若々たるやと。竟寧元年ゝ。呼韓邪單于。來朝し。願くゝ漢に婿たらんと。因つて後宮の王嬙字昭君を以つて之に賜ふ。帝在位十六年にして崩す。改元する者初元。永光。建昭。竟寧の四あり。帝儒術を喜ゝ韋玄成匡衡を相と爲すと雖も相業なし。帝徒に優游小斷ゝして。是より漢業衰ふ。太子位に即く。是を孝成皇帝と爲す。

孝成皇帝

帝。名ゝ驁。母は王氏。帝を甲觀に生ひ。帝少くして經書を好ひ。後酒樂に幸して燕樂す。元帝の時に。幾んと太子を廢られんとす。史丹青蒲を伏し。涕泣し諫むるゝ頼り。廢せられざると得たり。是ゝ至つて位ゝ即く。王氏を尊んで皇太后と爲し。元舅王鳳を以つて太司馬大將軍と爲し。尚書の事を領せしむ。建始元年石顯罪あり免飯し。道にて死す。舅王崇を封じて安成侯とあす。譚。商。立。根。逢時（皆王太后の兄弟あり）に爵關內侯を賜はる。此日黃霧四方に塞がる。河平二年。悉く諸舅を封して列侯と爲す。陽朔三年王鳳卒す。王音大司馬と爲り。王譚城門の兵を領す。鴻嘉四年王譚卒す。王商城門の兵を領す。永始元年太后の弟の子莽を封じて。新都侯と爲す。是の年趙氏名ゝ飛燕を立て皇后と爲し。飛燕の女弟合德を婕妤と爲す。二年王音卒す。王商大司馬と爲る。故の南昌の尉梅福。上書して外戚の威權盛んなるとを云へども聽かれず。四年。王卒し王根大司馬と爲る。安昌侯張禹。帝の師傅たるゝ以りて。毎に大政に與かる。時に上書して。屢災異あるゝ。王氏政を專に弄するの。致す所と云ふ者多し。帝禹の第に至り。左右を辟け。其書を禹に示す。禹自ら年老ひ。子孫弱きゆゑ。王氏に怨まれんとを恐れ。災異は諸侯相殺し。夷狄中國を侵すの致す所あらん。夫れ災變の意ゝ見がたし。故に聖人も命を言ふと罕なり。淺見鄙儒の言ふ所あらんや。新學小生の言宜しく信用すると無るべし。と答へければ。譚ゝ雅より信愛する禹の言あるゝ以て。是より遂に王氏を疑ゝず。是の時故の槐里の令朱雲上書して尚方の斬馬劒を得て。佞臣一人の頭を斷らん。佞臣ゝ即ち安昌侯張禹ありと請ふ帝大に怒り師傅を廷辱すると。其罪死を赦すべからずと。御史をして雲

を將き去らしむるに。雲殿の檻に攀ち檻折る。雲大に呼んで曰く。臣下龍逢比干に從つて地下に遊ぶことを得ば足らず。但た未だ聖朝如何と知らざるのみ。と左將軍辛慶忌又叩頭血を流し諫めければ。帝の意解く。其折れたる檻と治むるに當る。帝い其檻を易ると勿くして直臣を旌いせよと曰ひけり。綏和元年王根病んで免し。王莽大司馬と爲る。二年帝在位二十六年にして崩ず。改元する者建始。河平。陽策。鴻嘉。永始。元延。綏和の。七帝威儼嚴にして。朝に臨めば神の如し。然れども酒食に荒る。政外家に在りて。張禹。薛宣翼方鵬相と爲る是れより漢業愈衰。太子位に即く。是を孝哀皇帝と爲す。

孝襄皇帝

帝名い欣。定陶の恭王康の子にして。元帝の孫なり。祖母い傅氏母い丁氏。成帝子なかりし故に立てゝ太子となす。是に至りて位に即く。丁。傅。事を用る大司馬莽を罷む帝董賢を幸し。元壽元年賢を以て大司馬と爲二年帝崩ず。賢亦た自殺しけり。帝在位七年。改元する者二。建平元壽。太皇太后王莽を以て大司馬と爲し。尚書の事を領せしめ。中山王を迎へ位に即かしむ是。を孝平皇帝と爲す。

孝平皇帝

帝。名い箕子。後衍と更む。中山孝王興の子にして。元帝の孫なり。帝位に即くと雖も。太皇太后朝に臨み大司馬莽政を秉り百官と總ぶ。元始元年莽を安漢公と爲す。四年莽が女を立て。皇后とあし。安漢公を宰衡と號して。諸侯王の上に位せしむ。五年。太師孔光卒す。成哀以來。光等三公と爲り。漢の禍と養ひ。諂佞風を成し。上書して莽を頌する者。四十八萬人に至る。因りて莽に九錫を加ふ。臘日莽椒酒を上る中に毒を加ふ。因りて帝崩ず。在位六年。改元する者一。元始と曰ふ。太皇太后詔して宣帝の玄孫嬰を徵して皇太子と爲し孺子嬰と號す。莽攝に居て祚を踐む。之を贊して假皇帝と曰ひ。人民臣下い之を攝皇帝と曰ふ。

孺子嬰 并王莽の事

孺子嬰嗣と爲るの初めと。王莽の居攝元年と爲す。是の年劉宗兵を起して帝を討ち。克たずして死す。二年故の丞相方進の子。東郡の太守翟義兵を起し帝を討ち。克たずして死す。初始元年莽遂に眞天子の位に即き。國を新と號し。漢太皇太后を。新室の文母太皇太后と更め號す。抑王莽は。王曼の子なり。孝元皇后の兄弟八人の中。獨曼早死して侯たらず。莽幼にして

孤となり。他の群兄弟い皆將軍と爲り。五侯子時の侈靡ゑ乘じ。佚游相高ぶる。唯莽節を折り恭儉にして。身を勤め博く學び。衣服儒生の如く。外英俊に交り。內諸父に事へて。曲に禮意あり。新都侯に封せられ。爵位益尊べしと雖も。節操愈謙に。虛譽隆洽にして。遂ゑ漢の政を得。哀帝崩じ。平帝を迎へ。立て五年にして帝と弒し。攝位三年にして。竟に位を奪ひ。新田と號し。始建國元年ゑ孺子嬰を廢して。定安公と爲す。二年。漢の太皇太后王氏崩ず。天鳳四年荊州盜起り。新市の人王匡其帥と爲り。馬武。王常。成丹。往て之に從ひ。綠林山中に藏る。五年莽が大夫揚雄死す。雄字は雲。成帝の世。賦を奏するを以て郎と爲り。三世まで。官を徙らず。莽の世に至り。大夫と爲り。太玄法言を作り。卒章に莽の功德を稱し。伊周に比す。又劇新美新の文を作り。莽を頌す。弟子の事ゑ坐。天祿閣上より投下し遂に死す。瑯琊の樊崇。東海の刀子都等兵を起し。地皇三年崇が兵。其眉を朱にし。他兵と分ち。赤眉と號す綠林の兵分れて。下江新市の兵と爲る。荊州平林の兵起る。漢の宗室劉縯及弟秀。兵を舂陵ゑ起す。新市平林の兵皆之に附く。明年諸將共に劉玄を以て。皇莽と爲す。玄は舂陵の戴侯買の後ゑして。縯秀と祖を同ふす。時に平林軍中にありて。更始將軍と號す。諸將其惰弱と利として之を立つ。玄南面して群臣を朝せしむる時。莽愧汗流て言と能はず。更始と改元し。宛に都す。更始元年劉秀大に莽が兵を昆陽ゑ破る。成紀の隗囂兵を起す。公孫述又た兵を成都に起す。更始將を遣り。武關を破る浙人鄧曄兵を起し。之を長安に迎へ入れ。衆兵莽を誅して首を更始に詣す。莽未だ墓せざる時。官名及び州界を更定し。錢貨を更造し。天下の田を王田と書換。制度を改易し。政令繁多。天下多事なり。是に於て農商業を失ひ。民市道ゑ涕泣するに至り。歲旱蝗かり。人相ひ食ゑ。遠近兵起る。然るに王莽五石の銅を以て威斗を鑄り。北斗の狀の如くし。之を以て衆兵を厭勝せんと欲し。出入ゑ人をして之を負んて行かしめ。漢の兵宮ゑ入るに至つて。猶席を旋らし。斗柄に隨ひて生じ。天德を予ゑ生ず。漢兵其れ予と如何せん。と云ひつゝ遂に首を斬臺ゑ斬らゝ。軍人其身を節解し之を臠す。莽墓より亡に至る迄改元する者。始建國。天鳳。地皇の三。凡て十五年。更始。宛より洛陽に都を徙す。父老司隸校尉の官屬を見て圖らざりき。今日復た漢宮の威儀を見んといと云ふて。涕を流しける。

繪入通俗

十八史畧卷之三

東漢

世祖光武皇帝

帝。名は秀。字は文叔。長沙の定王發の後なり。其先景定發を生む。發舂陵の節侯買を生む。其より侯たること三世。封を徙して。南陽の白水鄉を以て。舂陵と爲し。宗族往て家す。買が少子外回を生。回南頓の令欽を生む。欽南頓に秀を生む。氣を望む者。舂陵を望んで。鬱々葱々然たる氣ありと。王莽貨を改めて貨泉と曰ふ。世人貨泉の字を分ちて。白水眞人と爲せしに。秀竟に白水より起る。秀隆準にして日角あり。尙書を受けて大義に通ず。嘗て蔡少公の家に至る。少公圖讖を知る。因つて言ふ。劉當に天子となるべしと。時に旁に人あり。國師公劉秀のとかと曰ひしに。秀其人に向ひ。何により僕に非ざるとを知るやと戲れける。新市平林の兵起るに及び。南陽騷動し。宛人李通秀を迎へ兵を起す。秀の季兄縯字は伯升。慷慨にして大節あり。常に憤々として。社稷を復せんと欲し。平居家人の生業を事とせず。身を傾け產を

破り。交を天下の雄俊に結ぶ。是に至つて。親客を分遣し。諸縣の兵を發し。縯は自ら舂陵の子弟を發せしに。皆恐懼して伯升我を殺すと曰ひ。亡け匿れけるが。秀う絳衣大冠するを見て驚て曰く。謹厚なる者も復之を爲すかとて。其れより皆安堵しけり。賓客を部署し。法師を招き。新市平林下江の兵皆來り會し。勢盛んなり。然れども兵多くして統一する所無きより。劉氏を立て人望に從はんとす。下江の將王常は。縯を立てんと欲せしに。新林の將帥は。縯の威明を憚り遂に更始を立て縯を大司徒となし。秀を將軍と爲す。秀昆陽、定陵郾を徇へ下す。莽乃ち王邑王尋をして。大に兵を發し山東を平げしめ。長人巨無霸を壘尉となし。虎豹犀象の屬を驅つて兵勢を助け百餘萬と號し。旌旗千里の間に絶へず。諸將其兵盛なるを見て。昆陽に入り散じ去らんとせしに。秀自ら步騎千餘に將とし。尋邑の兵數千を破ぶり。首を斬ると數十級。諸將之を見て。劉將軍平生は。小敵を見るも怯るゝに。今大敵を見て勇るは。甚た怪しむべしと驚駭止まざりけり。秀尙ほ軍を進め敵の中堅を衝き。王尋を殺す。昆陽の城中は秀の勝てるを見。鼓譟して出で。中外勢を合せ。呼聲天地を動かす。莽が兵大に潰走し。伏尸百餘里。時に會ま大雪風にて。屋瓦皆飛ひ雨は車軸を流し。虎豹皆戰き振ひ。滍川に溺死

する者萬數。關中之を聞て震恐し。海內の豪傑響の如く應じ。皆莽が牧守を殺し。白山將軍と稱し。漢の年號を用ゆると。旬月にして天下に偏く。縯兄弟の威名日に盛なりしに。更始之を忌んで。縯を殺す。然れども。秀其意を悟り。敢て喪を服せず。飲食言笑常に異ならず。惟だ枕席に卽き。人知れず涕泣しければ。更始も其心を愧ぢ。秀を大將軍に拜し。武信侯に封じ。後又秀を大司馬と爲し。河北を徇へしむ。秀過ぐる所。悉く莽が苛政を除く。南陽の鄧禹。策を杖つき秀に鄴に追ひ及び。願くば尺寸の功を効して功名を竹帛に垂れんとを願ひ。且つ更始は常才なり帝王の大業を任ずべからず。明公英雄を延攬し。務めて民心を悅ばしめ。高祖の業を立て。萬民の命を救はゞ。天下定むるに足らずと說きければ。秀大に悅び禹を止め。常に計議を定めける。邯鄲の卜者王郎。成帝の子子輿と詐り。邯鄲に入り帝と稱し。幽冀を徇へ下し。州郡響の如く應ず。時に秀薊を徇へ。上谷の太守耿況が子弇を得。北邊の主人なりと悅びける。會ま薊城反して王郎に應ずるを以て。秀城を出で。晨夜に南に馳せ。馮異に豆粥を以て蓐亭に饑を助けられ。滹沱河に至り。王覇の智を以て之を渡し。南宮に至り大風雨に遇ふ。馮異鄧禹火を爇き秀は衣を燎り。異又麥飯を進むるにより饑を凌ぎ。下博城の西に至る。

諸軍惶惑して之く所を知らず。時に白衣の老人あり。指し示して曰く。努力せよ。信都此を去ること八十里。長安の爲めに城守せよ。秀因て之に赴きしよ。獨信都の太守任光。和戎の太守邳彤王郎に下らず秀の至るを聞き。共に之を迎へ。旁縣より精兵を得。檄を移して。王郎を討ず。秀廣阿を拔く。此の時秀輿地圖を披き。鄧禹に示し。天下の郡縣是の如し。今始めて纔かに其一を得たり。然るに子定むるに足らずと云ひしは。如何にぞやと曰へば。禹答へて。方今海內大に亂れ。人明君を思ふ。赤兒の慈母を慕ふが如し。古の興る者は。德の厚薄にありて。大小に有らざるなりと答へけり。會ま耿弇上谷漁陽の兵を以て。行郡縣を定め。秀に廣阿に會し。邯鄲を拔き王郎を斬る。秀吏民の王郎と交通せし書數千章を燒き。人心を安じけり。時に軍中。馮異を大樹將軍と號し。其部下に屬せんことを願へり。馮異人となり謙退にして伐らず。諸將功を論ずる毎に。異常に獨樹下に屏くを以てなり。更始。秀を立て。蕭王と爲し。兵を罷めしむ。秀耿弇の言を用ゐ。徵に就かず。銅馬の諸賊を降し。赤心を推して。之を服せしめ。南河內を徇ふ。時に赤眉西のかた長安を攻む。王乃ち鄧禹をして關に入しむ。禹。寇恂を。文武備具し牧民御衆の才ありと薦め。河內を守らしめ。王自ら燕趙を徇へ。諸賊を破り。還つて中山に至り。諸將尊號を上るも許さず。漸く耿純馮異の言を用ゐ。遂に皇帝の位に。鄗南に卽き。建武と改元す。赤眉樊崇等は。宗室の劉盆子を立て帝と爲す。盆子時に年十五。時に軍中にありて羊を牧することを。主りし故被髮徒跣敝衣赭汗にして。衆の拜するを見。恐怖して啼かんと欲せり。賊長安に入るに當り。更始走る。帝乃ち更始を淮陽王に封ず。宛人卓茂嘗て密の令と爲り。敎化大に行はれ。道遺たるを拾はず。因つて帝位に卽き。先づ茂を訪ひ大傅となし。褒德侯に封ず次で洛陽に都す。時に關中未だ定まらず。鄧禹百姓を勞來て。其名關西に振ふ。然るに長安にて赤眉と戰ひ利あらず。走つて京師に還り。復馮異と兵を合せ。赤眉と回溪に戰ひ亦破られしが。卒に大に赤眉を崤底に破りけり。帝璽書を賜ひ。異を勞して。始め翅を回溪に垂ると雖も。終に能く翼を澠池に奮ふ。之を東隅に失して之を桑榆に收むと謂ふべしと。樊宗卒に劉盆子丞相徐宣等を將ゐて降り。宣叩頭して。虎口を去て。慈母に皈す。誠歡誠喜限りなしと云ふ。帝之を聞き。卿は所謂る鐵中の錚々たる者。庸中の佼々たる者なりとて。各田宅を賜けり。劉永。更始の時に梁王と爲り。更始亡びて後。帝と稱す。淮陽の人之を斬て降る。漁陽の太守彭寵が奴。寵を斬て降る。初め寵。帝の王郎を討つ時に。功ありし